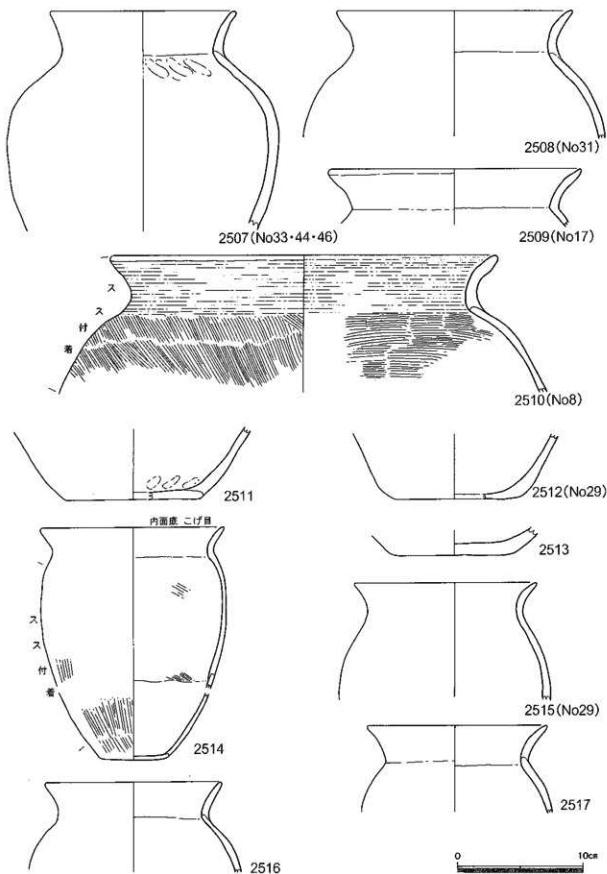
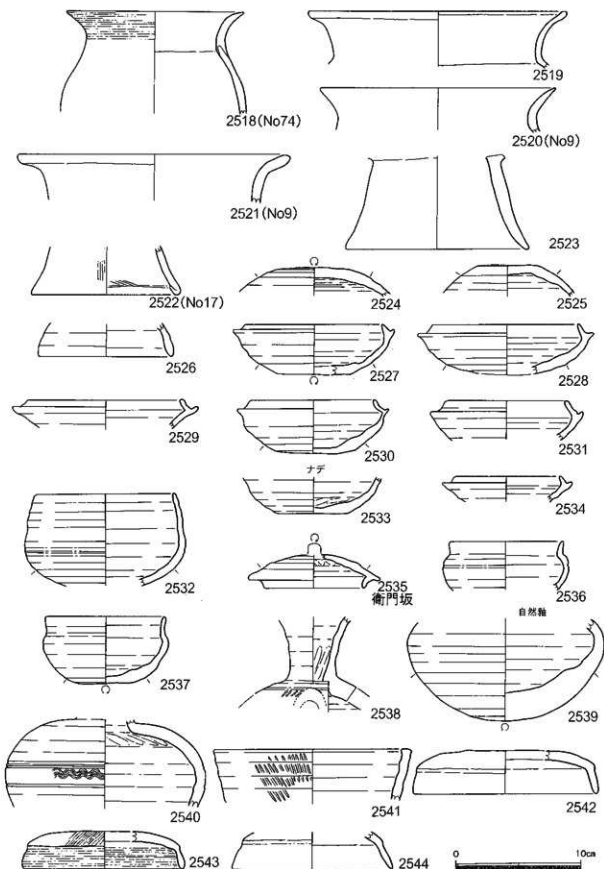




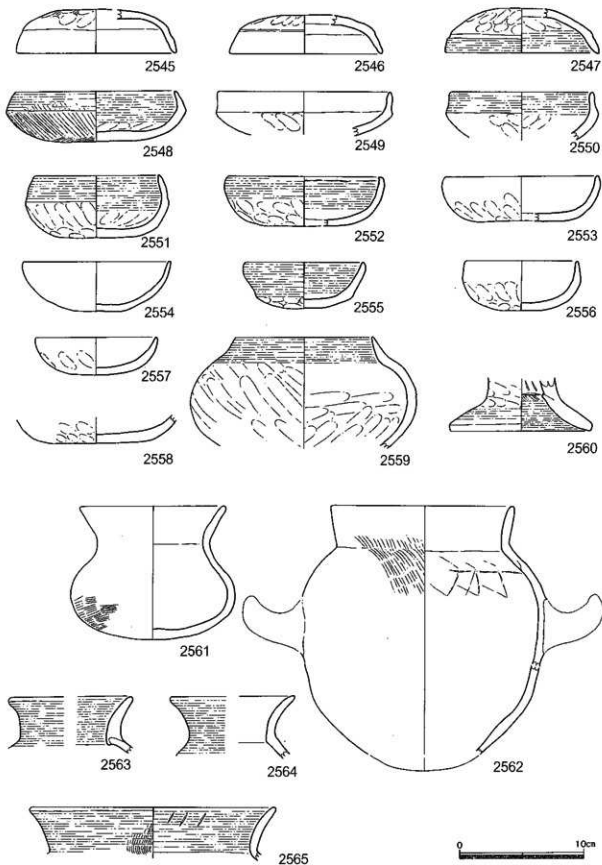
第157図 古墳中期～奈良時代土器実測図 117

2507～2517=SD244上層



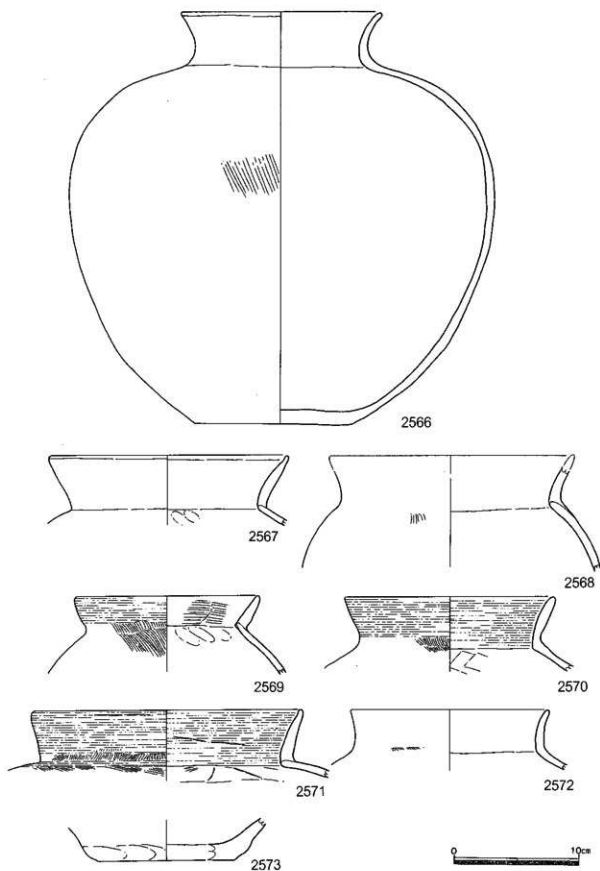
第158図 古墳中期～奈良時代土器実測図 118

2518～2523=SD244上層
2524～2544=SD244下層



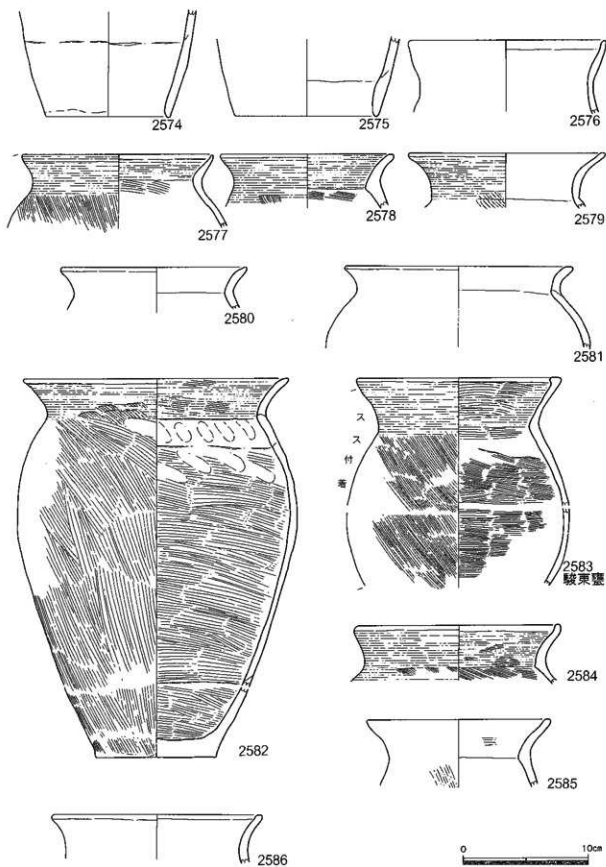
第159図 古墳中期～奈良時代土器実測図 119

2545～2565＝SD244下層



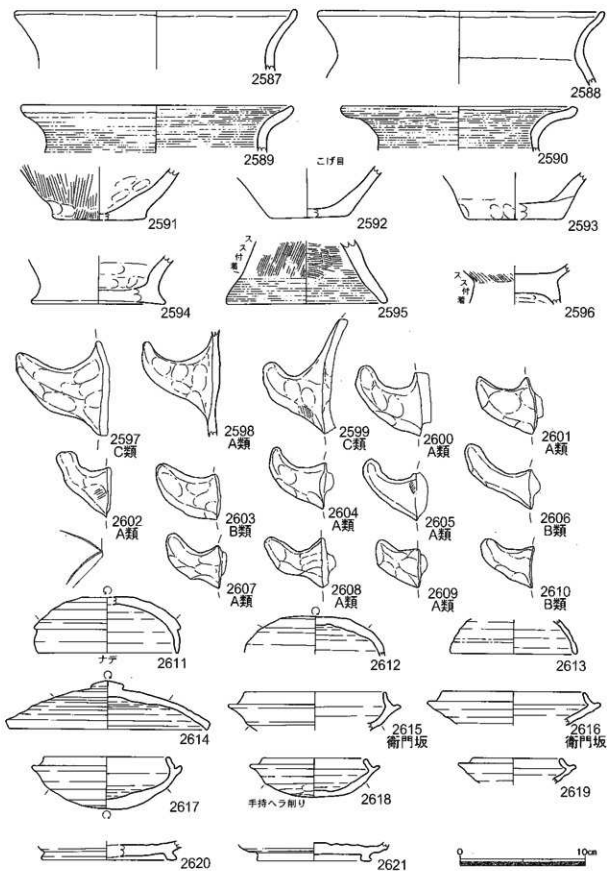
第160図 古墳中期～奈良時代土器実測図 120

2566～2573＝SD244下層



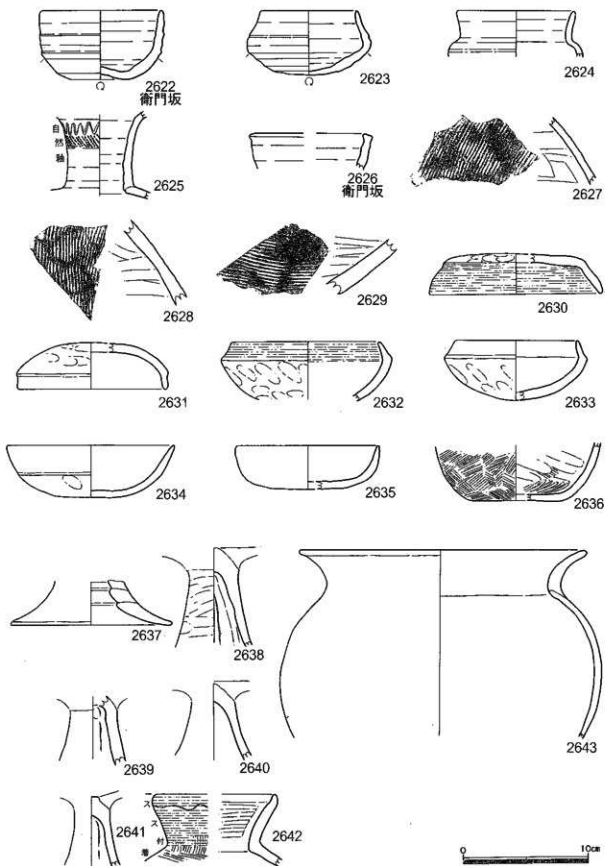
第161図 古墳中期～奈良時代土器実測図 121

2574～2586＝SD244下層



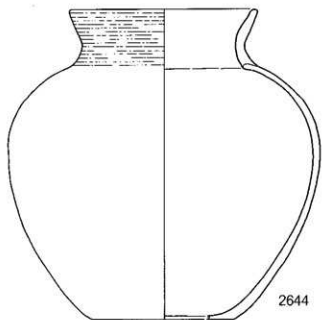
第162図 古墳中期～奈良時代土器実測図 122

2587～2610=SD244下層
2611～2621=SD246

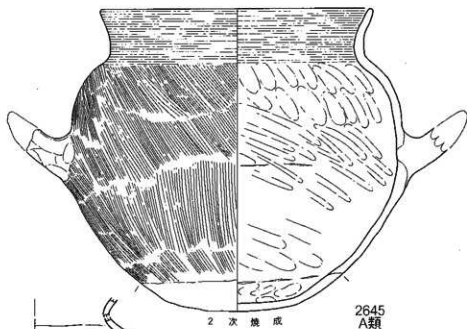


第163図 古墳中期～奈良時代土器実測図 123

2622～2643=SD246

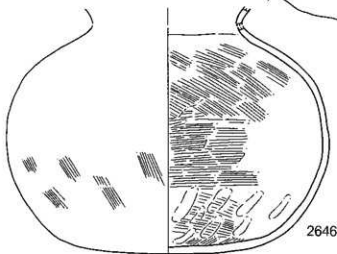


2644



2 次 焼 成

2645
A類

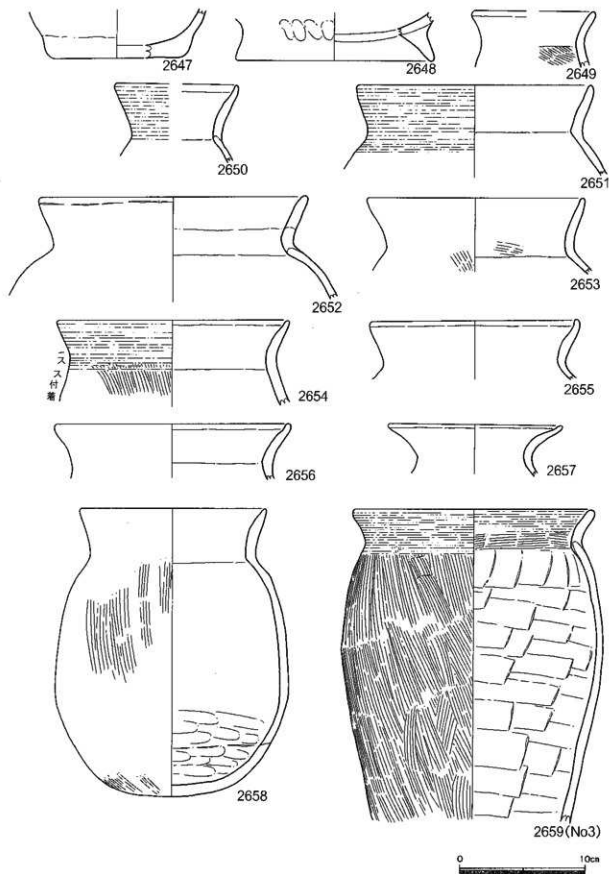


2646



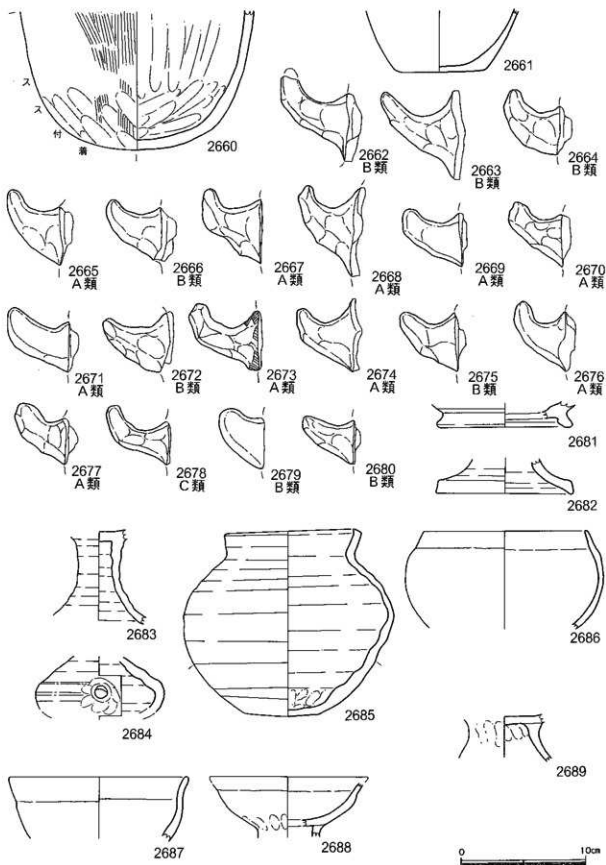
第164図 古墳中期～奈良時代土器実測図 124

2644～2646＝SD246



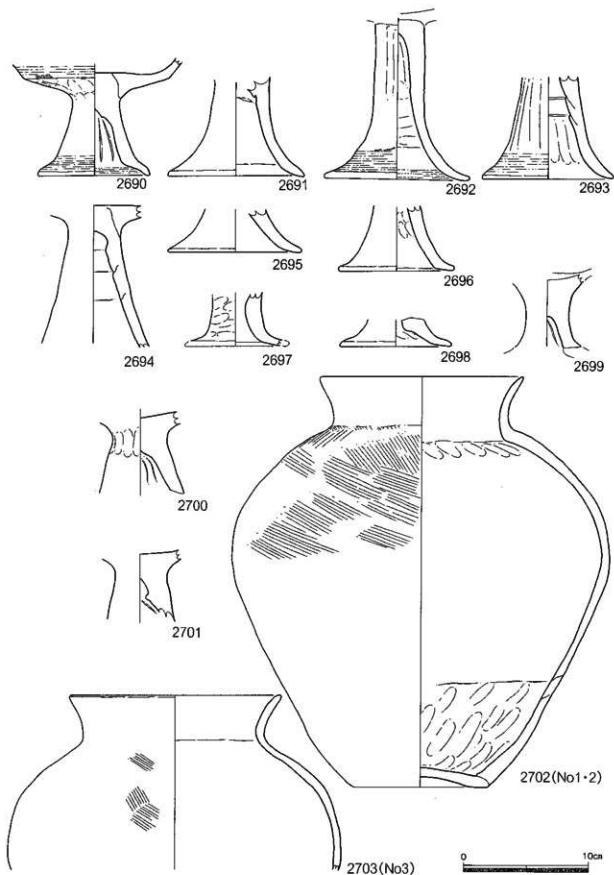
第165図 古墳中期～奈良時代土器実測図 125

2647～2659=SD246



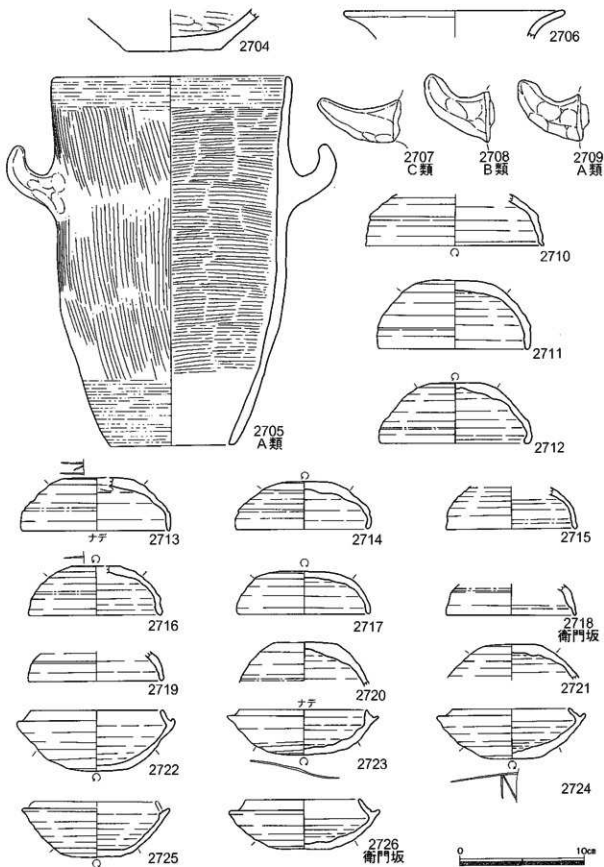
第166図 古墳中期～奈良時代土器実測図 126

2660～2680=SD246
2681～2689=SD248



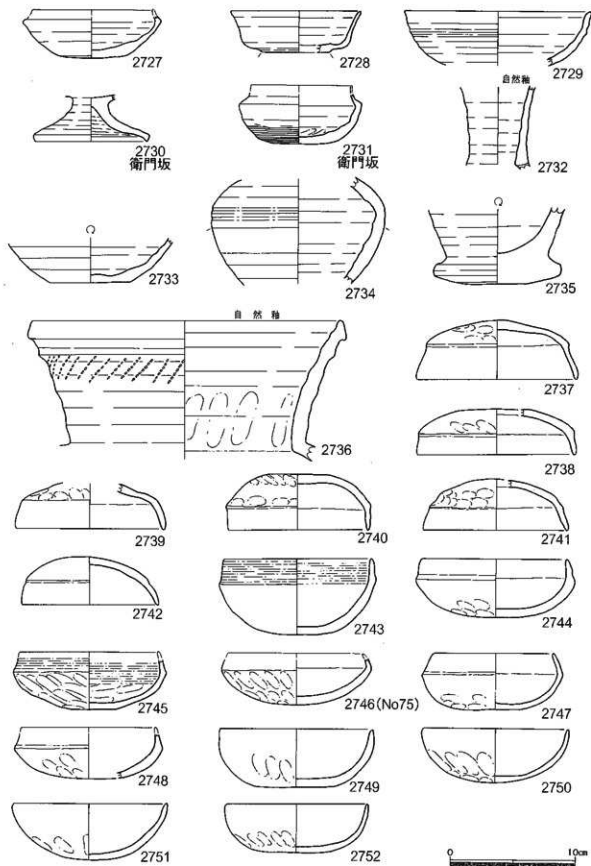
第167図 古墳中期～奈良時代土器実測図 127

2690～2703=SD248



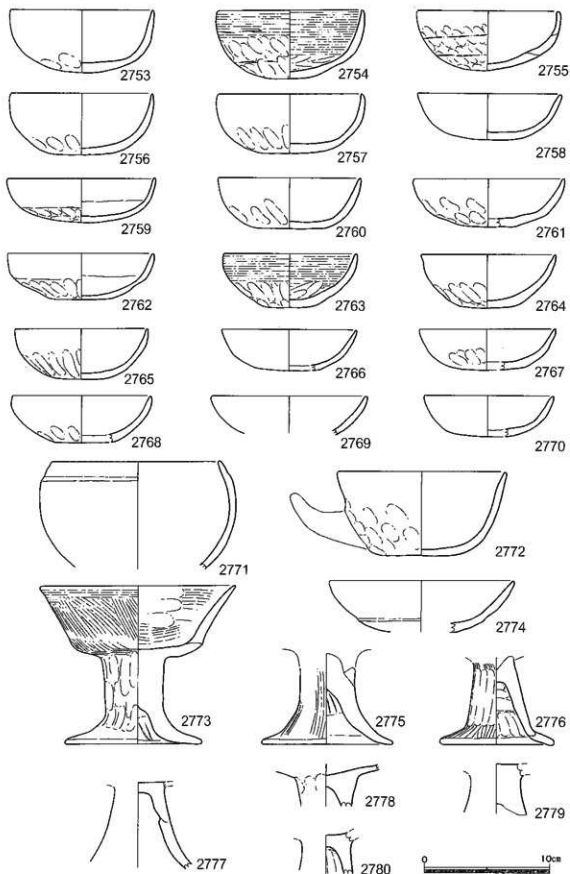
第168図 古墳中期～奈良時代土器実測図 128

2704～2709=SD248
2710～2726=SD260



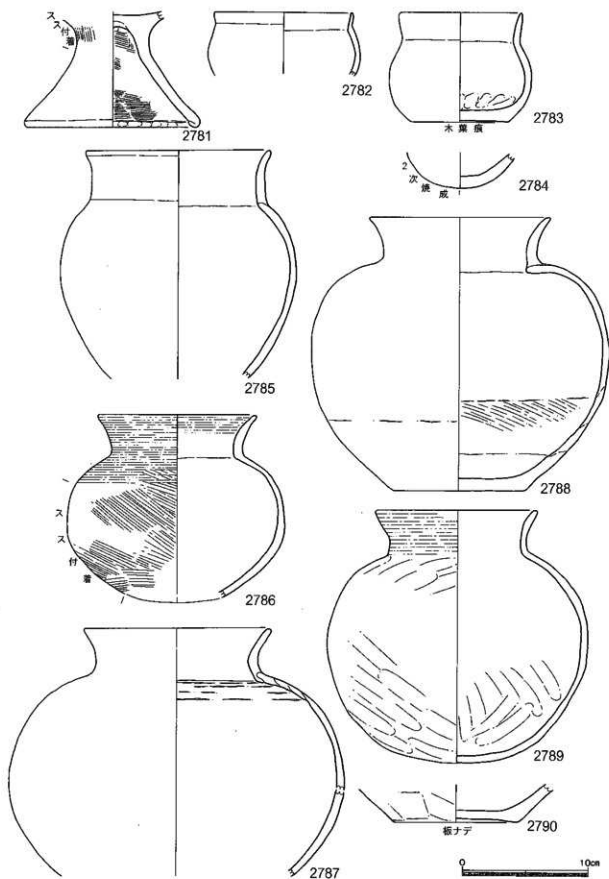
第169図 古墳中期～奈良時代土器実測図 129

2727～2752=SD260



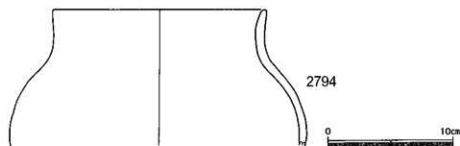
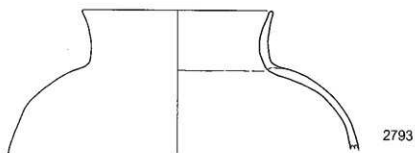
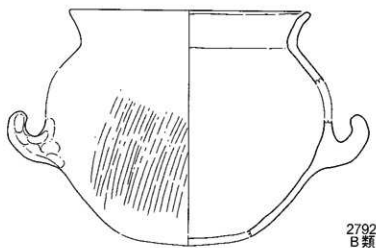
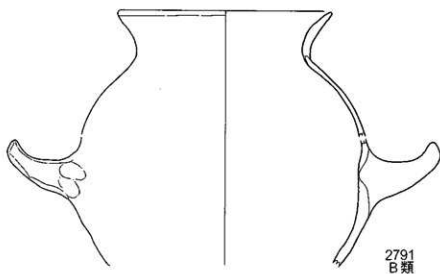
第170図 古墳中期～奈良時代土器実測図 130

2753～2780=SD260



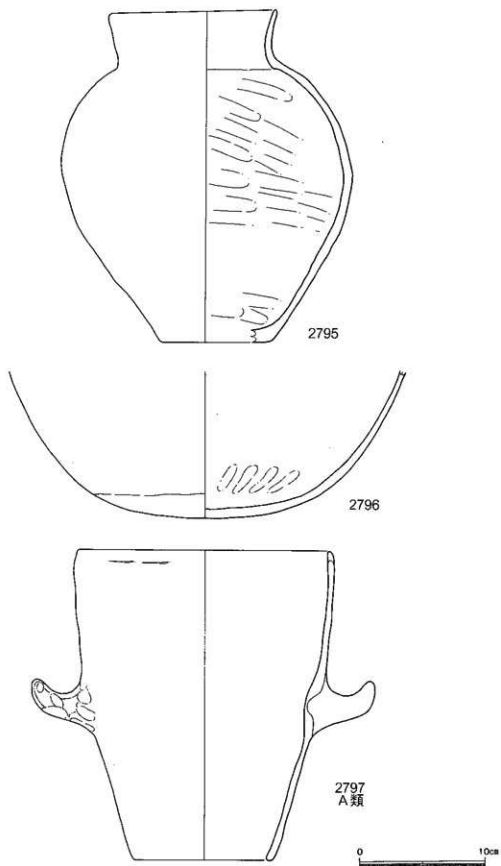
第171図 古墳中期～奈良時代土器実測図 131

2781～2790=SD260



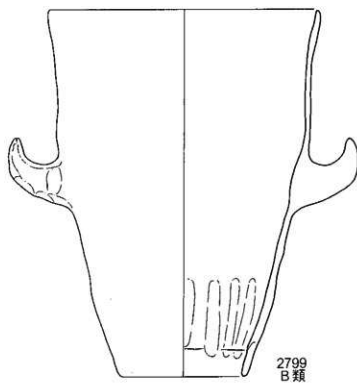
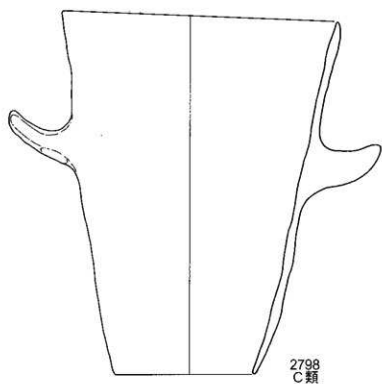
第172図 古墳中期～奈良時代土器実測図 132

2791～2794=SD260



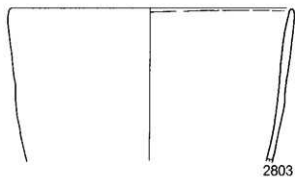
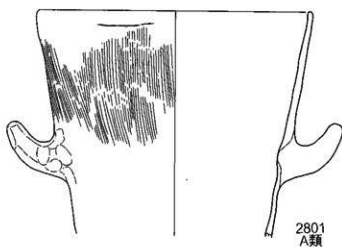
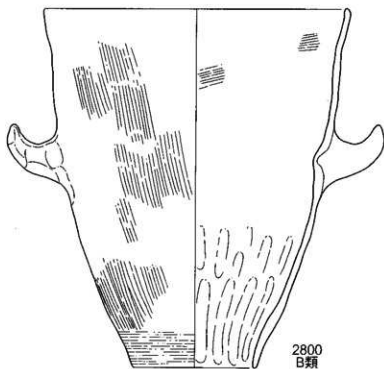
第173図 古墳中期～奈良時代土器実測図 133

2795～2797=SD260



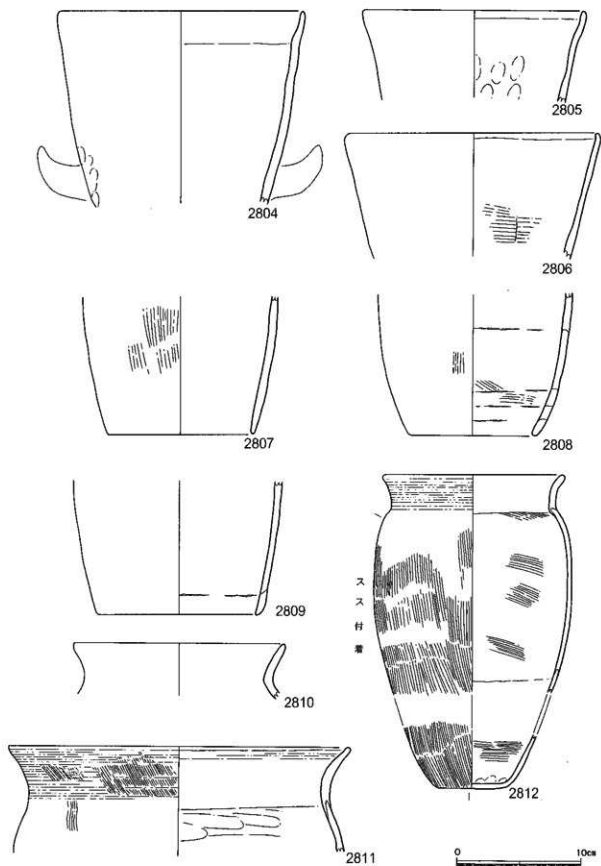
第174図 古墳中期～奈良時代土器実測図 134

2798・2799=SD260



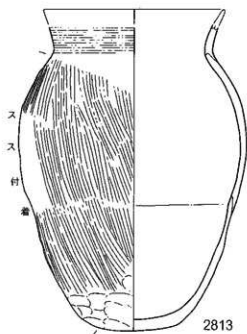
第175図 古墳中期～奈良時代土器実測図 135

2800～2803=SD260

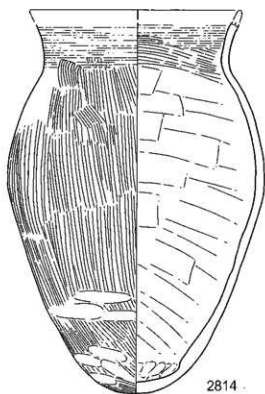


第176図 古墳中期～奈良時代土器実測図 136

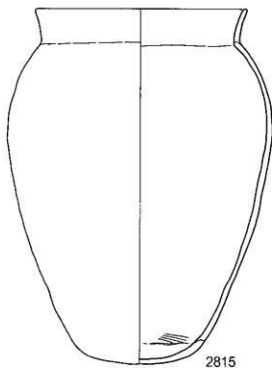
2804～2812=SD260



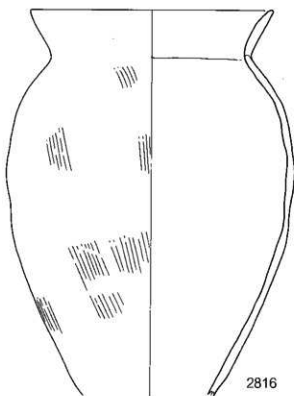
2813



2814



2815



2816



第177図 古墳中期～奈良時代土器実測図 137

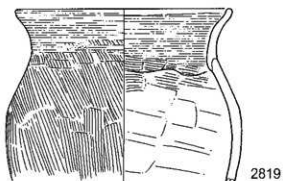
2813～2816＝SD260



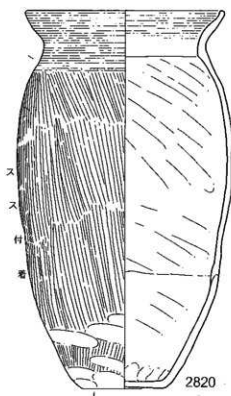
2817



2818



2819



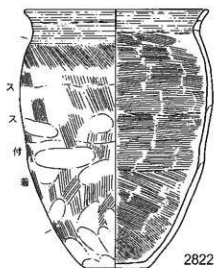
2820



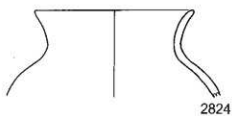
2821



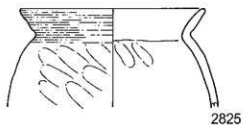
2823



2822



2824

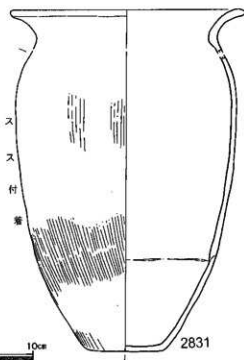
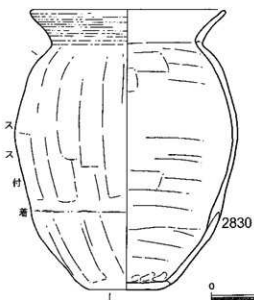
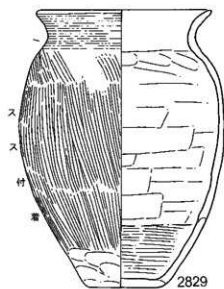
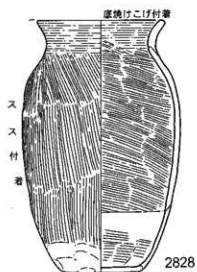
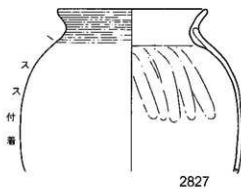
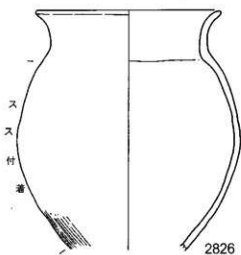


2825



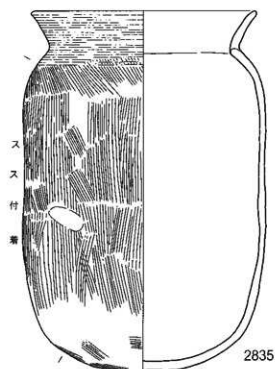
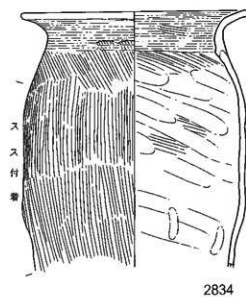
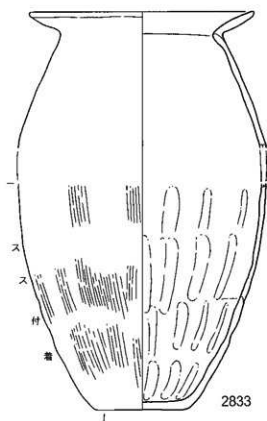
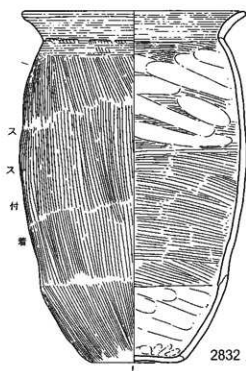
第178図 古墳中期～奈良時代土器実測図 138

2817～2825=SD260



第179図 古墳中期～奈良時代土器実測図 139

2826～2831=SD260



0 10cm

第180図 古墳中期～奈良時代土器実測図 140

2832～2835＝SD260



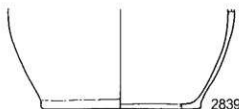
2836



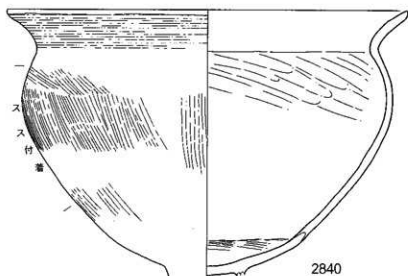
2838



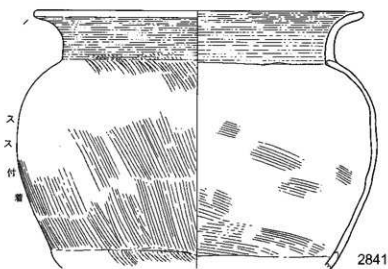
2837



2839



2840

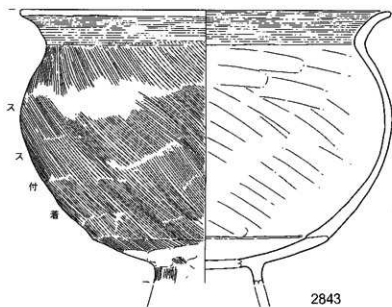
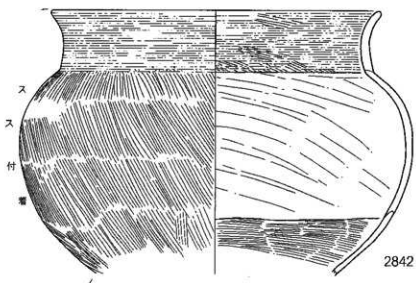


2841

0 10cm

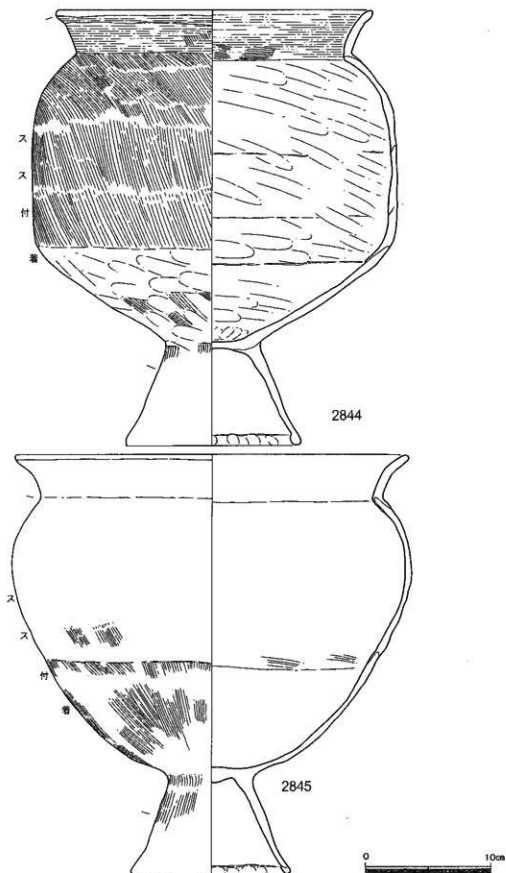
第181図 古墳中期～奈良時代土器実測図 141

2836～2841=SD260



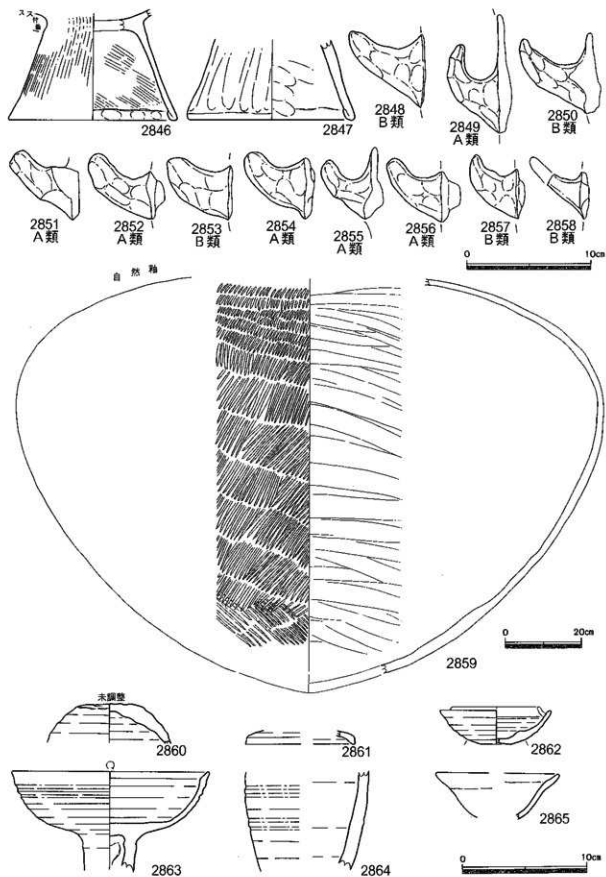
第182図 古墳中期～奈良時代土器実測図 142

2842・2843=SD260



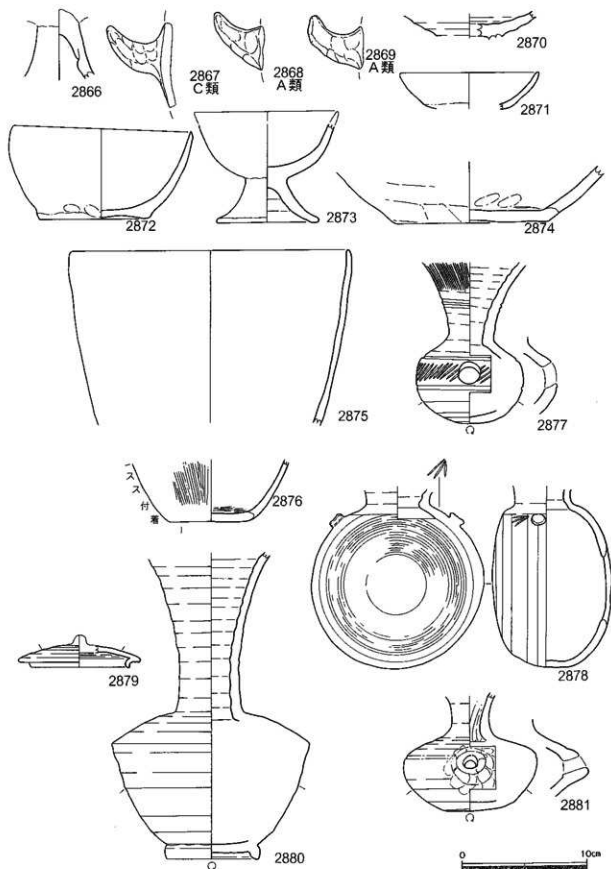
第183図 古墳中期～奈良時代土器実測図 143

2844・2845=SD260



第184図 古墳中期～奈良時代土器実測図 144

2846～2859=SD260
2860～2865=SD261



第185図 古墳中期～奈良時代土器実測図145

2866～2869＝SD261

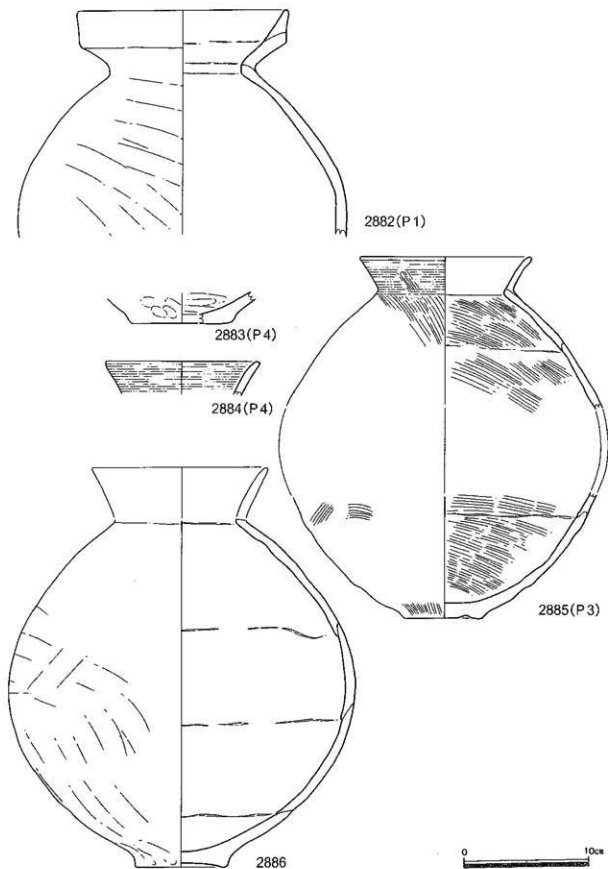
2870～2876＝SD282

2877＝SK55

2878＝SK57

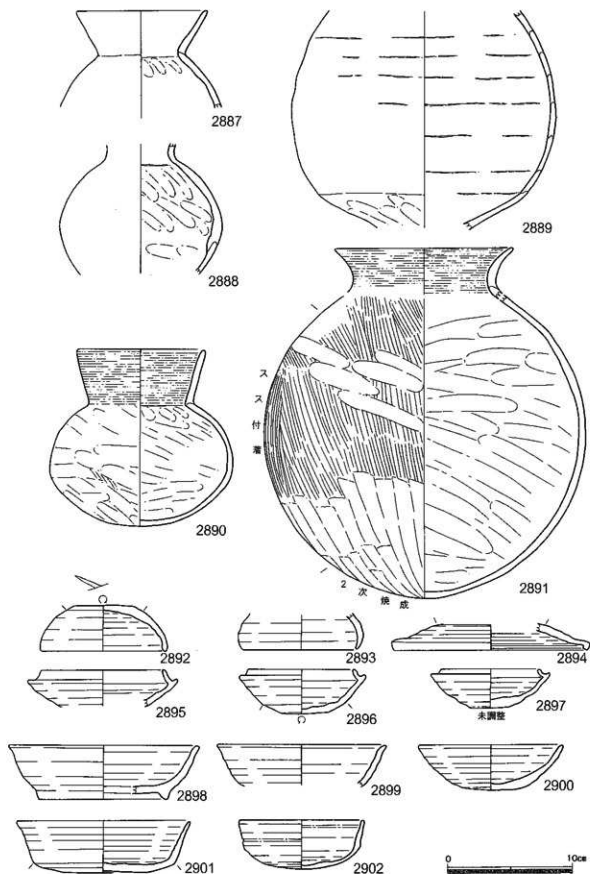
2879・2880＝SK64

2881＝SD91付近



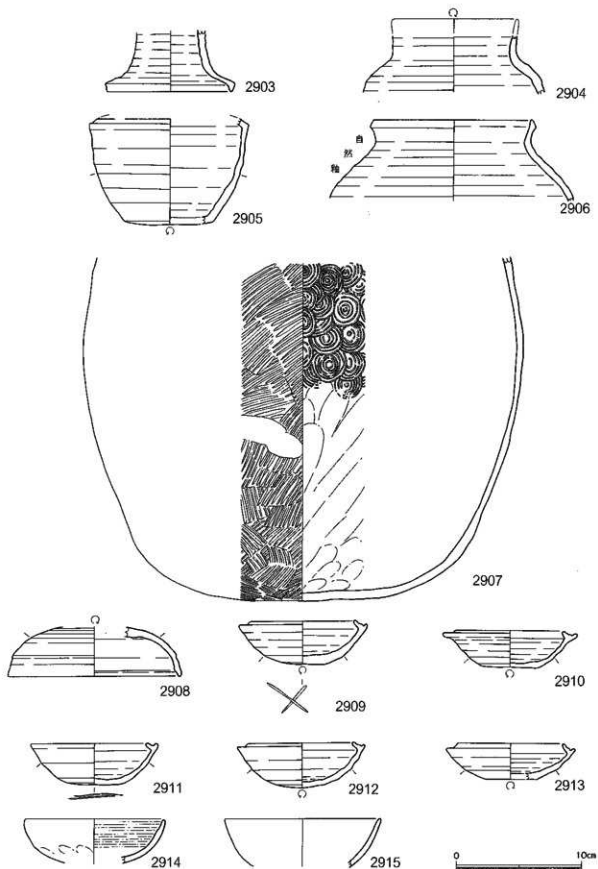
第186図 古墳中期～奈良時代土器実測図 146

2882～2886=113Ⅲa層遺物集中



第187図 古墳中期～奈良時代土器実測図 147

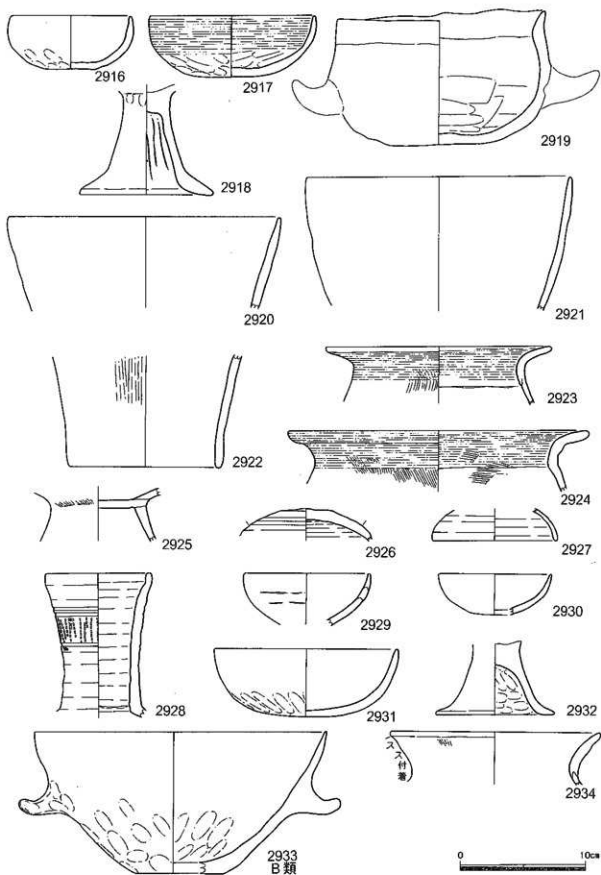
2887～2891＝K11Ⅲa層遺物集中
 2892～2902＝L13Ⅲa層遺物集中
 (SE5上層?)



第188図 古墳中期～奈良時代土器実測図 148

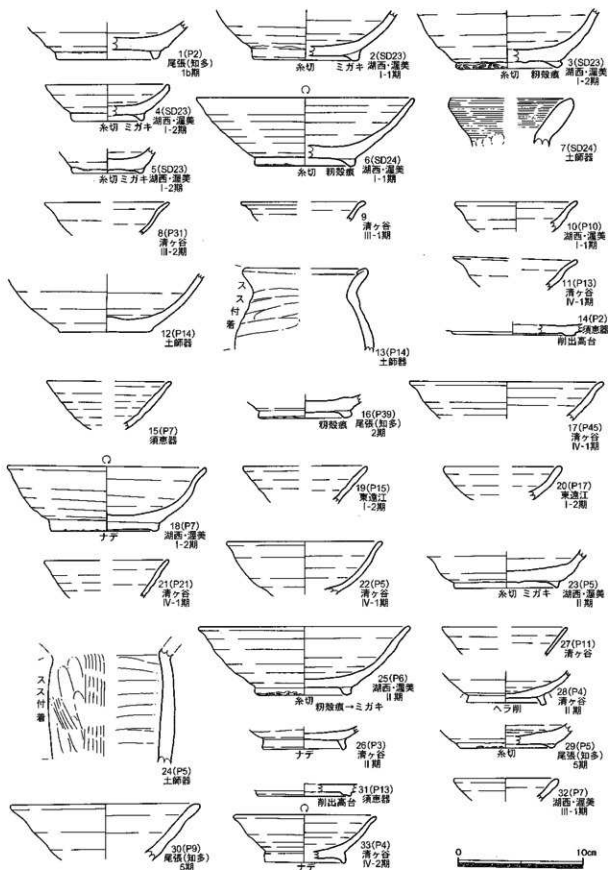
2903～2907=L13Ⅲa層遺物集中
(SE5上層?)

2908～2915=O6Ⅲa層遺物集中



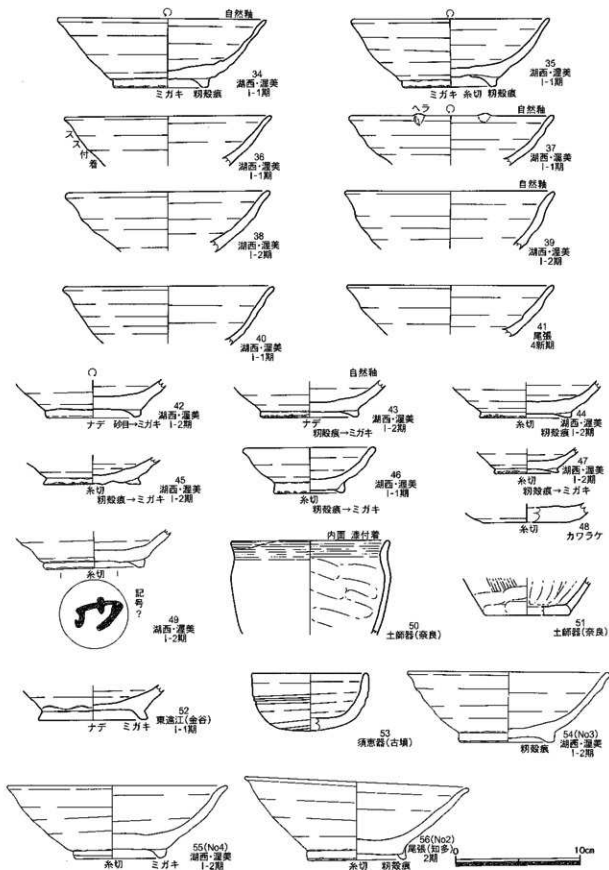
第189図 古墳中期～奈良時代土器実測図 149

2916～2925=O6Ⅲa層遺物集中
2926～2934=P6Ⅲa層遺物集中



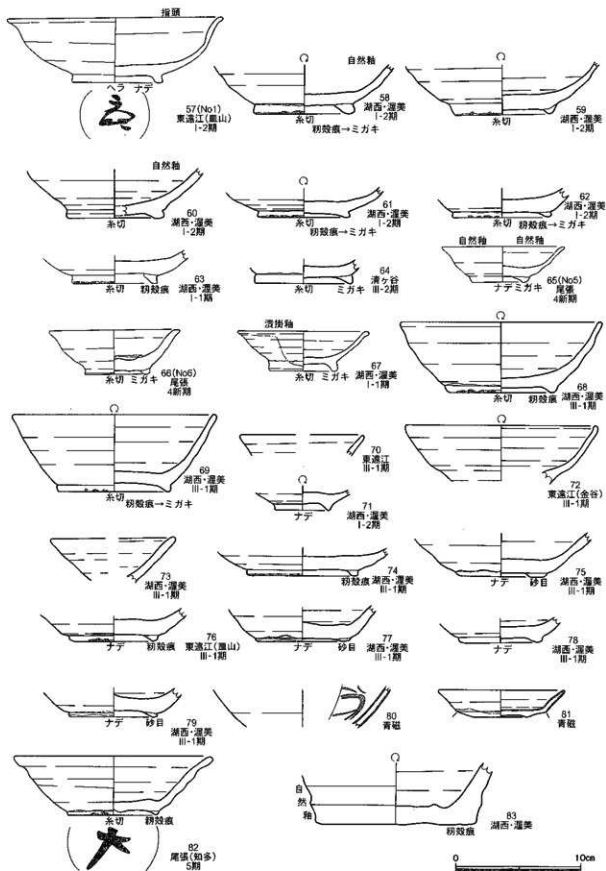
第190図 平安～江戸時代土器実測図 1

- | | | |
|------------|------------|------------|
| 1～8=SB2 | 9=SB4 | 10～13=SB5 |
| 14～17=SB6 | 18=SB7 | 19・20=SB8 |
| 21=SB9 | 22=SB45 | 23～25=SB46 |
| 26～28=SB47 | 29・30=SB50 | 31=SB53 |
| 32=SB54 | 33=SB55 | |



第191図 平安～江戸時代土器実測図 2

34～51=SE1 52・53=SE2
54～56=SE16



第192図 平安～江戸時代土器実測図 3

57～67=SE16

68～71=SE7

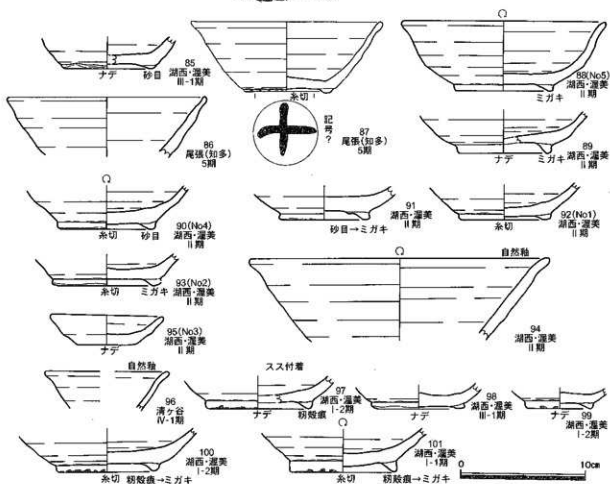
72～81=SE8

82=SE9

83=SE10

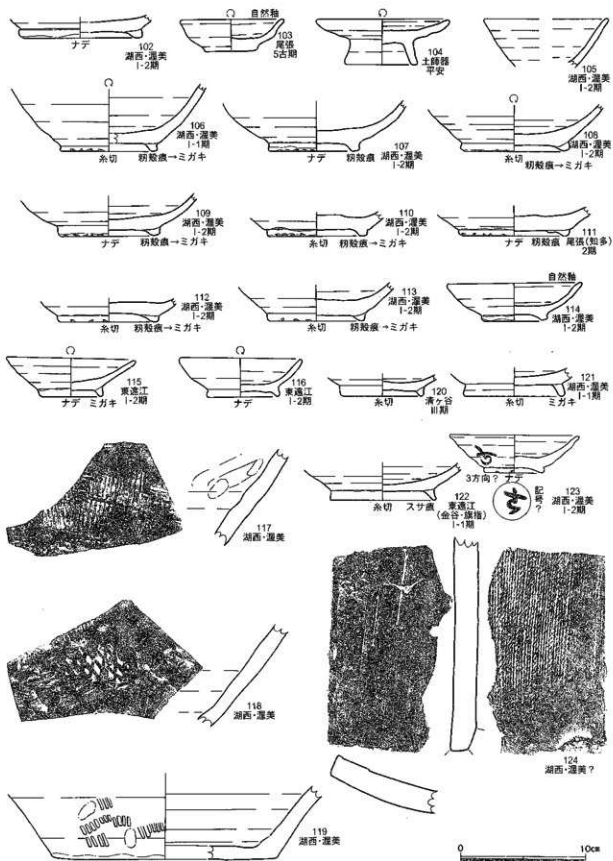


84
湖西・渚美



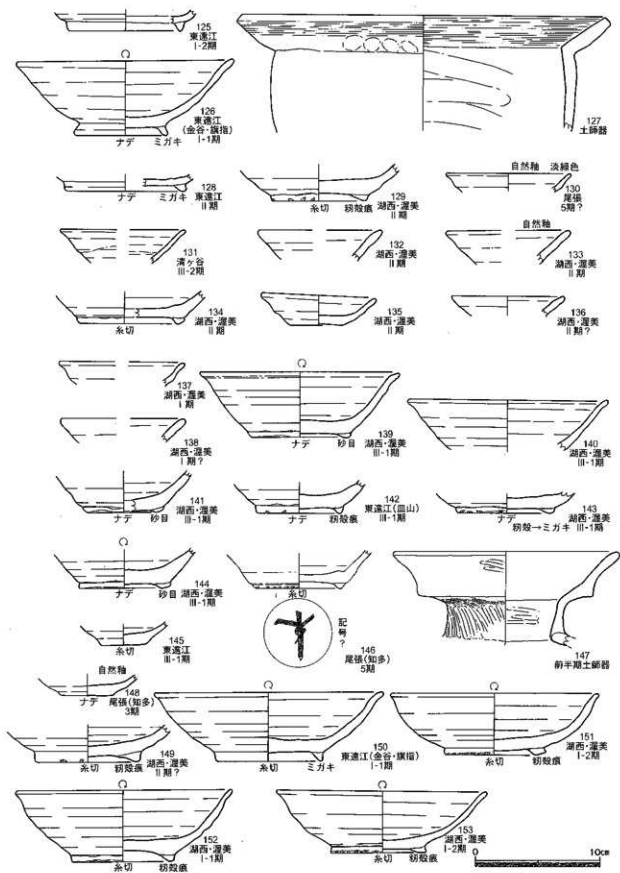
第193図 平安〜江戸時代土器実測図 4

84=SE10 85~87=SE12
88~96=SE13 97~99=SE14
100・101=SE23



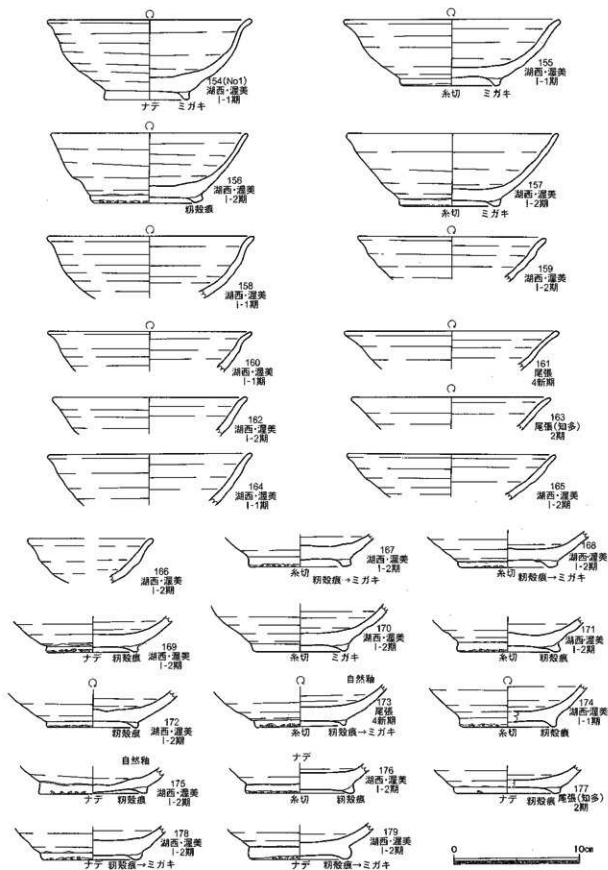
第194図 平安～江戸時代土器実測図 5

102～104=SE23
105～124=SE24



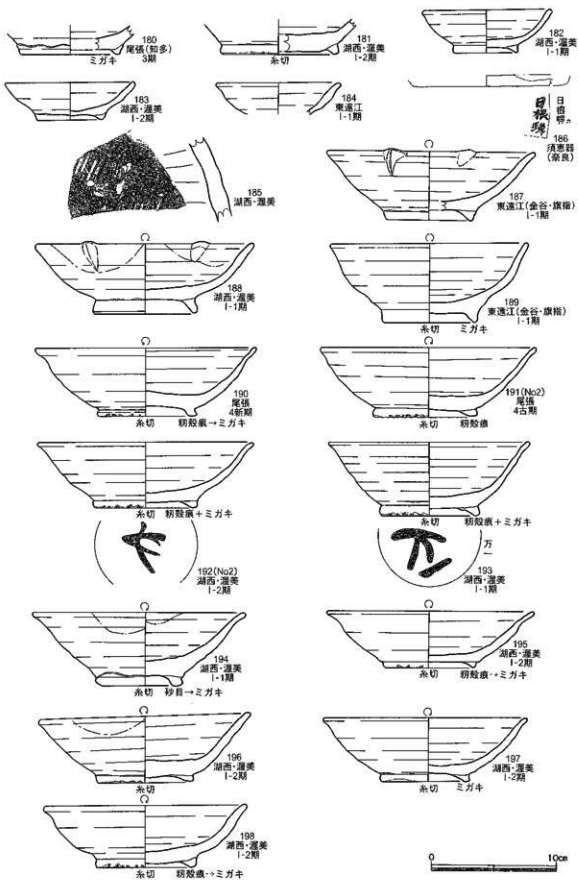
第195図 平安～江戸時代土器実測図 6

- 125=SK11 126・127=SK13
128=SK14 129・130=SK84
131~136=SK86 137・138=SK87
139~146=SK88 147=SK125
148・149=SK126 150~153=SD16



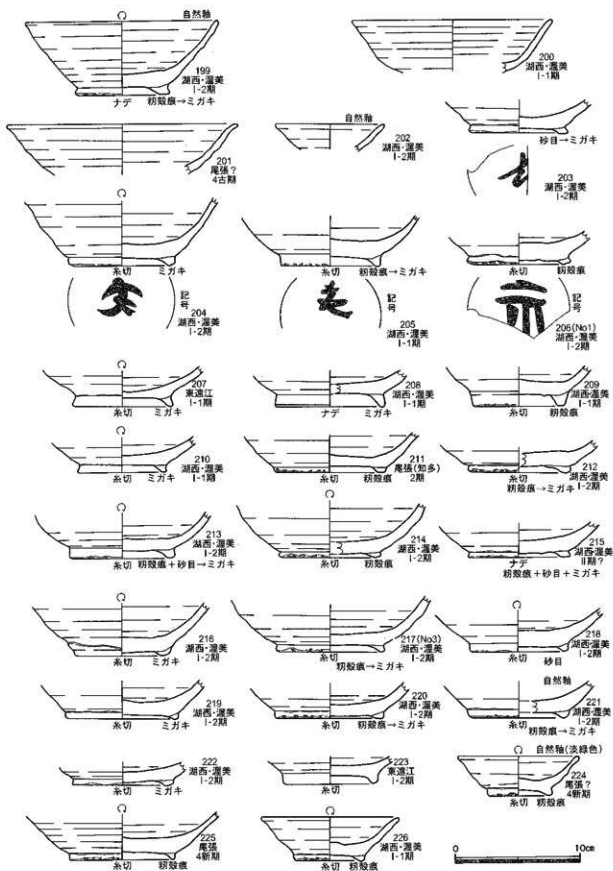
第196図 平安～江戸時代土器実測図 7

154～179=SD16



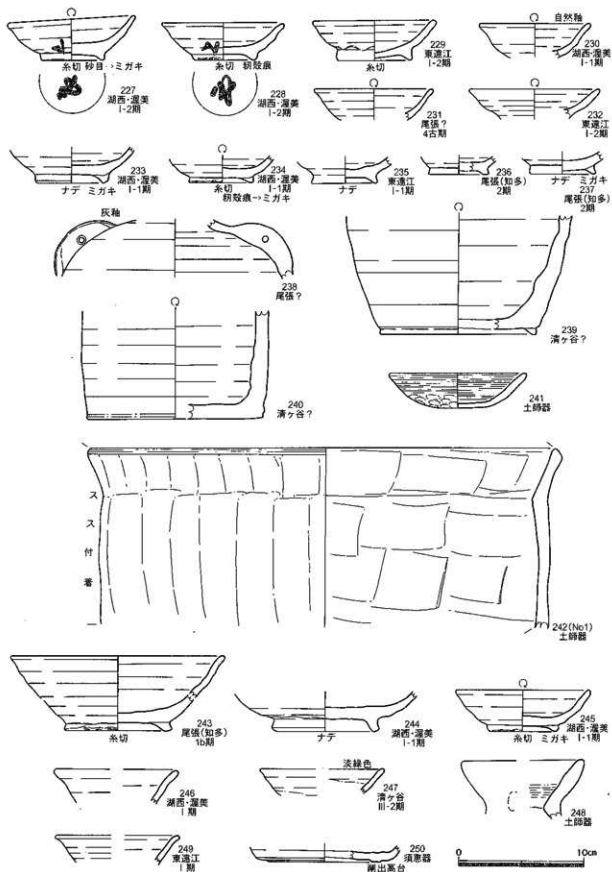
第197図 平安～江戸時代土器実測図 8

180～186=SD16
187～198=SD17



第198図 平安～江戸時代土器実測図 9

199～226=SD17



第199図 平安～江戸時代土器実測図 10

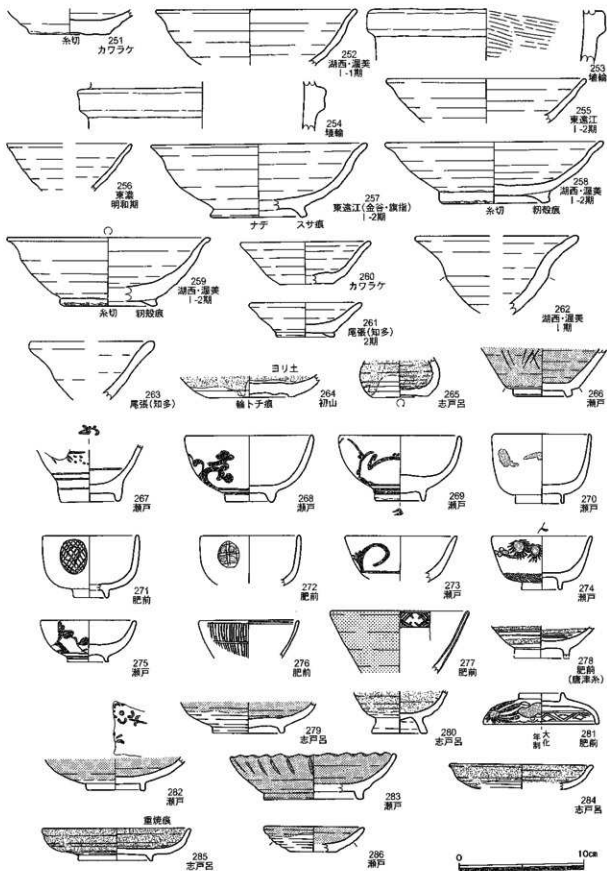
227～242=SD17

243～245=SD25

246=SD39

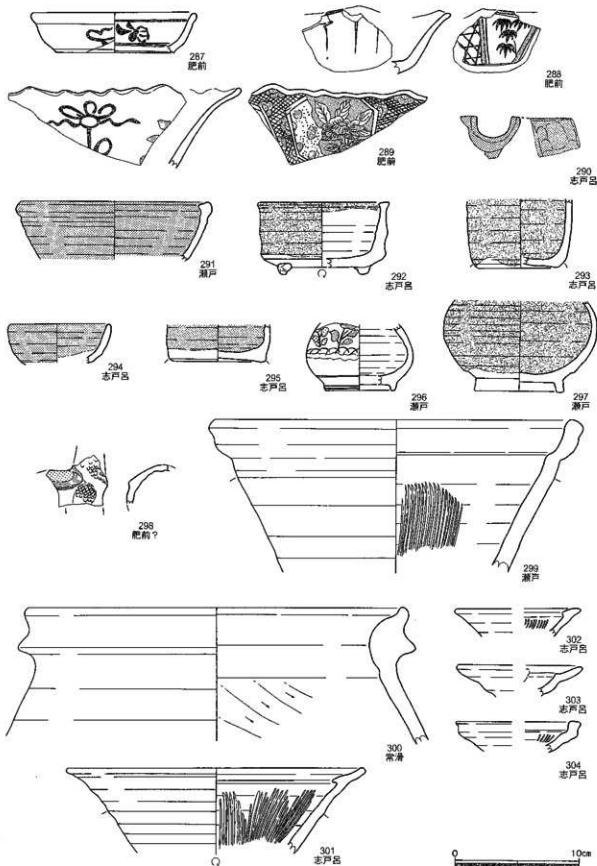
247～249=SD40

250=SD53



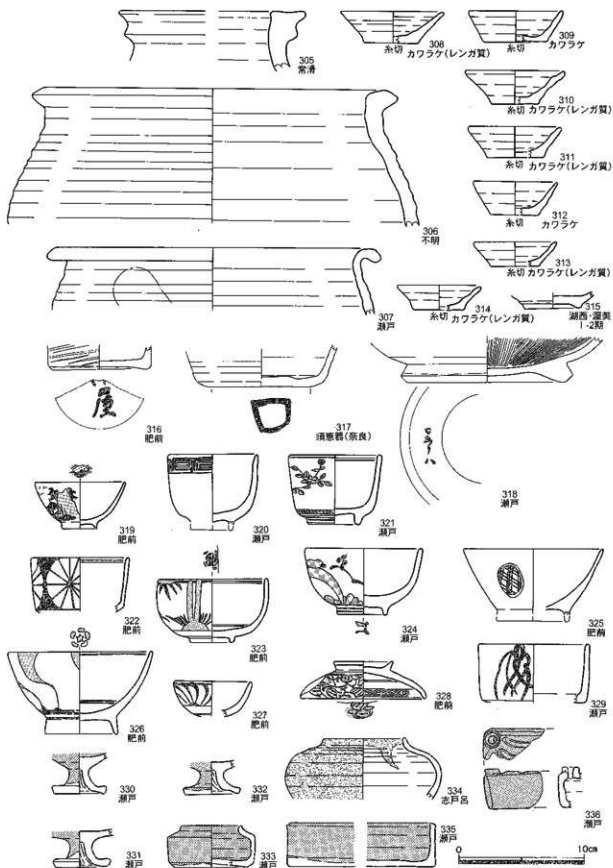
第200図 平安～江戸時代土器実測図 11

251=SD58 252=SD177
253～286=SD185



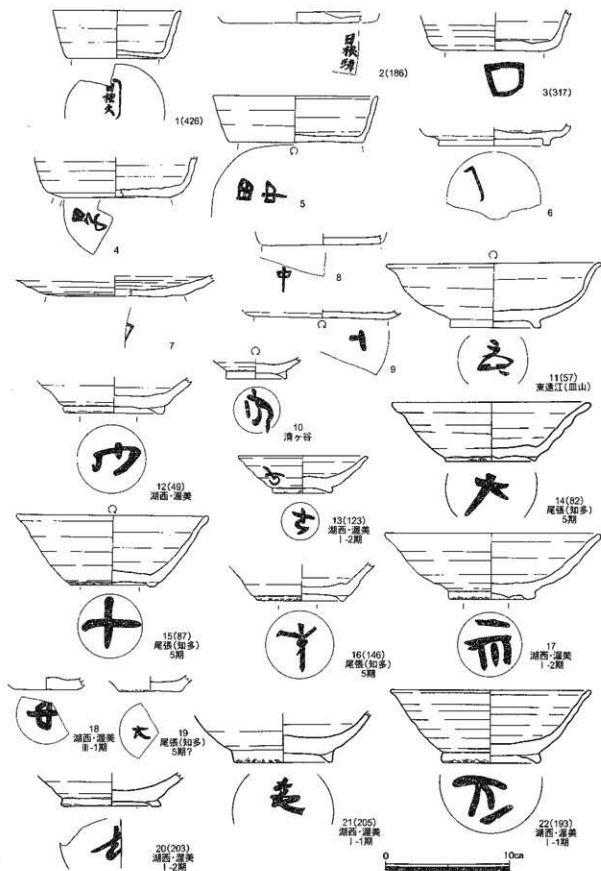
第201図 平安～江戸時代土器実測図 12

287～304=SD185



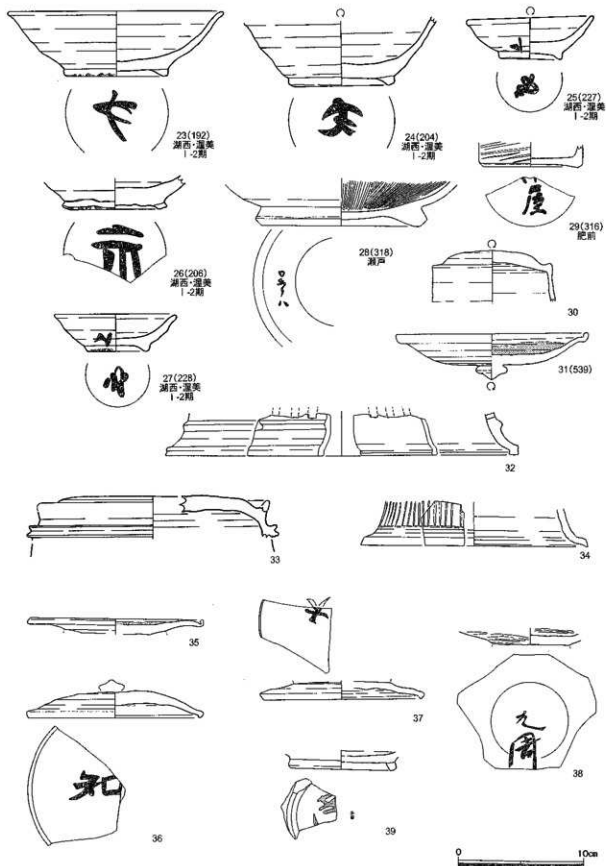
第202図 平安～江戸時代土器実測図 13

305～336=SD185



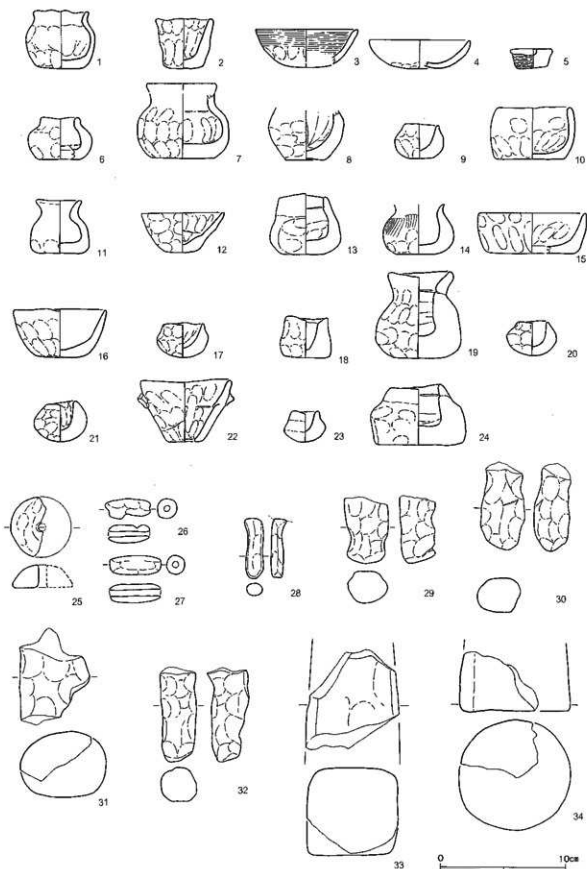
第203図 墨書土器集成図 1

- 1=SE3 2=SD16 3=SD185 4=K4Ⅲa層
 5・6=N10Ⅲa層 7=O10Ⅲa層 10=P309 11=SE6
 12=SE1 13=SE24 14=SE9 15=SE12
 16=SK88 20~22=SD17
 8・9・17~19=北区Ⅱ層



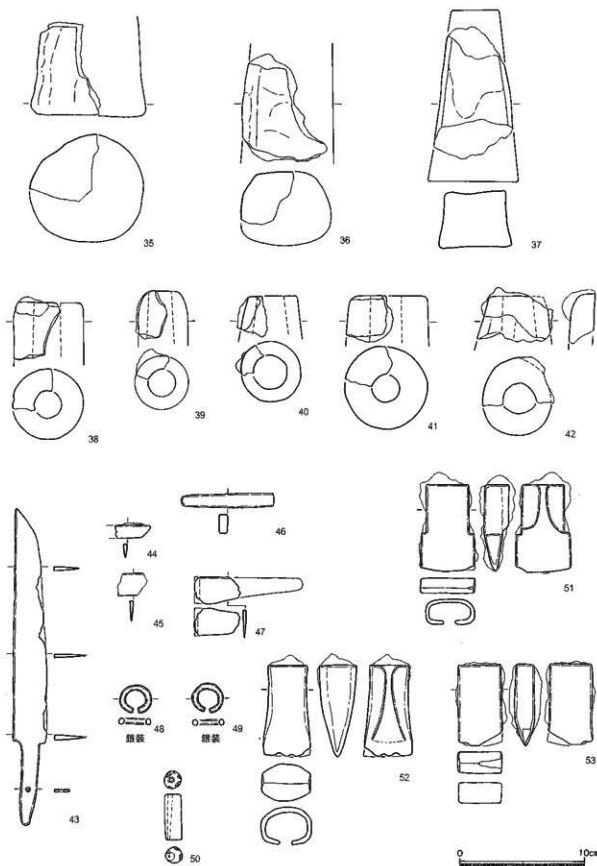
第204図 墨書土器集成図2・陶碗・参考資料実測図

23～27=SD17 28・29=SD185
 30=皿a層 31=SK32
 32=京道地点 33=国一バイパス地点
 34～39=監府領家遺跡



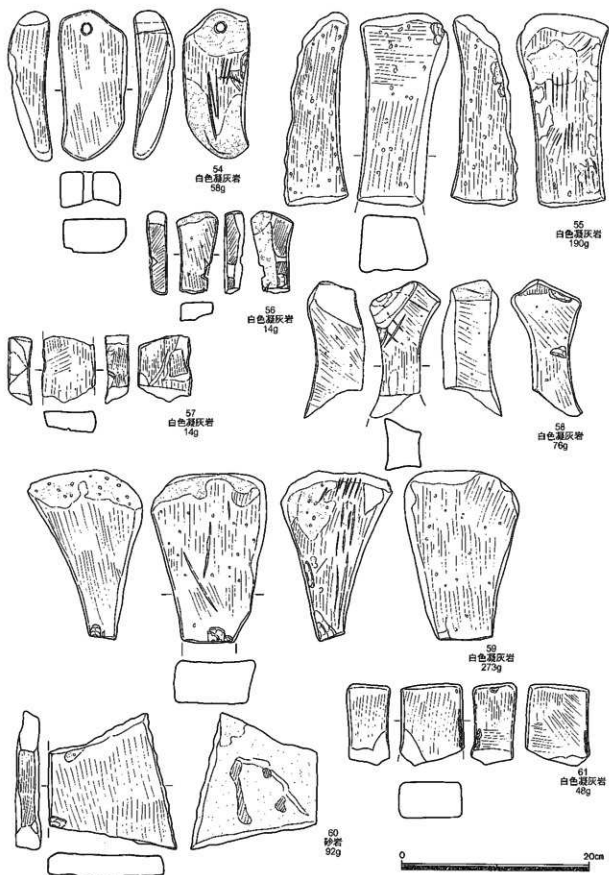
第205図 土製品・金属製品・石製品実測図 1

1=SH21 2=SH4 3・4=SE5 5=SK11
 6=SK27 7・8=SD80 9・10=SD123 11=SD140
 12=SD152 13=SD219 14=SD293 15=SD282
 16=P489 17~24・26・27・31・32=Ⅲa層 25=SD157
 28=SD126 29=SD208 30=SD219 33=SK5 34=SK79



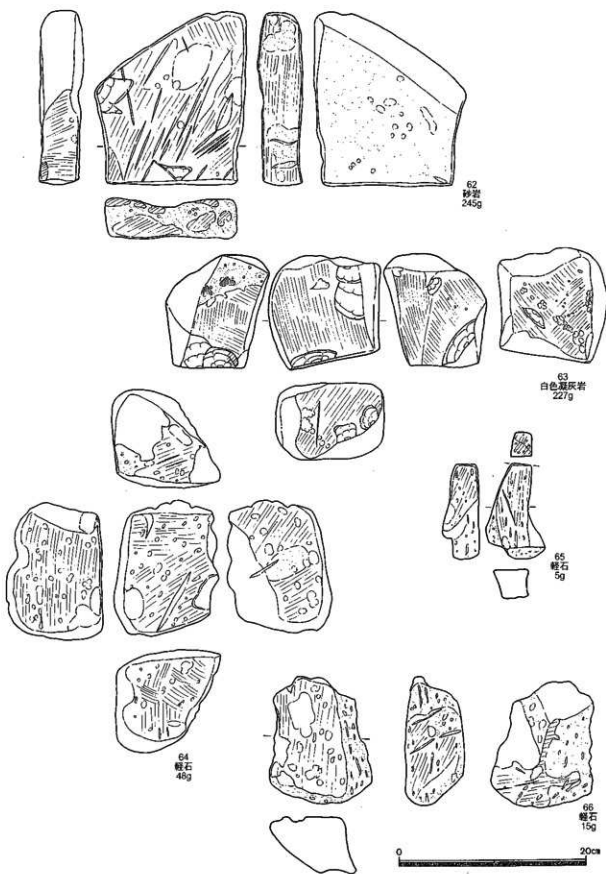
第206図 土製品・金属製品・石製品実測図 2

35=SK79 36=SD80 37=SD231 38=SE19
 39=P1064 40=P1075 41・42・46・47・49・50・52・53=Ⅲa層
 43=SE1 44・45=SD123 48=SE3 51=SD16



第207図 土製品・金属製品・石製品実測図 3

54=SH6 55=SK69 56=SK131
 57=SD188 58=SD131 59=SD231
 60=SD244 61=SD250



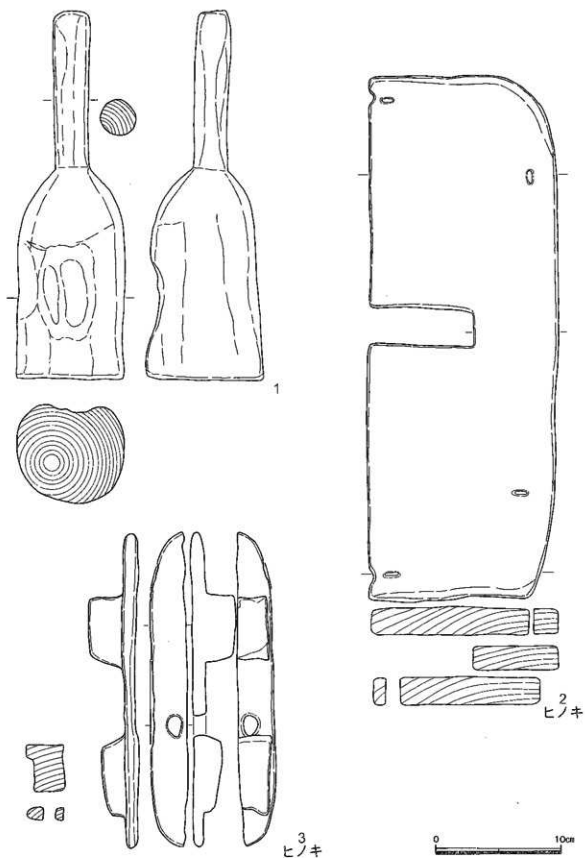
第208図 土製品・金属製品・石製品実測図 4

62=SD250

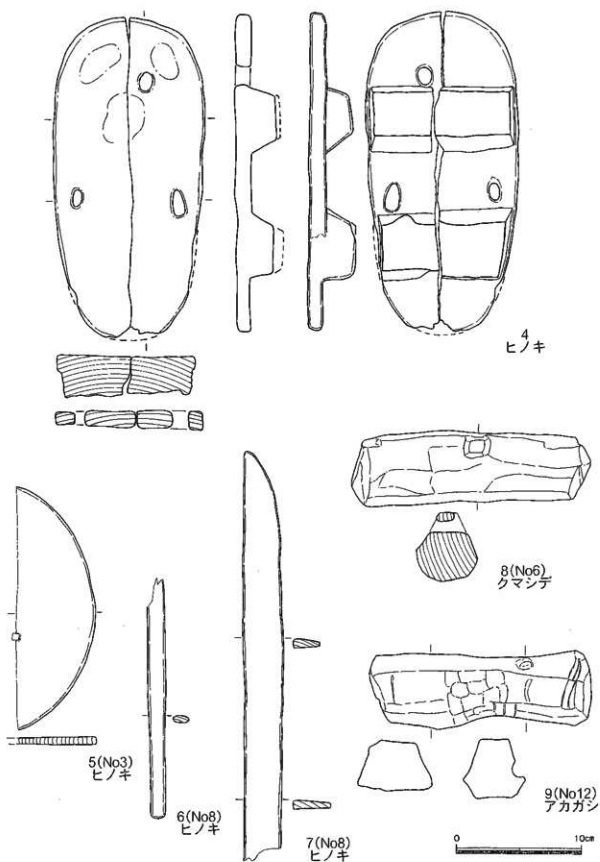
63=Ⅲa層 64=SE24

65=SD248

66=SD231

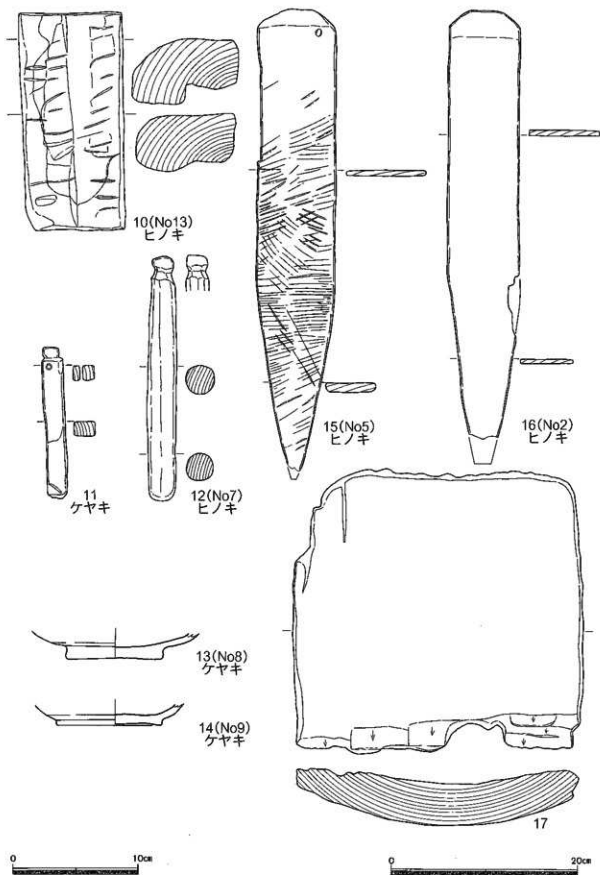


第209図 木製品実測図 1 1=SD269 2=SD148下層 3=SD244



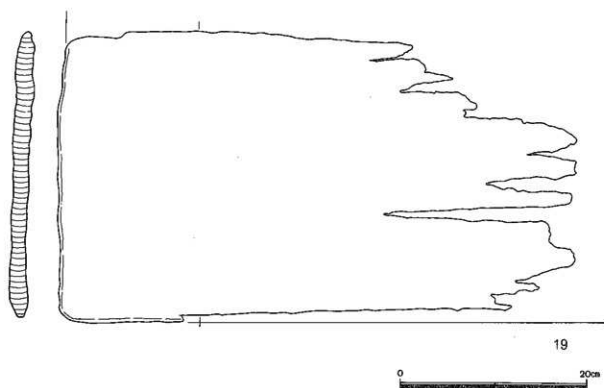
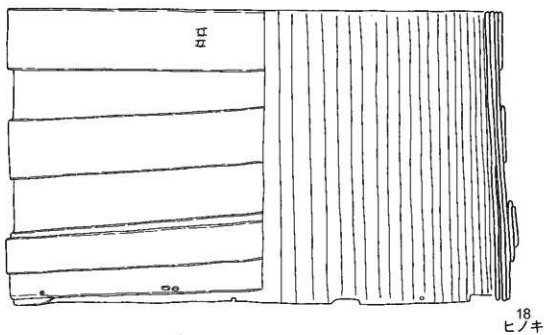
第210図 木製品実測図 2

4=SE6 5=SE5 6~9=SE1



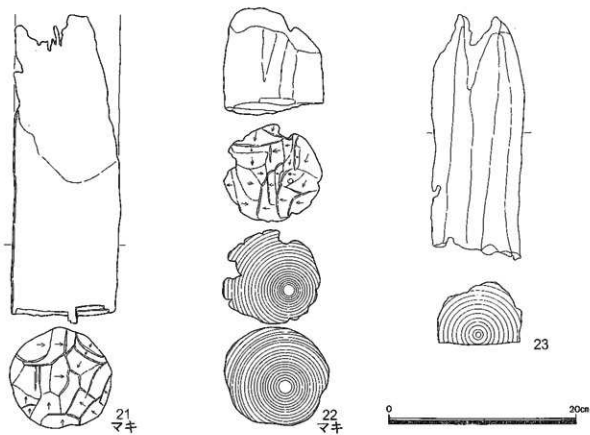
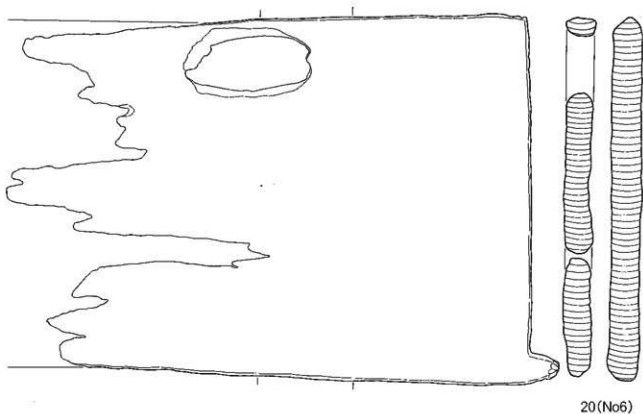
第211図 木製品実測図 3

10~14=SE1 15・16=SE2 17=SB66

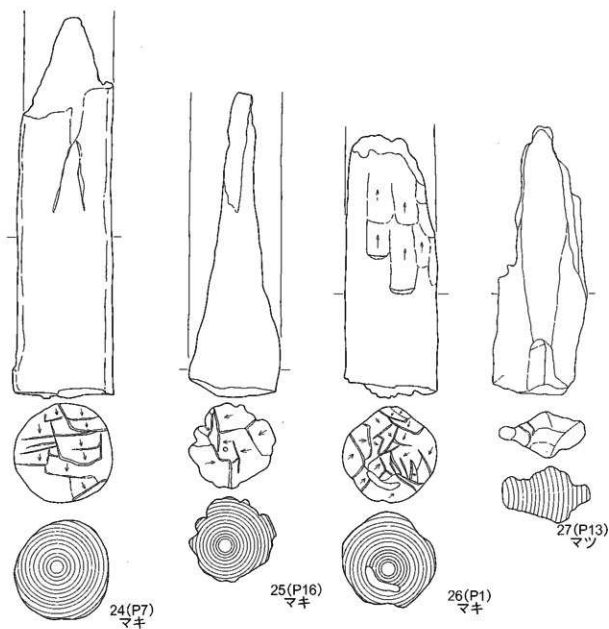


第212図 木製品実測図 4

18=SE8 19=SE5

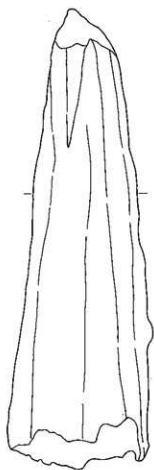


第213図 木製品実測図 5 20=SE5 21・22=SB14 23=SB5

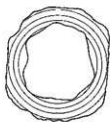


第214図 木製品実測図 6

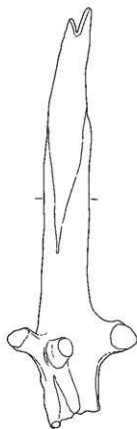
24~27=SB14



28
コナラ



29



30
(内部のPit)

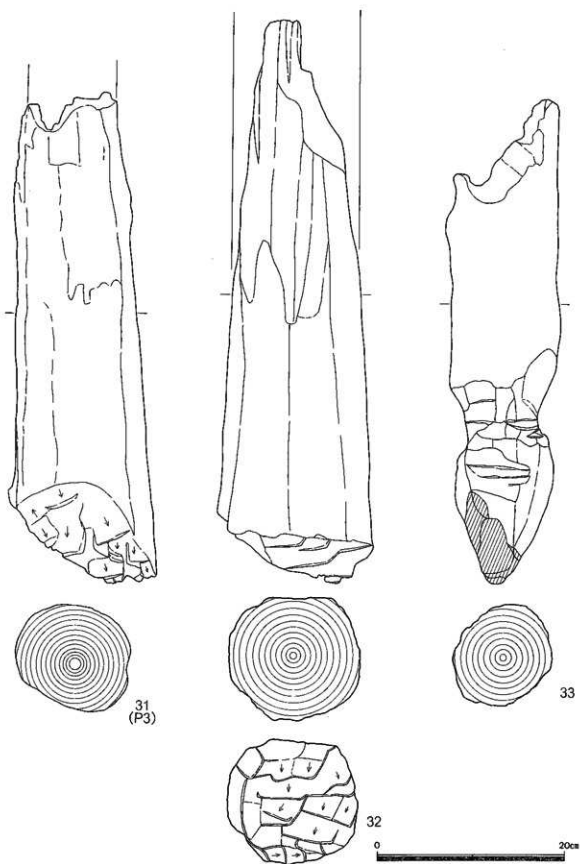


第215図 木製品実測図 7

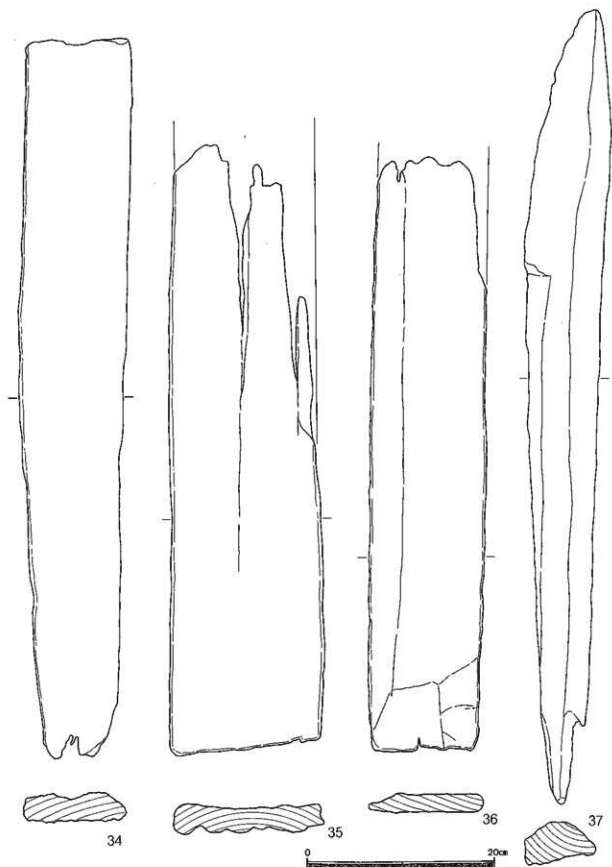
28=SB16

29=SB57

30=SB14

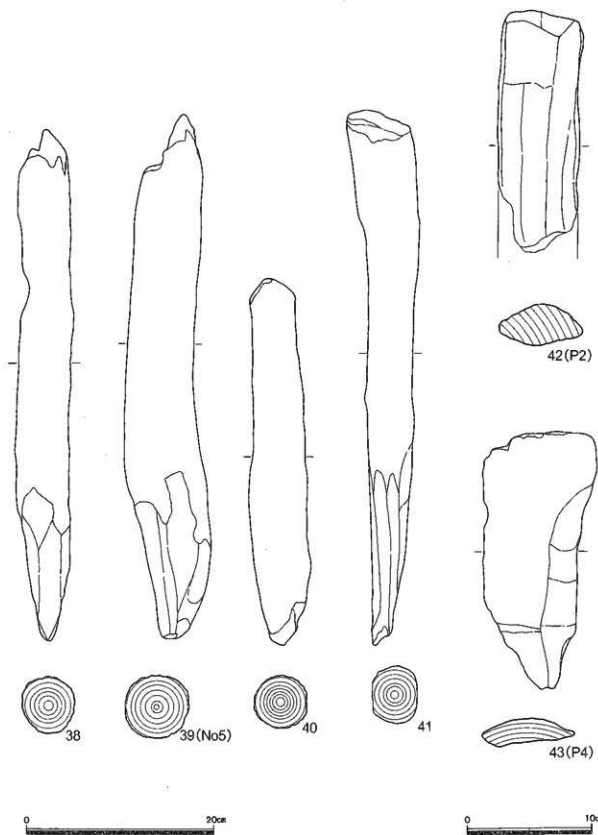


第216図 木製品実測図 8 31=SB69 32=SB71 33=SD267

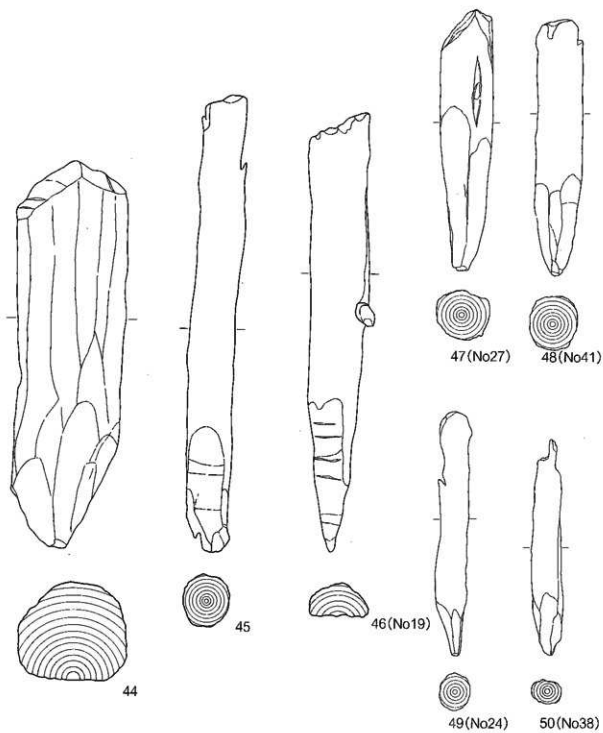


第217図 木製品実測図 9

34~37=SE3



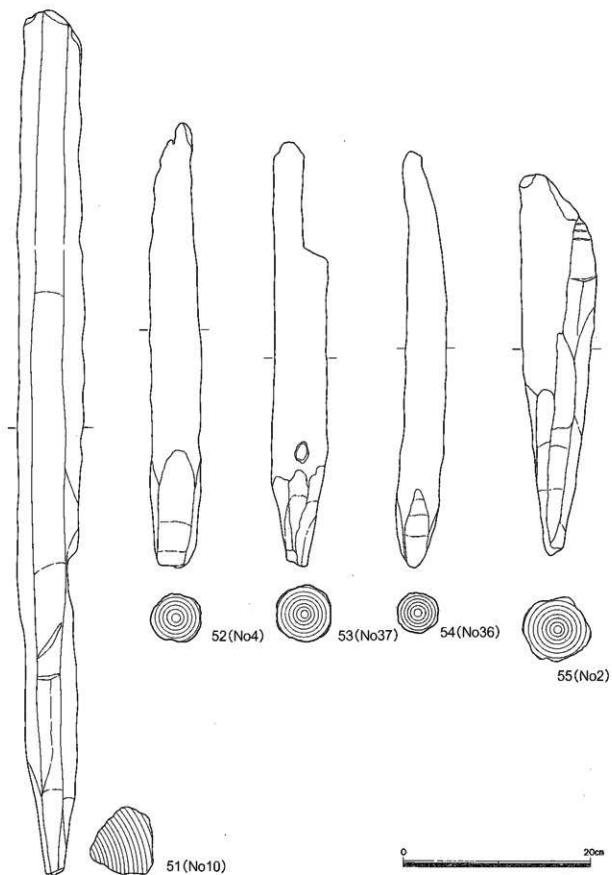
第218図 木製品実測図 10 38~41=SE5 42=SB67 43=SB68



第219図 木製品実測図 11

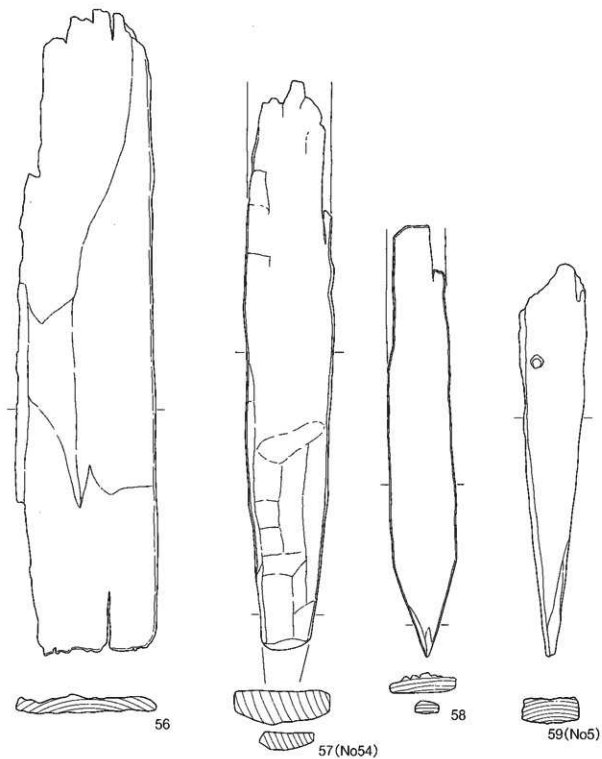
44・45=SD183

46~50=SD217



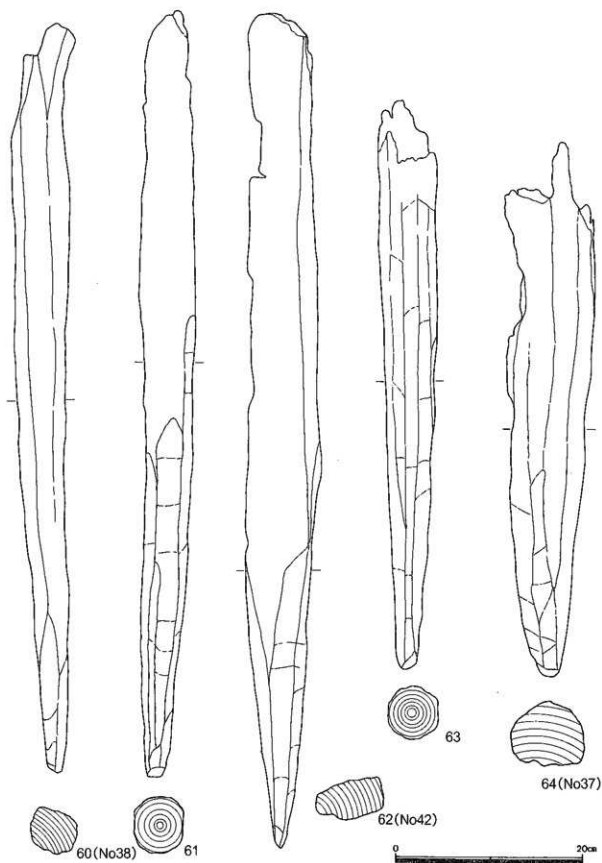
第220図 木製品実測図 12

51~55=SD217



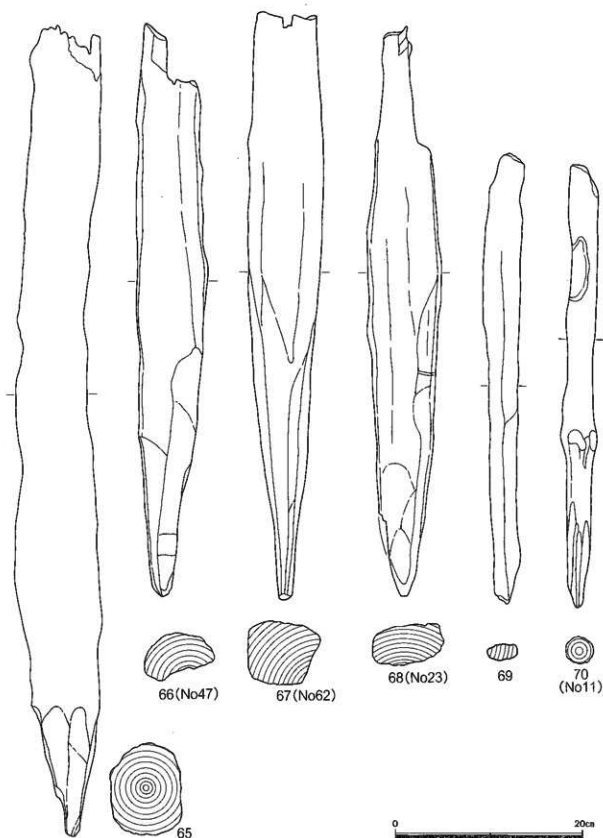
第221図 木製品実測図 13

56~59=SD270



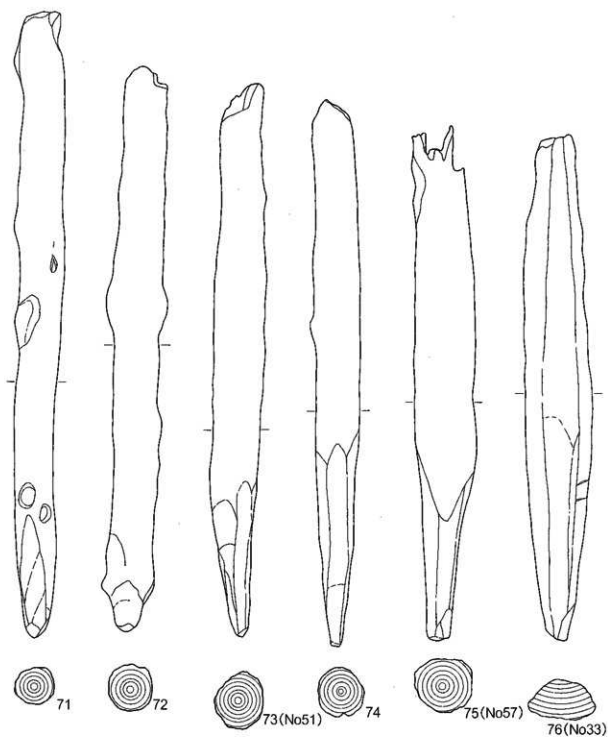
第222図 木製品実測図 14

60~64=SD270



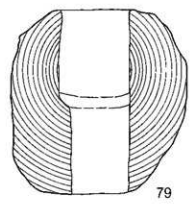
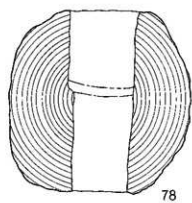
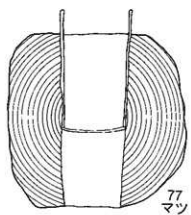
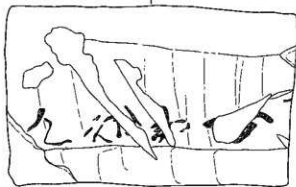
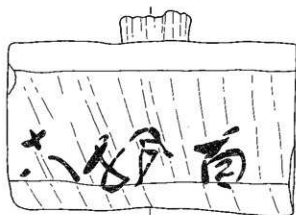
第223図 木製品実測図 15

65~70=SD270



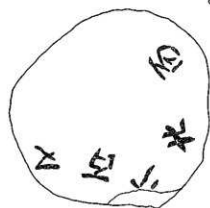
第224図 木製品実測図 16

71~76=SD270

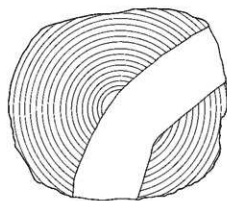
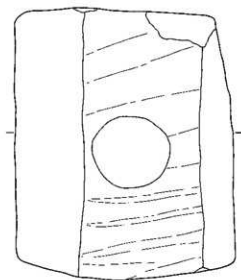


第225図 木製品実測図 17

77~79=SD185



80



第226図 木製品実測図 18

80=SD185

第3章 自然科学分析

第1節 坂尻遺跡出土材の樹種

1. 試料

試料はNo1~41の41点で、古墳時代初期から平安時代後期、江戸時代後期のものとされる建築部材・祭祀用木製品・日用品などである(第1表)。

2. 方法

剃刀の刃を用いて試料の木口・柾目・板目の3面の徒手切片を作製、ガム・クロラール(Gum Chloral)で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に顕微鏡写真図版(図版1~4)も作製した。

3. 結果

試料は以下の10種類(Taxa)に同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。なお、各Taxonの科名・学名・和名およびその配列は『日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ』(1989)にしたがった。また、一般的性質などについては『木の事典 第1巻~第17巻』(1979~1982)も参考にした。

マツ属複維管束亜属の一種(Pinus subgen. *Diploxylon* sp.) マツ科 No33・35 早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく、樹脂道が認められる。放射組織は仮道管、柔細胞とエビセリウム細胞よりなり、分野壁孔は窓状、仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。単例、1~15細胞高のものと水平樹脂道をもつ紡錘形のものがある。複維管束亜属(いわゆる二葉松類)には、クロマツ(Pinus thunbergii)・アカマツ(P. densiflora)と琉球列島特産のリュウキュウマツ(P. luchuensis)の3種類がある。アカマツは北海道南部から九州に、クロマツは本州から琉球に分布するが暖地の海沿いに多く生育し、また古くから砂防林として植栽されてきた。材は重硬で強度が大きく、保存性は中程度であるが耐水性に優れる。建築・土木・建具・器具・家具材など広い用途が知られている。

モミ属の一種(*Abies* sp.) マツ科 No15 早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞・樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の末端壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型(Taxodioid)で1~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。モミ属には、ウラジロモミ(*Abies homolepis*)・トドマツ(*A. sachalinensis*)・モミ(*A. firma*)・シラビソ(*A. veitchii*)・オオシラビソ(*A. mariesii*)の5種類があり、トドマツを除く4種はいずれも日本特産種である。モミは本州(秋田・岩手県以南)・四国・九州の低地~山地に、ウラジロモミは本州中部(福島県以南)・紀伊半島・四国の山地~亜高山帯に、オオシラビソは本州(中部地方以北)の亜高山帯に、シラビソは本州中部(福島県以南)・奈良県・四国に、トドマツは北海道に分布する常緑高木である。モミを除いては山地~高山・寒冷地に生育する。材の解剖的特徴のみでは区別できないが、試料はモミである可能性が高い。モミの材はやや軟で、強度は小さく、割裂性は大きい。加工は容易で、保存性は低い。棺や卒塔婆など葬具に用いられるほか、建具・器具・家具・建築材など各種の用途が知られている。

スギ(*Cryptomeria Japonica*) スギ科 No16 早材部から晩材部への移行は急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞は晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型で2~4個。放射組織は単列1~20細胞高。スギは本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では現在植林面積第一位の重要樹種であり、長寿の木としても知られる。材は軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・櫓

桶類・舟材など各種の用途がある。

ヒノキ属の一種 (*Chamaecyparis* sp.) ヒノキ科 No1・2・3・4・5・7・8・13・14・17・18・19・20・21・22・23・24・37 早材部から晩材部への移行は緩やか〜やや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分界壁孔はヒノキ型 (*Cupressoid*) で1〜4個。放射組織は単列、1〜15細胞高。ヒノキ属にはヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) の2種がある。ヒノキは本州 (福島県以南) ・四国・九州に分布し、また各地で植栽される常緑高木で、国内では現在スギに次ぐ植林面積を持つ重要樹種である。材はやや軽軟で加工は容易、割裂性は大きい、強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州 (岩手県以南) ・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが耐水性が高いため、樺や楠にするほか各種の用途がある。

マキ属の一種 (*Podocarpus* sp.) マキ科 No28・29・30・31・32・34・39 早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞は早・晩材部の別なく散在し、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分界壁孔はヒノキ型で1〜2個。放射組織は単列、1〜10細胞高。マキ属にはイヌマキ (*Podocarpus macrophyllus*) とナギ (*P. nagi*) の2種がある。イヌマキは本州 (房総半島以西) ・四国・九州・琉球の主として沿海地に分布し、ナギの自生地は本州から琉球に点在するが、神社などに植栽される常緑高木である。材はやや重硬で、加工性は中程度、割裂性は大きく、保存性・耐久性が高い。建築・土木・器具・薪炭材などの用途がある。

クマシデ属の一種 (*Carpinus* sp.) カバノキ科 No6 散孔材で、管孔は放射方向に2〜5個が複合、横断面では角張った楕円形。道管は単管孔をもち、壁孔は対列状〜交互状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は、異性Ⅲ〜Ⅱ型、1〜4細胞幅、1〜40細胞高のものとも集合組織よりなる。柔組織は短接線状およびターミナル状。年輪界は明瞭。クマシデ属は、サワシバ (*Carpinus cordata*) ・クマシデ (*C. japonica*) ・イワシデ (*C. turczaninowii*) ・イヌシデ (*C. tschonoskii*) ・アカシデ (*C. laxiflora*) の5種が自生する。このうちサワシバ・クマシデは階段穿孔を持つことで後3種と区別できる。イワシデは本州 (中部地方) ・四国・九州の石灰岩地に生育し、アカシデは北海道南部・本州・四国・九州に、イヌシデは本州 (岩手・新潟県以南) ・四国・九州に生育する温帯性落葉高木〜低木である。このうちアカシデは山野に普通見られ、二次林の構成種でもある。材はやや重硬で、割裂性が小さく、曲木や木地、薪炭材などに用いられる。

コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerrissp*) ブナ科 No27 環孔材で孔部は1〜3列、孔部外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。大道管は横断面では円形、小道管は横断面では角張った円形、ともに単独。単管孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では槽状となる。放射組織は同性、単列、1〜20細胞高のものとも複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。クヌギ節は、コナラ亜属 (落葉ナラ類) の中で果実 (いわゆるドングリ) が2年目に熟するグループで、クヌギ (*Quercus acutissima*) とアベマキ (*Q. variabilis*) の2種がある。クヌギは本州 (岩手・山形県以南) ・四国・九州・琉球に、アベマキは本州 (山形・静岡県以西) ・四国・九州 (北部) に分布するが中国地方に多い。クヌギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・杭材、櫓木などの用途が知られる。アベマキはクヌギによく似た高木で、樹皮のコルク層が発達して厚くなる。材質はクヌギに似るがさらに重い。用途もクヌギと同様であるが、樹皮が厚いため薪材にはむかず炭材としてもクヌギ・コナラより劣るとされる。

コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.) ブナ科 No25・36・38・40・41 環孔材で孔圈部は1~2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は横断面では円形~楕円形、小道管は横断面では多角形、ともに単独。単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では櫛状~網目状となる。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものも複合組織によりなる。柔組織は周囲状および短接線状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。コナラ節は、コナラ亜属の中で果実1年目に熟するグループで、カシワ(*Quercus dentata*)・ミズナラ(*Q. crispula*)・コナラ(*Q. serrata*)・ナラガシワ(*Q. aliena*)といくつかの変品種を含む。ミズナラ・カシワ・コナラは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州(岩手・秋田県以南)・四国・九州に分布する。このうち平野部で普通に見られるのはコナラである。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難。器具・機械・樺材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギに次ぐ優良材である。

コナラ属アカガシ亜属の一種 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.) ブナ科 No12・26 放射孔材で、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では櫛状となる。放射組織は同性、単列、1~15細胞高のものも複合組織をもつ。柔組織はしばしば結晶を含む。柔組織は短接線状および散在状。年輪界は不明瞭。アカガシ亜属(カシ類)には、イチイガシ(*Quercus gilva*)、アカガシ(*Q. acuta*)、アラカシ(*Q. glauca*)など8種類があるが、果実の構造からコナラ亜属に分類される常緑低木~小高木のウバメガシ(*Q. phillyraeoides*)も、材構造はカシ類と類似する。カシ類は、暖温帯常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)の主要な構成種であり、主として西南日本に分布する。材は重硬・強靱で、器具・機械・建築・薪炭材などに用いられる。

ケヤキ(*Zelkova serrata*) ニレ科 No9・10・11 環孔材で孔圈部は1~2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。大道管は横断面では円形~楕円形、単独、小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1~10細胞幅、1~60細胞高。しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。ケヤキは本州・四国・九州の谷谷いの肥沃地などに自生し、また屋敷木や並木として植栽される落葉高木で、時に樹高50mも達する。材はやや重硬で、強度は大きい、加工は困難でなく、耐朽性が高く、木理が美しい。建築・造作・器具・家具・機械・彫刻・薪炭材など各種の用途が知られ、国産広葉樹材の中で最良のものの一つに上げられる。

以上の同定結果を検出遺構や用途などとともに一覧表で示した(第1表)。

4. 考察

同定対象とされた41点は、古墳時代及び古墳時代後期とされるもの20点、平安時代後期とされるもの16点などとなっているが、通覧するとヒノキ属が18点で最多数を占め、マキ属(7点)・コナラ節(5点)・ケヤキ(3点)などがこれに次いでいる(第2表)。用途別には建築材の割合が高く、弥生時代後期のものとされるものは4点全てが、古墳時代後期とされるものでは17点が建築材であるが、平安時代後期のものからは建築材がなくなる。建築材とされるものの中ではマキ属が最も多く、先年の調査結果(山内 1985)¹⁾と類似の結果が得られた。また、市内堀越遺跡の弥生時代後期とされる試料とも共通の傾向がうかがえる(別報)。マキ属は平安時代後期とされる試料ではまったく認められなくなるが、これが期的な背景によるものであるのか、建築材が対象とされていないことによるものなのかは判断できない。²⁾369点が33Taxaに同定されている。報文中で個々の試料の所属年代がすべて明らかにされているわけではないが、古墳・奈良・平安時代の推定年代が散見されることから今回の試料とほぼ同時期のものと判断した。試料数では、ヒノキ(122点、サワラを含めると124点)が最多で、イヌマキ(80点)がこれに次ぐが、建築材とされるもの(礎板・柱・建築材とされる73点が

第2表 材の樹種分析表

試料番号	遺物番号	検出遺構	用 途	時 代	種 名
1	4	SE6	下駄	古墳後期末	ヒノキ属の一種
2	16	SE2	木札	平安後期末	ヒノキ属の一種
3	—	SE5	板材	奈良前期	ヒノキ属の一種
4	5	SE5	曲物底?	奈良前期	ヒノキ属の一種
5	15	SE2	木簡	平安後期末	ヒノキ属の一種
6	8	SE1	木鐙	平安後期末	クマシデ属の一種
7	12	SE1	有頭木製品	平安後期末	ヒノキ属の一種
8	6・7	SE1	刀鞘	平安後期末	ヒノキ属の一種
9	11	SE1	有頭木製品	平安後期末	ケヤキ
10	13	SE1	漆桶	平安後期末	ケヤキ
11	14	SE1	漆桶	平安後期末	ケヤキ
12	9	SE1	木鐙	平安後期末	コナラ属アカガシ亜属の一種
13	10	SE1	木鐙	平安後期末	ヒノキ属の一種
14	—	SD183	建築部材	古墳前期	ヒノキ属の一種
15	—	SD183	建築部材	古墳前期	モミ属の一種
16	—	SD183	建築部材	古墳前期	スギ
17	2	SD183	容器部材?	古墳前期	ヒノキ属の一種
18	—	SD17	板状製品	平安後期末	ヒノキ属の一種
19	—	P271	礎盤	古墳後期	ヒノキ属の一種
20	—	SB14	柱根	古墳後期	ヒノキ属の一種
21	3	SD244	下駄	古墳後期	ヒノキ属の一種
22	—	SE3	曲物	奈良後期	ヒノキ属の一種
23	—	SE16	曲物	平安後期末	ヒノキ属の一種
24	18	SE8	曲物	平安後期末	ヒノキ属の一種
25	—	SD183	建築部材	古墳前期	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
26	—	SD183	建築部材	古墳前期	コナラ属アカガシ亜属の一種
27	—	SD183	建築部材	古墳前期	コナラ属コナラ亜属クスギ節の一種
28	—	SD183	建築部材	古墳前期	マキ属の一種
29	24	SB14 P7	柱根	古墳後期	マキ属の一種
30	26	SB14 P1	柱根	古墳後期	マキ属の一種
31	21	SB14 P6	柱根	古墳後期	マキ属の一種
32	25	SB14 P16	柱根	古墳後期	マキ属の一種
33	27	SB14 P13	柱根	古墳後期	マツ属複雑管束亜属の一種
34	22	SB14 P14	柱根	古墳後期	マキ属の一種
35	77	SD185	水道管接合部材	江戸後期	マツ属複雑管束亜属の一種
36	—	SB16 P9	柱根	古墳後期	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
37	—	P375	柱根	古墳後期	ヒノキ属の一種
38	—	P223	柱根	古墳後期	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
39	—	SB26 P1	柱根	古墳後期	マキ属の一種
40	28	SB16 P6	柱根	古墳後期	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
41	—	SB21 P13	柱根	古墳後期	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種

* 遺物番号は第209図～第226図と一致する。

第3表 時代別・主な用途別の樹種構成

時 代	古 墳 前 期		古 墳 後 期	奈良時代～平安後葉末	江戸後期	合 計
種名/用途	建 築 材	建 築 材	そ の 他			
榎・椎・栲・栗属		1			1	2
モミ属		1				1
スギ		1				1
ヒノキ属		4	3*	11		18
マキ属	1	6				7
クマシデ属						1
クスギ節	1			1		1
コナラ節	1	4				5
アカガシ亜属	1			1		2
ケヤキ				3		3
合 計	4	17	3	16	1	41

* 古墳時代とされるもの1点を含む。

10Taxaに同定されている)ではイヌマキ(33点)が最も多く、ヒノキ(14点)・カヤ(11点)などが用いられている。また筆者は「スギのきわめて少ないこと」を指摘しているが、今回の試料でも同様の傾向が窺える(樹種名はすべて原著にしたがった)。

【 引用文献 】

- 平井信二 1979～1982 『木の事典 第1巻～第17巻』かなえ書房
 佐竹義輔・原寛・互原俊次・富成忠夫編 1989 『日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ』平凡社321・305pp.
 山内 文 1985 「板屋遺跡出土の木質遺物」『板屋遺跡(自然科学編)一般国道一号袋井バイパス
 (袋井地区)埋蔵文化財発掘調査報告書』袋井市教育委員会他13～24

第2節 坂尻遺跡の珪藻分析

1. はじめに

坂尻遺跡は、原野谷川と古名栗川の氾濫によって形成された砂礫層を基盤とした自然堤防上に立地する遺跡である。発掘調査の結果、中世鎌倉・平安期、奈良・古墳時代後期、古墳時代前期の遺物包含層が確認された。ここでは、古墳時代前期～後期遺物包含層の堆積環境を検討することを目的として珪藻分析を行ったので以下にその結果を述べる。

2. 試料

珪藻分析の対象とした試料は、I15地点の3試料(試料番号1～3)とY6地点の4試料(試料番号1～4)の計7点である。各層の時代は、弥生時代後期から古墳時代前期に相当すると考えられ、水田層や自然層と判断されている(第227図)。

3. 分析方法

珪藻化石の抽出は以下に述べる方法で行った。試料を湿重で数グラム秤量し過酸化水素水(H_2O_2)と塩酸(HCl)で加熱処理し試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。分散剤を加え蒸留水で満たし自然沈降法で上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し珪藻殻の濃縮を行う。傾斜法で試料中に含まれる砂を除去する。検鏡し易い濃度に希釈した後充分攪反しマイクロピペットで適量計りカバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、ブリュラックスで封入しプレパラートを作成する。検鏡は、光学顕微鏡(油浸1000倍)で任意の測線に沿って珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数を行う(珪藻化石の少ない試料はこの限りでない)。珪藻の同定はK.Krammer & Lange-Bertalot(1986.1988.1991)などの分類に従った。また、珪藻の生態性に関する解説を第4・5表に示した。

4. 結果

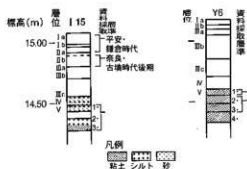
各試料から検出された珪藻化石は、アルファベット順に並べて表3に示した。各試料とも珪藻化石の産出は極めて少ない。産出分類群数は全試料を通じて13属、23分類群(15種・3変種・種不明5種類)であり、Y6地点の試料番号4からは僅かながら海～汽水生種が検出された。

5. 考察

今回調査対象とした古墳時代前期～後期の遺物包含層は、珪藻化石が極めて少なく、統計学的に取り扱うことができなかったことから堆積環境について検討することは困難であった。珪藻化石が少ない原因については不明であるが、海拔標高が14.3～14.6m付近の堆積物でありながら、僅かながら海～汽水性種を伴うことを考慮すると当時の堆積環境を反映しているとは考えにくく、様々な環境の堆積物を削り出して堆積している可能性もある。とくに、本遺跡の立地を考えると氾濫によって形成された砂礫層を基盤とした自然堤防上に位置していることもあり、それだけ珪藻の生育環境としては不適当な場所であったとも考えられる。ただ水田層の可能性のある堆積層から珪藻が検出されなかったのは、堆積後の続成作用などの影響もあり今後の検討課題として残される。

【 参考文献 】

- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot (1986.1988.1991) *Bacillariophyceae*, Suesswasser floravon Mitteleuropa 2(1-2-3): p.1-876, p.1-585, p.1-576.
田中 弘之・吉田 武雄・中島 啓治(1977)「奥利根地域の珪藻類」『群馬県奥利根地域地質調査報告書Ⅱ』p.114-135.



第227図 珪藻分析試料採取位置の模式柱状図

第4表 珪藻の生態分類表

塩分濃度に対する区分	塩分に対する適応性	生育環境 (例)
強塩性種 (Polyhalobous)	塩分濃度40.0%以上に出現するもの	低緯度熱帯海域、塩水湖
高塩性種: 真塩性種 (Euhalobous)	塩分濃度30.0~40.0%に出現するもの	一般海域 (ex 大陸棚及び大陸棚以深の海域)
汽水性種: 中塩性種 (Mesohalobous)	汽水性種: 塩分濃度0.5 ~30.0%に出現するもの 強中塩性種 (α -Mesohalobous) 弱中塩性種 (β -Mesohalobous)	河口・内湾・沿岸・塩水湖・沼
淡水性種: 貧塩性種 (Oligohalobous)	淡水性種: 塩分濃度0.5%以下に出現するもの	一般淡水域 (ex 湖沼・池・沼・河川・川・沼沢地・泉)

第5表 淡水性種の各生態に対する適応性分類表

塩分・pH・流水に対する区分	塩分・pH・流水に対する適応性	生育環境 (例)
富塩-好塩性種 (Halophilous)	少量の塩分がある方がよく生育するもの	高塩性域 (塩水道上域・温泉・湖畔土壌)
富塩-不定性種 (Indifferent)	少量の塩分があってもこれによく耐えることができるもの	一般淡水域 (湖沼・池・沼・河川・沼沢地 etc)
貧塩-嫌塩性種 (Halophilous)	少量の塩分にも耐えることができないもの	湖沼・沼地・沼沢地
広域塩性種 (Euryhalous)	低濃度から高濃度まで広い範囲の塩分濃度に対応して出現する種類	一般淡水~汽水域
酸性性種 (Acidobiontic)	pH7以下に出現、pH5.5以下で最もよく生育するもの	酸性・沼地・火口湖 (酸性水)
好酸性種 (Acidophilous)	pH7付近に出現、pH7以下で最もよく生育するもの	酸性・沼地・沼沢地
pH-不定性種 (Indifferent)	pH7付近で最もよく生育するもの	一般淡水 (ex 湖沼・池沼・河川)
好アルカリ性種 (Alkaliphilous)	pH7付近に出現、pH7以上で最もよく生育するもの	アルカリ性水域 (少ない)
真アルカリ性種 (Alkalibiontic)	pH8.5のアルカリ性水域にのみ出現するもの	アルカリ性水域 (少ない)
流水に対する適応性		
好止水性種 (Limnophilous)	止水にのみ出現するもの	流入水のない湖沼・池沼
好流水性種 (Limnophilous)	止水に特異的であるが、流水にも出現するもの	湖沼・池沼・流れの穏やかな川
流水不定性種 (Indifferent)	止水にも流水にも普通に出現するもの	河川・川・池沼・湖沼
好流性種 (Rheophilous)	流水に特異的であるが、止水にも出現するもの	河川・川・小川・上流域
真流性種 (Rheobiontic)	流水域にのみ出現するもの	河川・川・流れの速い川・渓流・上流域
陸生生態		
好気性種 (Aerophilous)	好気性環境 (Aerial habitats) 多少湿り気があれば土壌表面中やコケの表面に生育可能である。 特に土壌中に生育するものについての環境をSoil habitatsという。	○土壌表面中、○樹幹や倒木上のコケに付着 ○コケに付着、○木の根元のコケに付着 ○濡れた岩の表面に付着、○濡れたコケに付着 ○木辺のコケに付着、○池の縁で覆ったコケ や苔の上の壁に付着、○石灰岩上に生えたコケに付着などさまざまな生活形態がある。

(区分、適応性は田中・吉田・中島、1977 奥利根地域学術調査報告Ⅱ p.114-135を基に一部削除。環境については加筆し作成した)

第6表 珪藻分析結果表

Special Name	ECOLOGY			IIS			Y6			
	H.R.	pH	C.R.	1	2	3	1	2	3	4
Cocconeis scutellum Ehrenberg	Euh-Meh			-	-	-	-	-	-	1
Synedra pulchella Kuetzing	Meh			-	-	-	-	-	-	1
##Achnanthes crenulate Grunow	Ogh-hil	al-il	ind	-	-	-	-	1	-	1
Achnanthes spp.	Ogh-unk	unk	unk	1	-	-	-	-	-	-
Amphora ovalis var.affinis(kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	2
・Cauloncis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	1	-	-
##Cymbella aspera(Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	1
##Cymbella tungidula Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	2	-	1
##Cymbella tungidula Var.nipponica Skvortzow	Ogh-ind	al-il	r-bi	-	-	-	-	1	-	-
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	1	1	-
Gomphonema clevei Fricke	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	1	-	1
・Hantzschia amplexys(Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	4	-	-
##Meridion circulare var constrictum(Ralfs)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	-	-	-	-	1	-	-
・##Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	1	-	-
##Navicula cuspidate Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	2
Navicula halophila(Grun.)Cleve	Ogh-hil	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	1
・##Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	3	-	2
・Pinnularia schroederi(Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	1	-	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk	1	-	-	-	-	-	1
Phopalodia gibberula(Ehr.)O.Muller	Ogh-hil	al-il	ind	-	-	1	-	-	-	4
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	3
Synedra ulna(Kuetz.)Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	1
Synedra spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	1	1	-
Marine Warter Species				0	0	0	0	0	0	0
Marine to Brackish Warter Species				0	0	0	0	0	0	1
Brackish Warter Species				0	0	0	0	0	0	1
Fresh Warter Species				2	0	1	0	17	2	20
Total Number of Diatoms				2	0	1	0	17	2	22

凡例

H.R. : 塩分濃度に対する適応性

Euh : 海水生種

Euh-Meh : 海水生種-汽水生種

Meh : 汽水生種

Ogh-hil : 貧塩好塩性種

Ogh-ind : 貧塩不定性種

Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種

Ogh-unk : 貧塩不明種

pH : 水素イオン濃度に対する適応性

al-bl : 真アルカリ性種

al-ph : 好アルカリ性種

ind : pH不定性種

ac-il : 好酸性種

ac-bl : 真酸性種

unk : pH不明種

C.R. : 流水に対する適応性

l-bi : 真止水性種

l-ph : 好止水性種

ind : 流水不定性種

r-ph : 好流水性種

r-bl : 真流水性種

unk : 流水不明種

・ : 陸生珪藻 # : 好汚濁性種 ## : 好清水性種

第3節 坂尻遺跡のプラント・オパール分析

1. はじめに

この調査はプラント・オパール分析を用いて坂尻遺跡における稲作跡の探査を試みたものである。

2. 試料

現地調査は3回に分けて行った。1回目の調査地点は調査区北壁の西1地点と、西壁のNa1～5地点、2回目はSE12を利用した深堀試験坑の断面、SH15のカマドの焼土、飲4の小溝内、3回目は北西隅深堀試験坑地点と水田地点の合計12地点である。試料は土層壁面において容量50cmの採土管およびポリ袋等を用いて、各層ごとに5～10cm間隔で採取した。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法」(藤原 1976)をもとに次の手順で行った。

(1)試料の絶乾(105℃・24時間)、仮比重測定。(2)試料土約1gを秤量、ガラスビーズ添加。(直径40μm、約0.02g、電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量)(3)電気炉灰化法による脱有機物処理。(4)超音波による分散。(300W・42KHZ・10分間)(5)沈底法による微粒子(20μm以下)除去乾燥。(6)封入剤(オイキッ)中に分散、プレパラート作成。(7)検鏡・計数。

同定は機動細胞珪酸体由来するプラント・オパール(以下プラント・オパールと略す)をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡で行った。計数はガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ数個に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。また、この値に試料の仮比重と各種物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10⁻⁸g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。その値はそれぞれ2.94(種実重は1.03)、6.31、0.48である(杉山・藤原 1987)。

4. 分析結果

プラント・オパール分析の結果を第7表および第228図、第229図に示す。なお、稲作跡の探査が主目的であるため、同定および定量はイネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ属(ススキやチガヤなどが含まれる)、キビ属(ヒエなどが含まれる)の主要な5分類群に限定した。写真図版に各分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考察

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準に基づいて稲作の可能性について検討を行った。

第1回調査 西1地点ではⅢb～Ⅵ層、1地点ではⅢb～Ⅶ層、2・3・4地点ではⅢa～Ⅶ層、5地点ではⅢa～Ⅶ層の各層について分析を行った。その結果、西1地点のⅢb層下部とⅢc層下部、2地点のⅢa層、4地点のⅦ層からイネのプラント・オパールが検出された。プラント・オパール密度はいずれも600～800個/gと微量であることから、これらの層で稲作が行われていた可能性は考えにくい。おそらくこれらの層の時期に調査地点の近辺で稲作が行われており、そこからプラント・オパールが混入したものと考えられる。なお、1地点では古墳時代初頭期の遺構(SH24)から検出された焼土・炉の焼土についての分析も行った。その結果、これらの両者ともプラント・オパールが検出された。

密度は600~700個/gと低い値であるが、直上層ではまったく検出されていないことから上層より後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同遺構の時期には調査地点の近辺での稲作が行われていたものと考えられる。

第2回調査 SE12の壁面を利用した深掘試掘グリッドのV・VI・IX層について分析を行った。その結果、VI・IX層でイネのプラント・オパールが検出された。密度はVI層で500個/g、IX層で1300個/gといずれも低い値であるが、直上層ではまったく検出されていないことから上層より後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同遺構の時期には調査地点の近辺での稲作が行われていたものと考えられる。なお、その後の発掘調査においてIX層から、古墳時代前期の水田遺構が検出された。SH15のかまどの焼土、畝状遺構4の小溝内の土壌についての分析を行ったが、イネのプラント・オパールはまったく検出されなかった。

第3回調査 古墳時代前期の水田遺構が検出された地点では3~6層について分析を行った。その結果、4~6層でイネのプラント・オパールが検出された。このうち6層（水田耕作層（第2回調査区層））では密度が3700個/gとやや低いものの、明確なピークが認められた。したがって、6層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。その他の層では密度が700~2200個/gと低いことから、稲作の可能性は考えられるものの、上層や他の場所からの混入の可能性も否定しきれない。

北西隅深掘試掘坑地点では1~8層について分析を行った。その結果、1・4・5・7・8層でイネのプラント・オパールが検出された。このうち1層については、ごく最近の水田耕作によるものと考えられる。7・8層については密度が2000~2900個/gとやや低い数値であるが、直上の6層ではまったく検出されないことから上層より後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、これらの層の時期もしくは調査地点の近辺での稲作が行われていたものと考えられる。4・5層では密度が600~800個/gと低いことから、稲作の可能性は考えられるものの、上層や他の場所からの混入の可能性も否定しきれない。

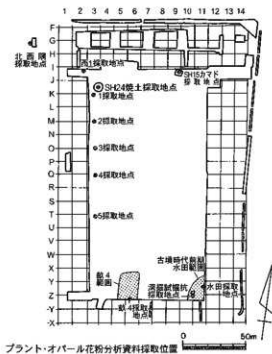
10. まとめ

以上のように古墳時代前期の水田遺構はイネのプラント・オパールが比較的高い密度で検出され、同遺構で稲作が行われていたことが分析的にも確認された。また、北西隅地点の7・8層などでも稲作の可能性が認められた。なお、古墳時代初期の遺構（SH24）の焼土でもイネのプラント・オパールが検出されたことから、この時期にも稲作が行われていたものと考えられる。

【 引用文献 】

- 杉山真二・藤原宏志 1987 「川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析」『赤山—古墳境域—川口市遺跡調査会報告第10集281~298
- 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の建群体標本と定量分析法—」『考古学と自然科学』9 15~29
- 藤原宏志 1979 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡（夜泊式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（*O.sativa* L.）籾生産量の推定—」『考古学と自然科学』12 29~41
- 藤原宏志・杉山真二 1984 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探索—」『考古学と自然科学』17 73~85

第7表 プラント・オバール分析結果表

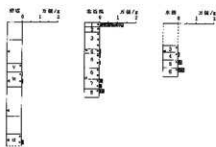
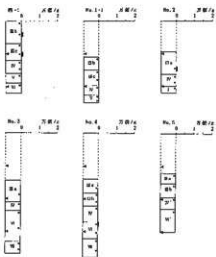


SH15採取地点		水深	水深範囲	中心水深	水深範囲	中心水深	水深範囲
試料	深度	水深	水深範囲	中心水深	水深範囲	中心水深	水深範囲
層上	0	0	0	0	0	0	0
層下	1	1.00	-	-	0.500	-	-
平均	0.5	0.500	-	-	0.250	-	-

濃度別採取地点		水深	水深範囲	中心水深	水深範囲	中心水深	水深範囲
試料	深度	水深	水深範囲	中心水深	水深範囲	中心水深	水深範囲
10-1	10	1.00	0.500	0.500	0.500	0.500	0.500
10-2	11	1.10	0.550	0.550	0.550	0.550	0.550
10-3	12	1.20	0.600	0.600	0.600	0.600	0.600
10-4	13	1.30	0.650	0.650	0.650	0.650	0.650
10-5	14	1.40	0.700	0.700	0.700	0.700	0.700
10-6	15	1.50	0.750	0.750	0.750	0.750	0.750
平均	12.5	1.250	0.650	0.650	0.650	0.650	0.650

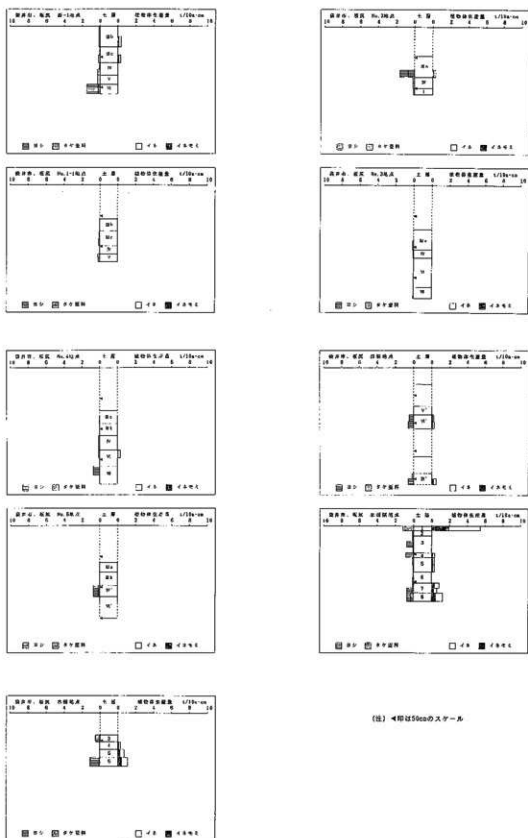
鉄分採取地点		水深	水深範囲	中心水深	水深範囲	中心水深	水深範囲
試料	深度	水深	水深範囲	中心水深	水深範囲	中心水深	水深範囲
層上	0	0	0	0	0	0	0
層下	1	1.00	-	-	0.500	-	-
平均	0.5	0.500	-	-	0.250	-	-

土壌下部採取地点		水深	水深範囲	中心水深	水深範囲	中心水深	水深範囲
試料	深度	水深	水深範囲	中心水深	水深範囲	中心水深	水深範囲
層上	0	0	0	0	0	0	0
層下	1	1.00	-	-	0.500	-	-
平均	0.5	0.500	-	-	0.250	-	-

[illegible]

(注) ◀印は50cmのスケール。●印は分析試料の採取箇所

第228図 イネのプラント・オバールの検出状況図



第229図 おもな植物の推定生産量と変遷図

第4節 坂尻遺跡の花粉分析

1. はじめに

坂尻遺跡では発掘調査によって古墳時代前期の水田跡と見られる遺構が検出され、また弥生時代～中世の遺構・遺物も検出されている。この弥生時代以降における遺跡周辺の植生変遷、および稲作農耕について検討する目的で花粉分析を行った。

2. 試料および分析方法

花粉分析用試料は1・3・5地点、SE12を利用した深掘試験坑、北西隅深掘試験坑、古墳時代前期水田地点の合計6地点（プラント・オパール分析試料採集地点と共通）にて採集した。各地点の土層観察結果は以下の通りである。

1 地点 I a層は暗灰色粘土層、I b層は暗茶色土層、II b層は暗茶褐色土層、III a層は灰褐色土層、III b層は茶褐色土層、III c層は暗茶褐色土層、IV層は灰茶褐色土層、V層は灰褐色粘土層、古墳時代初頭の遺物包含層は炭化物混じりの明灰色粘土層、VI層は灰色粘土層である。花粉分析はこのうちII b層から下層の各1層ごとに1点づつ、合計8点行った。

3 地点 I a層は暗灰色粘土層、I c層は黒灰色粘土層、II a層は明茶灰色土層、II b層は暗茶灰色土層、III a層は灰茶灰色土層、IV層は淡茶灰色粘土層、VI層は明灰色シルト質粘土層、VI'層は灰色粘土層である。花粉分析はこのうちI c層から下層の各1層ごとに1点づつ、合計7点行った。

5 地点 I a層は灰色粘土層、II a層は灰白色粘土層、II b層は灰褐色弱粘土層、III a層は暗灰色土層、III b層は黄灰色粘土層、IV層は明灰色粘土層、VI層は青灰色粘土層である。花粉分析はこのうちII a層から下層の各1層ごとに1点づつ、合計6点行った。

SE12深掘試験坑地点 III b層は灰茶褐色砂質土層、IV'層は青灰色砂質土層、V'層は青灰色砂質粘土層、VI'層は暗青灰色砂質粘土層、VII層は青灰色砂質粘土層、VIII層とIX層は青灰色砂質土層、X'層は青灰色粘土層である。このうちIV'層とV'層は古墳時代前期の包含層、水田耕作土である。また、X層は弥生時代の河川（古原野谷川？）堆積物と思われた。花粉分析はこのうちIII b層からX'層の各1層ごとに1点づつ、合計13点行った。

北西隅深掘試験坑地点 本地点では8層の暗灰色シルト質粘土層についてのみ花粉分析を行った。

古墳時代前期水田地点 本地点では6層の暗灰色シルト質粘土層（水田耕作土）についてのみ花粉分析を行った。

以上の36試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重1～2g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加えて20分間湯煎する。水洗後0.5mmの篩にて植物遺体等を取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加えて30分間放置する。水洗後に酢酸処理をしてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎する）を行う。水洗後に残渣にグリセリンを滴下し保存用とした。検鏡はこれら残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際にサフランにて染色を施した。

3. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は1地点では樹木花粉23、草本花粉21、形態分類で示したシダ植物胞子2、藻類1の合計68、5地点では樹木花粉29、草本花粉20、シダ植物胞子2、藻類1の合計52、SE12の深掘試験坑では樹木花粉30、草本花粉24、形態分類で示したシダ植物胞子2の合計56、古墳時代前期の水田地点では樹木花粉25、草本花粉21、シダ植物胞子2の合計48であった。これら花粉・胞子・藻類の一覧を第8表に示した。また主要な花粉・胞子の分布図を第230図に示した。なお分布図における樹木花粉は樹木花粉総数を基数に、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉胞子総数を基数にし

て百分率で示してある。ハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科、バラ科、マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものがあるが、それぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉を一括に示してある。

1 地点 最上部の試料を除いて花粉の検出数が非常に低く、分布図に示されている割合がそのまま周囲の植生を反映しているとは考えられない。堆積物にはかなりの酸化鉄の集積がみられ、作成したプレパレート中には細かな植物遺体が多数含まれており、検出できた花粉も傷んでいるものが多かった。こうした状況からして分布図に示されているものは、選択的に残ったものが強く表現されているものと思われる。よって、第3図に示された各花粉の産出傾向は参考程度に見ていただきたい。その傾向としてはシノキ属-マテバシ属は上部に向かい減少し、コナラ属、アカガシ属は中部で多くなっている。スギ属は試料No1-3において最も多く、その上位で減少している。マツ属複雑管束亜属（アカマツなどいわゆるニヨウマツ類）は最上部で出現率が突出しており、コナラ属コナラ亜属も上部において連続してみられる。草本類ではイネ科が上位に向かい次第に増加する傾向がみられ、最上部では水田に見られるオモダカ属やミズアオイ属、キカシグサ属などが検出されている。また、ソバ属が試料No1-5より上位で見られる。

3 地点 他の2地点に比べて花粉の産出状況がよく、その樹木花粉の産出傾向から3つの局地花粉化石帯（下位よりⅠ・Ⅱ・Ⅲ）を設定した。Ⅰ帯（試料No3-7）=樹木花粉の占める割合が非常に高く、90%近くに達している。その中ではスギ属、アカガシ属、シノキ属-マテバシ属が20%を越えて出現し優占しており、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科も10%を越えて出現している。草本類では最も多いイネ科でも8%と低率である。Ⅱ帯（試料No3-6~3-4）=試料No3-5は1地点同様に花粉の検出数が少なく（特に樹木花粉）、分布図上ではやはり選択的に残ったものが強く表現されていると思われる。したがって、Ⅱ帯においては試料No3-6からのみ判断せざるをえないが、Ⅰ帯で多くみられたスギ属やイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科の減少が特徴的であり、同じくⅠ帯で優占していたアカガシ属やシノキ属-マテバシ属はやや増加する傾向がみられる。草本類ではⅠ帯同様イネ科が最も多いが、出現率としては10%ほどで若干増加した程度である。Ⅲ帯（試料No3-1~3-3）=草本花粉の占める割合が非常に高く（75%前後）、樹木花粉は20%強である。その中ではアカガシ属が最優占しているが、最上部においては出現率を下げている。また、アカガシ属同様Ⅱ帯において優占していたシノキ属-マテバシ属は急激に出現率を下げている。これとは反対にスギ属は大きく出現率を上げニヨウマツ類も最上位では10%を越えて出現している。また、コナラ属も若干ではあるが増加している。草本類ではイネ科が急激に出現率を高め、最上部では70%近くに達している。1地点の最上部でみられたオモダカ属やミズアオイ属、キカシグサ属が上部2試料から検出されており、ソバ属も最上部から得られている。

5 地点 本地点においても上部2試料を除いて花粉の検出数が少なく、したがって下位の部分については参考程度に見ていただきたい。下位ではシノキ属-マテバシ属が多かったが、上部に向かい減少する傾向があり、試料No5-1および5-2では15%前後の出現率を示している。アカガシ属も多かったようで、上部2試料では出現率35%前後を示している。スギ属は下位より次第に増加する傾向がみられ、上部2試料では20%前後検出されるが、ニヨウマツ類は3%とあまり増加はしていない。草本類ではやはりイネ科が多く上部2試料では41%と61%を示し、同層からオモダカ属やミズアオイ属、キカシグサ属が出現している。

SE12の深掘試験坑 全体に花粉の検出数が少なく、特に上位4試料およびNo6-2については樹木花粉が非常に少なく、分布図としては示すことができなかった。傾向としてはシノキ属-マテバシ属が上位に向かい増加し試料No8-2では40%前後の出現率に達するが上位になると次第に減少している。コナラ属アカガシ属は増減があるもののほぼ30%前後と多く、No8-1・9-2では出現率46%前後を

示している。これについてスギ属は10%前後出現し、No6-1・10では出現率20%を越えている。コナラ属コナラ亜属は下部より次第に増加し、No7では出現率15%に達するが上位では再び出現率が低下する。草本類ではやはりイネ科が最下部（No10）で40%を越え、No8~9では20%前後と半減し、No5~7において再び40%前後の出現率を示している。カヤツリグサ科も低率ではあるが、イネ科同様に上・下部両方に若干多く、これは反対の傾向がヨモギ属や単条型胎子に見られる。またイネ科の多い層準においてオモダカ属やミズアオイ属、キカシグサ属が検出されている。

北西隅深掘試験坑地点（8層） 樹木花粉ではスギ属が最も多く、出現率は30%を示している。またイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科も10%を越えて出現し、コナラ属の両亜属も15%前後見られる。草本類ではイネ科が50%を越えて出現する他はいずれも低率である。そのなかでオモダカ属が1%を越えて出現し、ミズアオイ属も検出されている。

古墳時代前期水田地点（6層） アカガシ亜属が出現率は24%と最も多く、スギ属も20%を越えて見られる。またイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、コナラ属、シノキ属-マテバシイ属が10%を越えて出現している。草本類ではやはりイネ科が多く、カヤツリグサ科と同様30%を越えて出現している。その他はいずれも1%以下と低率だが、ヒルムシロ属やオモダカ属、ミズアオイ属など水性植物群が多く（数種類）検出されている。

4. 坂尻遺跡の古植生変遷

以上の結果から比較的花粉の検出数の多かったNo3地点の花粉化石群集帯を基に遺跡周辺の植生変遷について考察を試みたい。

花粉化石群集帯Ⅰ 上位あるいは同層準くらいと考えられる層位より古墳時代初頭の遺構・遺物が検出されている（1地点）ので、本集帯については古墳時代初頭期に属すると考えられる。この頃スギ属やイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、さらにアカガシ亜属やシノキ属-マテバシイ属が分布を広げていたと思われる。御前崎や榛原町周辺では3000年前頃よりスギ属やイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が増加傾向を示しており（松下まり子 1989）、大阪河内平野では縄文時代晩期に気候の冷涼化と降雨の増加によりスギやヒノキなどの中間温帯針葉樹林が後背山地約500m以上の所に成立したと考えられている。また、榛原町に見られるシイ林は約7500年前に成立し、6000年前頃にカシ類などを伴う安定した極相林となり、約3000年前まで繁栄していたとかがえられた（松下まり子 1989）。このように坂尻遺跡においてもアカガシ亜属やシノキ属を主体とした照葉樹林が優占していたと思われるが、その後やや分布を狭め、かわってスギやヒノキなどの中間温帯針葉樹林が一部に成立したことが分布図に表れているのだろう。

花粉化石群集帯Ⅱ 本集帯の時代は古墳時代中期~奈良時代である。スギ属やヒノキ類など中間温帯針葉樹林が古墳時代初頭期よりも減少している。韭山町山水遺跡ではスギ属花粉の急激な減少が見られることと、スギ材の杭や板が多数出土したことにより、弥生時代において急激にスギの森林破壊が進んだと考えられた（辻誠一郎 1977）。坂尻遺跡におけるスギ属花粉の減少が弥生時代以降のスギの森林破壊が進んだ結果なのか、その当否については今後の考古学的裏付けが必要となろう。このように古墳時代初頭期以降より奈良時代にかけて再びアカガシ亜属やシノキ属を主体とした照葉樹林が目立つ存在であったと思われる。

花粉化石群集帯Ⅲ 本集帯の時代は鎌倉時代~江戸時代である。スギ属が再び分布域を広げている。またヒノキ類やニヨウマツ類は最上部において急激に分布域を広げ、コナラ属も同様の傾向が見られる。一方シノキ類は急激に分布域を狭め、アカガシ亜属も最上部において減少している。こうした傾向はすでに行われた坂尻遺跡の花粉・孢子分析結果からも伺えるのである（那須孝徳・松江実千代 1985）。すなわち古墳時代中期以降にはコナラ属を含むアカマツの2次林が発達し、この傾向は中世末からさらに強まり、また、現在の耕作土の時代になると植林によるものと考えられるスギ

花粉が急激に多くなり、照葉樹林は激減している。今回の分析結果からもほぼ同様の傾向が得られた。遺跡周辺では古墳時代中期以降目立つ存在であった照葉樹林は分布域を狭め、鎌倉時代以降ニヨウマツ類やコナラ亜属を主体とした2次林が発達し、また江戸時代以降スギ花粉が増加している。なお、このスギ花粉の増加は植林によるものと考えられる。マツ属花粉については那須・松江両氏の報告によると古墳時代中期（5世紀）にはすでに高率に出現しているが、今回の分析では江戸時代以降にならないと増加しない。これは那須・松江両氏も指摘しているように、アカマツなどの2次林化も初期の段階では部分的であり、照葉樹林もかなり残存していたと考えられ、こうしたことにより違いが表れたと考えられる。草本類では鎌倉時代以降江戸時代になるとイネ科花粉が急増しており、また水田雑草として普通に見られるオモダカ属やミズアオイ属、キカシグサ属などが検出されているので、この頃には坂尻遺跡周辺で水田稲作が盛んに行われていたと思われる。栽培植物と考えられるソバ属花粉についてもイネ科花粉の急増期よりもやや下位の層から得られており、坂尻遺跡周辺で鎌倉時代以降ソバが栽培されていた可能性が高いと考えられる。

5. 坂尻遺跡における稲作について

今回分析を行った地点のうち、水田地点の6層は古墳時代前期の水田耕作土壌と考えられており、6層における花粉分析の結果からイネ科花粉が比較的多く検出され、水田雑草として普通に見られるオモダカ属やミズアオイ属などが産出している。また、プラント・オパール分析の結果からはイネのプラント・オパールが1gあたり3700個と今回の分析のなかでは最も多く検出されている。北西隅深掘試験坑からもイネ科花粉が50%を越えて出現しており、水田雑草として普通に見られるオモダカ属やミズアオイ属なども検出されている。プラント・オパール分析の結果からもイネのプラント・オパールが1gあたり2900個と比較的多く検出されている。

両試料のイネのプラント・オパールの1gあたりの検出個数は、稲作農耕の可否を考えるうえでは若干低いものと思われるが、花粉分析の結果を合わせて検討してみると、両地点の各層における水田稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。また、那須・松江の両氏により行われた坂尻遺跡での花粉・胞子分析結果からは、古墳時代中期（5世紀代）にはすでに稲作が行われていたと判断されている。今回の分析結果からは、坂尻遺跡においては遅くとも古墳時代初頭期には稲作がすでに行われていたことが考えられるのである。

【 引用文献 】

- 松下まり子 1989 「舞前崎横原町周辺の後氷期における植生変遷史」『日本生態学会誌』39 日本生態学会183～188
那須孝徳・松江実千代 1985 「袋井市坂尻遺跡の花粉・胞子分析」『坂尻遺跡—自然科学編—』袋井市教育委員会他59～69
辻誠一郎 1977 「山木遺跡における花粉分析の検討」『山木遺跡第4次調査報告書』韭山町教育委員会64～66

第8表 花粉化石一覽表

表 3 東馬達船塢 1 號倉的腐蝕性評估結果

[illegible]

圖 3 樣品運輸箱及樣品包裝出庫檢驗記錄一覽表

[illegible]

© 2005 Blackwell Publishing Ltd, *Journal of Internal Medicine* 258: 105–112

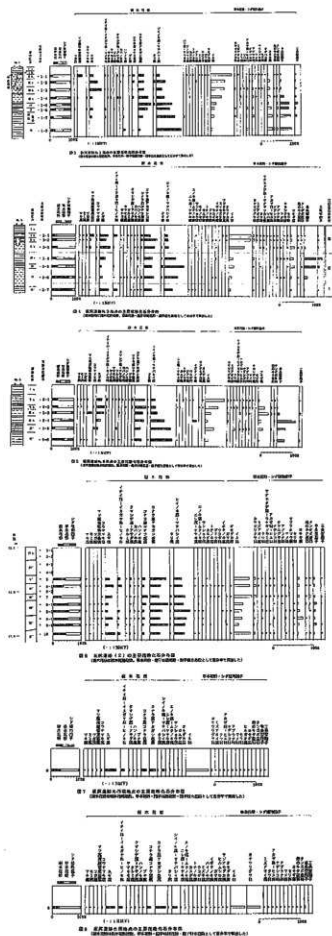
图 4 煤质预测因子与地质环境条件的关系图一(部分)

[illegible]

© 2005 Blackwell Publishing Ltd, *Journal of Internal Medicine* 258: 103–110

[illegible]

T. - B. *Staphylococcus Capillaris* (Gram-negative) #1



第230図 主要花粉化石の分布図

第4章 総 括

はじめに

冒頭でも述べた通り本章においては遺物整理の結果で得られた遺構の時期について訂正をしつつ各時代の遺構群の再分析、古墳時代前期の水田跡と地震痕跡についての補足報告と分析、古墳時代前半と後半期の土器編年、稀少遺物である古墳時代の下駄についての分析を行うこととする。

第1節 遺構について

古墳時代前期の水田跡と地震痕跡（第231図）

今回の調査区では古墳時代前期の水田跡は、調査区南東隅にてかなり狭い面積部分が確認された。これは調査区中央を古墳時代前期後半～中期前半まで原野谷川の本流が流れていることが確認され、古墳時代初頭～前期の遺構面もこの河川跡により大部分が削平を受けていたためである。

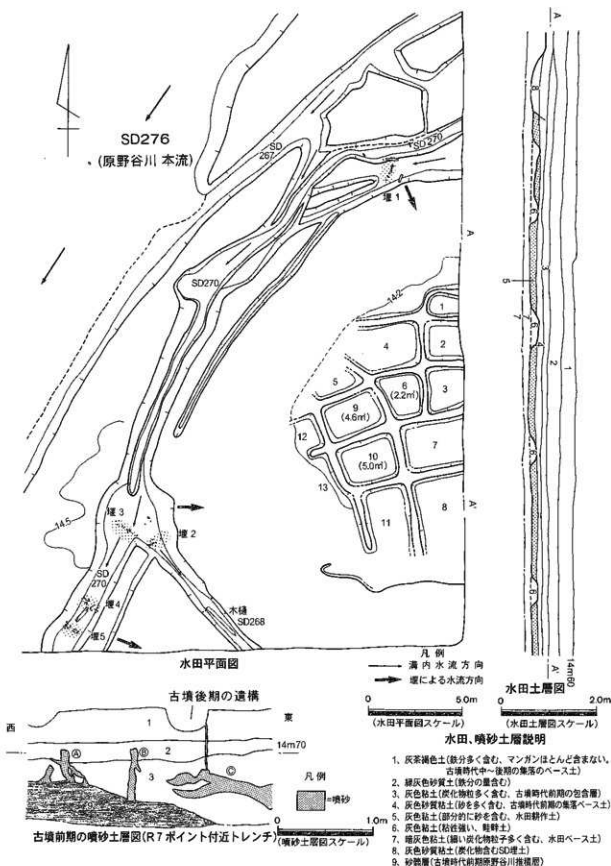
水田関係の遺構は給排水用の溝（SD267・270・268）、給水用の堰1～5、土橋用？の木樋管（SD268）、水田13面である。土層観察では、古墳時代前期の集落面が水田遺構直上に4層の砂質粘土層が堆積しその層をベースにして営まれていた。すなわち、自然堤防に近く位置している水田遺構であるため、河川の流路位置次第で水田、集落どちらにも利用できた場所であると思われる。

水田を埋めていた土層は砂質ではあるが基本的に粘土であるため、水田の畦畔を形成する土や水田の耕作土との区別にはかなり苦労した。よって、SD270に沿って存在していたと思われる大型畦畔はうまく検出できなかったし、畦畔本体もかなり圧縮された状況が見られ水田ベース土と畦畔土が類似していたので、疑似畦畔B（斎野裕彦 1987）と畦畔本体との土層の区別はつけられなかった。

水田は全体面積の判明したものは僅か3面の水田で、2～5m²のかなり小型の水田であり、他の水田も残存部分のみと同様な面積に収まりそうなものばかりである。各水田の配置は概ね東西方向の畦畔の通りが良さそうで、堰からの給水が西から東への水の流れを想定できそうな状況とも一致している。すなわち、堰1は水田域北半部、堰2・3が水田域南半部に対する給水が考えられ、排水用の溝は調査区外東に想定できそうである。堰4・5はSD268より南側の調査区外に展開すると思われる水田のためのものであろうと推定され、位置的に見ても堰1と同じような場所にあることが理解される。木樋管は北と南の水田域をつなぐ土橋のために設置されたと思われるが、溝の再掘削の際に木樋管の蓋が除去されてしまったらしく、最終的には用をなしていない状況で検出された。

水田の時期は田面出土の土器はほとんどないが、SD270内の土器と集落面の土器との時間差は若干認められるので、前半期Ⅰ-2～Ⅱ-1期（S字壺B類新段階～C類S字壺最古段階）の3世紀末～4世紀前半に該当するものと考えている。そうすると、本調査区外北西地点の静岡県埋蔵文化財調査研究所国一バイパス調査区（以後県バイパス調査地点と記述）で検出されたV層水田と一部同じ時期に存続することになり、古墳時代前期水田は旧原野谷川の破壊がなければ本調査区全面の広大な範囲で営まれていた可能性もある。本調査区北西隅で検出された住居群は前半期Ⅰ-1期～Ⅰ-2期3世紀後半～末に該当するものであり、その上層で水田面は検出できなかったがⅢb層直下でプラントオパールが少量検出されている（第3章参照）。このように坂尻遺跡の古墳時代前期水田は本調査区全域に広がっていた可能性があり、集落本体は本調査区外東側のより高い自然堤防上に立地している可能性が高まった。今後前期の遺構面の調査が、他の調査地点でも進むことを期待したい。

さて、今回の古墳時代前期の調査面でのもう一つの成果は、今までに知られていなかった古墳時代



第231図 古墳時代前期の水田跡・地震痕跡土層実測図

前期後半に該当しそうな地震痕跡が確認されたことである。代表的な地点（R7ポイント付近）の断面図を第231図に図示した。古墳時代前期の地震痕跡は寒川旭氏の現地指導により認識された液状化現象による噴砂跡が、古墳時代前期の旧原野谷川堆積部分のうち下層に砂礫層、上層に砂質粘土層が堆積した部分で多数確認された。液状化による裂目の多くは旧原野谷川流路方向に並行して確認されている。第231図の土層断面図を見るとAとBが古墳時代前期の噴砂跡、Cは白鳳（684年南海地震対応、寒川旭 1992）の地震に関係したものであろう。これ以外にも明確に時期は押さえられないが、平安時代に堆積したと推定されるⅡ層の上面で平安末～鎌倉時代の遺構と共に噴砂跡が確認できるので、これなどは1498年の明応の地震かそれ以前の中世の地震に対応する噴砂跡と考えられる。

さて、AとBの噴砂跡は2層（基本土層Ⅳ層）の中間の位置でいずれも止まっており、この面が地震発生時の地表面付近であると推定される。2層は古墳時代前期（Ⅱ-1期）4世紀前半代の遺構・包含層面と旧原野谷川野河川堆積物上層に堆積した層である。そして、1層（基本土層Ⅲb層）上面は奈良～古墳時代中期中頃の遺構確認面であるため、1～2層の時期幅は4世紀後半～5世紀前半と捉えられる。しかし、1～2層の堆積時間を考えると、4世紀後半の前期後半に該当するのがもっとも妥当な地震の発生年代と考えられる。この年代の南海地震に関係した地震痕跡は西日本では現在確認されていない（寒川前掲）。今後、古墳時代前期における南海地震の確認が注目される。

古墳時代後期の集落構成（第232図・第233図）

今回の調査地点においては、古墳時代後期の遺構・遺物が過去の県バイパスの調査区、袋井市教育委員会の国一バイパス調査区（以後市バイパス調査区と記述）をも遥かに凌駕する規模・量をもって検出された。本節では、遺物整理の結果得られた年代による遺構群についての分析をする。

集落構造で特徴的なのは、第232図に示した通り遺構群の中で人工的に掘削された溝により区画された5地区の遺構群（区画地A～E）と、明確な区画溝を持たない竪穴住居群に別れる集落構造になっていることである。区画地AではSD80に囲まれた範囲にSB14～16の大型掘立柱建物3棟、SB12・13の倉庫と思われる総柱の掘立柱建物2棟、竪穴住居4棟、付属施設として円形周溝を持つ小型掘立柱建物のSX1からなる遺構群である。大型掘立柱建物と竪穴住居に切り合い関係が認められるため、中央に大型掘立柱建物2棟、西に倉庫2棟以上、東側に厨屋と思われる竪穴住居1～2棟、特殊掘立柱建物1棟から構成される区画地と考えられる。特殊掘立柱建物SX1は、建物の性格を示す遺物の出土はなかったものの、隣接するSD80からは土師器の坏類を主体とする多量の土器の廃棄が見られた。首長が主催する宴会や祭礼に用いられたものと考えることが可能ならば、区画地の南隅に位置するSX1に祭祀的な性格を与えうるかも知れない。さて、区画溝のSD80は調査区内では一見不定形の溝にも見えるが、集落内の水運にも利用されたと思われる大溝のSD148との組み合わせで考えると、区画地の東側にSD80の区画溝を概ね北東から南西方向に直線的に配置し、南コーナー部分に特殊掘立柱建物のSX1を配置している構造になっており、北側と南側の区画をSD148を利用し、西側の区画は水田遺構の確認が出来そうな低地部により区画されている構造が想定される。明確な方形区画を志向するものではないが、不定形区画というよりも地形を巧みに利用した方形区画地と考えると良いだろう。ただし、掘立柱建物と竪穴住居の主軸方向は概ね南面する同一方向にあるが、SD80の方向とは一致しない。このことは、SD148の流路に規制を受けたためと考えられる。

区画地BはSD148の大溝と区画地AのSD80の間に挟まれた形で存在する結果から区画が認められる区画地で、明確な方形区画を志向する区画地ではない。北半の竪穴住居、南半の小型掘立柱建物に分けられそうであるが、掘立柱建物の中にはSE3を中心とする奈良時代の掘立柱建物も含まれる可能性がある。

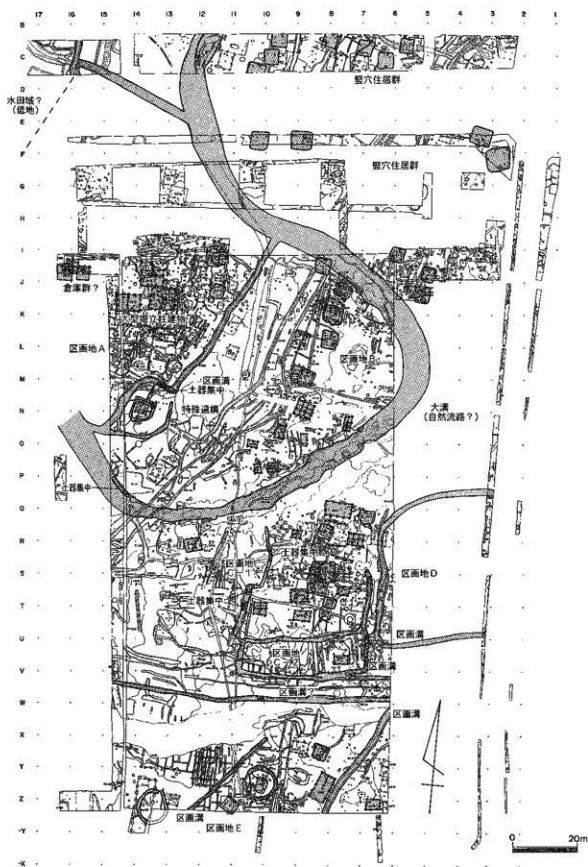
区画地C・Dは明確に方形区画を志向した区画溝により形成された区画地である。区画内部の状況

が分かる区画地Cはやや大型の竪穴住居SH43～46を中心に、SH40・41・47・48の小型の竪穴住居4棟、SB73・75・78の倉庫と思われる総柱の掘立柱建物、SB69・72・77・87・89・91の平地式住居と思われる掘立柱建物で構成されている。中央の大型竪穴住居は4回の建替があり、区画溝も南側に1回の拡張をしていることから、中央に大型竪穴住居1棟、小型竪穴住居1～2棟、倉庫風の掘立柱建物1～2棟、平地式住居2～3棟からなる居住区だったと推定される。倉庫風の掘立柱建物は区画地Aの倉庫掘立柱建物と比べると明らかに貧弱な造りである。また、SB91の長屋の平地式建物は居住のための建物というより何らかの作業建物か家畜を収容する家畜用建物、小型の掘立柱建物であるSB77・90は納屋のような建物とも想定される。これらの想定が正しいならば、母屋の大型竪穴住居1棟、厨屋などの用途が推測される小型竪穴住居1～2棟、倉庫1～2棟、納屋1～2棟、平地式住居1～2棟、作業棟ないし家畜棟1棟からなる用途の建物群と考えられる。区画地Cについては、区画地Bの溝が全周しないことで分かる通り、区画地Bとの組み合わせのなかで成立している区画地であること以外内部の状況は分からない。

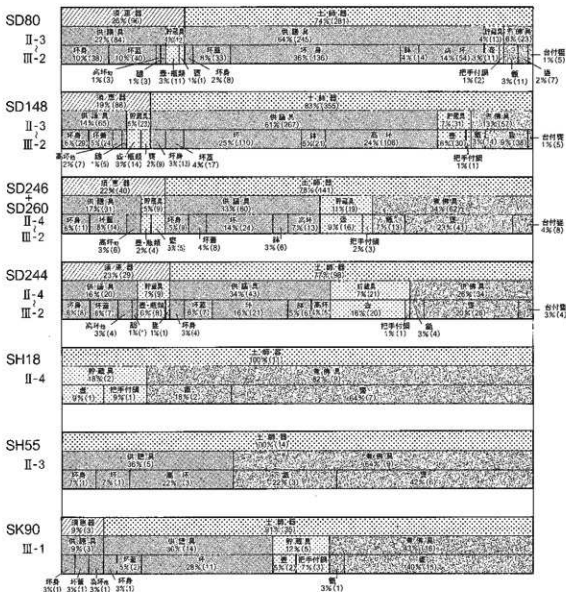
区画地Eについては並行するSD202とSD217に囲まれた溝の中に存在する建物群で、明確な方形区画を志向する区画地ではない。SH37のように円形の溝により区画された中に存在する竪穴住居と、SH36・38のように周辺部に何の施設もない竪穴住居、内部に間仕切りのような小柱穴をもつ長屋風の掘立柱建物が散在する。何れの建物も溝の主軸に規制されるような方向に向いているため、溝により規制された区画地として認定したが、建物配置に規則性はないし明確な方形区画地ともならないので、明確に建物群の区画を志向する区画地A・C・D、建物配置に種別の規格性のある区画地Bとは性格が異なる区画地であろうと思われる。区画地Eについては、竪穴住居の該当時期を検討するとほとんど7世紀代に該当するらしいので、広い区画の中に長屋の平地式建物1棟が存在することになる。仮にこの建物が家畜用建物と考えると、区画地Eは家畜の放飼地になる可能性もでてこよう。

調査区北東隅や東側に展開する竪穴住居群については、明確な区画溝は確認されていない。過去の灰土遺跡の調査でも、区画地A～Eの何れかに該当するような溝も確認されていないが、調査面積が狭いため本当に区画溝がない地域なのか定かでない。市パイパスや袋井市教育委員会による温室や倉庫建設に伴う調査区で南北方向に掘削された大型の溝も確認されているため、今後の調査次第ではこれらの竪穴住居群も区画溝を伴う可能性がある。ただし、方形区画を志向する溝、明らかに古墳時代後期に該当する大型の掘立柱建物については、今回の調査地点より東側でなされた過去の調査区においては未発見である。

このように今回の調査の成果から5つの区画地が見られたが、その内部の建物群の状況はそれぞれ異なる。さて、その建物群の性格を判断するについて、区画溝から出土した土器の器種比率が参考になるため、その組成率を第233図に示した。区画地Aの区画溝SD80、区画地Bも関係した大溝のSD148と、区画地Cの区画溝SD246・260、区画地Dの区画溝SD244を比較すると差は明らかである。前者は土師器の坏や高坏類などの供膳具が60%以上、後者の供膳は30%以上、須恵器の供膳具と合わせても前者は供膳具は70～80%以上、後者の供膳は50%以上となり、供膳具の組成比率の違いは明らかである。これに対して市パイパス調査区の竪穴住居群の中を掘削された古墳時代後期の溝であるSD23・25・27などの組成比率を見ると、須恵器・土師器の供膳具の比率はSD23で23%、SD21で58%、SD25Aで36%、SD27Aで64%となり多少のデータのばらつきはあるが、60%を越えるのはSD27Aのみである。また、土器の出土量の多かった竪穴住居群中のⅡ～3期のSH55、区画地B内のⅡ～4期のSH18の組成を見ると、SH18で供膳具は0%、SH55でも土師器のみの供膳具が36%と低い比率になっている。特にSH18の土師器の煮沸と貯蔵具のみの比率が気にかかる。厨屋として使用された竪穴住居だろうか。ただし、首長層の威信財とも思える須恵器の比率はSD80で26%が最高になるが、他の何れの溝も10～20%前後の比率にはなるため、遺構の性格が須恵器の比率と直接的に結び付かない



第232図 古墳時代後期の集落構成図



第233図 古墳時代後期の主要遺構別土器組成図

ことが判明した。

以上推測をまじえた集落構成・内容が正しいものならば、区画地Aの優位性は揺るがないものと考えられ古墳時代後期の首長の居宅に、区画地C・Bはそれらの下位に従属する有力農民層の居宅、区画地Eは家畜の飼育場所、区画地Bは首長に直接従属する住民の居住地、堅穴住居群は一般農民層の住居群と考えられようか。この検討結果が正しいならば、古墳時代後期の首長は集落の内部に居住していることとなり、古新田遺跡に見るような一般農民層を含まない首長居宅の集落形態とは明らかに異なる（浅羽町教育委員会 1992・1993）。おそらく、当地域で前方後円墳の消滅時期が6世紀中頃であることから、6世紀中頃以前には古新田遺跡に見るような古墳時代中期的な集落外の隔絶した場所に首長居宅を求めるやり方から、古墳時代後期になると今回の坂尻遺跡のような集落内の一角に

首長居宅を構えて農民を集住させて支配しようとするやり方になるのではないと思われるのである。さらに、その配下には有力な農民層、さらにその下位に一般農民層や首長に直接従属するような住民層が居住する重層的な関係が読み取れるのである。しかしながら、隣接遺跡の原川遺跡などの状況を見るとすべての集落に首長層が居住していたとも考えられない。よって、原川遺跡などの隣接するいくつかの小集落を統括する首長が居住する中心集落として坂尻遺跡を評価することができるのではないだろうか。今後その階層性を証明する手掛かりとなる横穴墓や群集墳との関係を比較する必要があるであろう。また、今回の調査区では確認できなかったが、首長層の政治・権力を支えたであろう水田遺構や、鉄の管理に関係した鍛冶遺構などの生産遺構の検討も必要になってくよう。

奈良時代の集落構成（第234図）

今回の調査地点における奈良時代の遺構は、古墳時代後期の遺構に比べるとかなり少ない。しかし、坂尻遺跡を佐野郡の郡衙・駅家と認定するについていくつか興味深い遺構群、また面的に調査することができたため、官衙の周辺遺構の在り方についての資料がえられた。遺構群は井戸を中心として6地区の建物集中地区が見られ、それらを大きく区画する溝らしいものが見られた。

建物集中地点は比較的大型の掘立柱建物を中心とする建物群4～7と、小型の掘立柱建物からなる建物群1～3に分けられる。建物群1～3では平地式住居と思われる小型の掘立柱建物2～3棟からなり、井戸中の遺物から検討すると建物群1とSE4が中・後葉、建物群2とSE5が前葉、建物群3とSE3が後葉に該当するものと思われる。

建物群4はSB32の3×3間の総柱の掘立柱建物を中心としてSB31・30・38の2×2間の総柱の掘立柱建物からなる。間口規模がやや離れるSB28・29・43は古墳時代後期に遡る掘立柱建物の可能性がある。何れも総柱の倉庫建物で、古墳時代後期になるとと思われる後者を除外すると建物の配置は一定方向にある。周辺に井戸や遺物を多量に出す遺構もないため、生活空間を感じさせない建物群である。郡衙正倉群に関係するとはいえないが、郡衙の何れかの施設に関係した倉庫群であると考えられよう。時期は特定する遺物の出土はないが、SB32の柱穴内で白鳳期の南海地震（684年）に関係したと思われる液状化の裂目が観察されたため、これらの建物群の成立年代が奈良時代以前の白鳳期に遡る可能性が非常に高いものとなった。建物構造から見ても建物群が古墳時代後期とは到底考えられないので、これらの建物群が佐野郡衙関連施設だとの推測が可能ならば、佐野郡（佐益評）衙の成立が684年前後以前に遡ることを提示する非常に貴重な遺構群といえる。

建物群5は井戸を中心としてL字型の建物配列をなし、井戸北側にSB67・68の2×3間の総柱の掘立柱建物とSB66の2×2間の総柱の掘立柱建物の合計3棟の倉庫建物、東側に中心建物と思われるSB76の比較的大型の底付建物と、SB64・88の中心建物に付属すると思われる小規模な平地式と思われる掘立柱建物からなる建物群である。時期は柱穴内・井戸（SE19）・付近の土器集中の出土土器から見ると、前～中葉に該当すると思われる。柱穴の掘方規模や形状から見ても今回調査区東側に展開する官衙中心域と思われる建物群と類似するので官衙施設の一つと考えられる。建物配置から見ると倉庫のほか主殿を含む住居と井戸をもつ居住空間が存在する建物群で、官衙のなかでどのような性格をもつ建物群が確実な案をもたない。ただし、市バイパス調査区で出土した墨書土器のうち「後家」、「東家」や「竹村殿」に注目すると、これらの「家」「殿」が郡衙内に存在する諸施設群の単位を現すと想定されるならば、建物集中5が「家」「殿」の実態と考えられる。建物群6も建物配置は分らないが、底付建物を含むので建物群5と同様な「家」「殿」の単位になる可能性がある。その性格はSE19を始めとして今回調査区から出土したふいこの羽口に注目すると、官衙内での鍛冶に関係した建物群であるとも考えられる。とすると、すでに知られている郡衙内で鍛冶と呼ばれた下級役人のなかで鍛冶関係の役割を担った人々が存在し、国衙曹司の役割に類した郡衙工場の施設単位を「家」

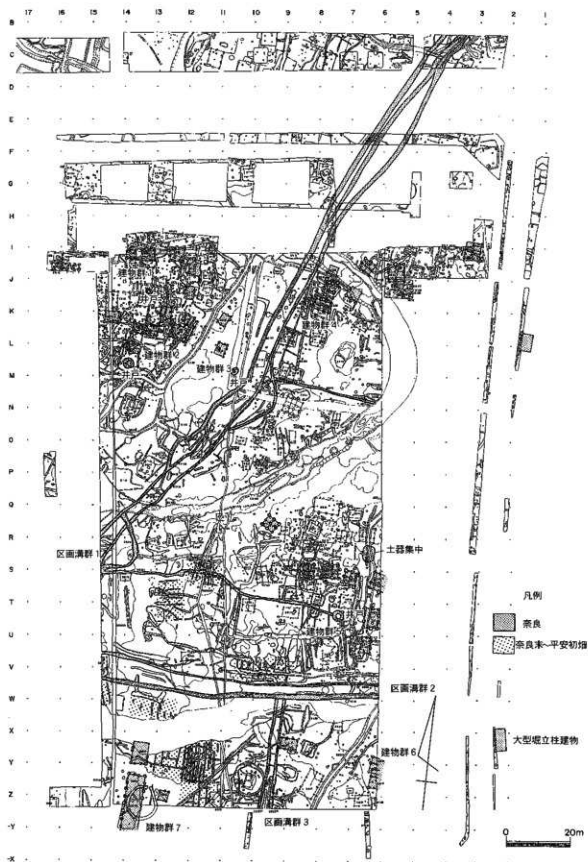
「殿」と称した可能性も考えられる。また、今回の調査地区内で出土の目立った「田人」や「田子」などの「田」関係の墨書にも注目すると、例えば『令義解』に規定された国司の所管ではあるが田令係丁項に見える雑色の官衙直営田を管理する下級役人を現すとの推測が可能ならば、これらの人々が関係した「家」「殿」になる可能性もある。しかし、これらの可能性は今回調査区内で鍛造遺構自体や、「田」関係の墨書が係丁や雑色として証明しうる確実な文字資料が検出・出土していないため推論の域は出ない。あくまでもいくつかの可能性の一つとして提示しておきたい。

今回最も注目されるのは建物群7のSB58の長殿を中心とした建物群である。SB58は間口3×7間以上で南北方向17m以上、SB57も北半分は近世溝で壊されているが3×4間以上の建物で最大で見積ると南北14mの3×7間の長殿になる可能性がある。このような長殿と目される建物は今までの坂尻遺跡の調査では確認されていない。静岡県内の奈良時代の建物では、敷智郡衙の中心城（郡庁）と目されている梶子北遺跡で、長殿がL字状にならぶ状況が確認されている。おそらく、全体像は郡庁の正殿をコの字状に取り巻く長殿になると思われる。遠江国の国衙と目されている磐田市御殿・二之宮遺跡でも主殿に対して脇殿らしい長殿をL字状に配置した建物群が検出されている。この建物群は国庁ではないが、国司館などの国衙関連の建物群の一つと考えられている（磐田市教育委員会 1994）。県外では滋賀県の栗太郎衙と目されている栗東町岡遺跡（栗東町教育委員会他 1990）、神奈川県鎌倉郡衙と目される今小路西遺跡（鎌倉市教育委員会他 1990）、福岡県の御原郡衙と目される小郡市小郡遺跡（小郡市教育委員会 1980）で、長殿をコの字状に配置し中心に正殿を設ける型式の郡庁が確認されている。このように、建物群7については建物配置の全貌が明らかでない現在その性格を輕輕に論ずる危険性はあるが、長殿は各地の郡衙建物なかでは郡庁に採用される例が多いことから、郡庁関連の建物群になりうる可能性もできたといえる。反対に、県内でも志太郡衙の藤枝市御子ヶ谷遺跡のように長殿を持たない郡庁？をもつ遺跡もあるので、長殿が郡庁建物の特徴には必ずしもならない側面もある。しかし、建物群7は何れにしても一般集落に採用される例はないので、佐野郡衙に関係した建物群の一つであると考えている。今後の周辺地域の詳細な調査が待たれる。

以上の建物群を区画する確実な塀や欄柵は残念ながら確認できなかったが、いくつかの区画溝らしいものが検出されている。一時期のものとは考えていないが3つの区画溝群が明らかとなった。区画溝群1は北東から南西へのびた溝群で、概ね並行する2本の溝からなる。この溝群は建物群1～3と建物群4・5を区画する可能性がある。すでに述べたように建物群1～3と建物群4・5の建物規模と配置は全く異なり、前者は小規模建物群、後者は官衙の建物群にまとめられることから、官衙域とその外域に区画する溝とも考えられるが、溝の伸びている方向は国家座標で東に20度振れており、川田藤蔵洲遺跡で検出された条里型水田の広域条里方向が国家座標で西に23度振れる状況（袋井市教育委員会 1993）とは一致しない。また、建物群1～3が官衙と全く関係のない一般農民の集落の建物群との確証もないため、現状では郡衙内での建物群の性格に関係した区画溝としかいえないようがない。

区画溝群2は東西方向にのびる2本の並行する溝からなる。現地調査の時点では古代東海道の側溝になるのではないかと意見も出たが、溝間の道路部分と思われる幅が一定しないこと、道路幅が最大でも8m程度にしかならないので、曲金北遺跡で発見された東海道の遺構が道路幅は一定で9mを測ることから見て（及川司氏ご教示）、東海道の遺構とするには問題が多い。むしろ、区画溝群3との関係から考えると建物群7を方形に区画する溝、さらには建物群7と建物群5・6を区画する溝になる可能性が高いと思われる。区画溝群3の主軸方向は磁北で真北になり、建物群7の主軸方向と一致する。よって、区画溝群2・3は郡衙内部のいくつかの建物群を区画する溝と考えたい。

以上のように、今回の調査地点では佐野郡衙の郡庁域の一部？、それに付随する「家」と称される曹司的役割を担った郡衙を構成する一つの建物群を検出した可能性が指摘しうる。とすると、今回の調査区より東で発見されている、いくつかの大型の掘立柱建物は墨書土器の出土状況が示すように駅



第234図 奈良時代の集落構成図

家ないし伝馬、館、厨家、番丁、津、市関係の建物などの官衙関係の建物群になるのだろう。私案であるが、市バypass調査区で駅や厨家関係の墨書土器が多く出土しているの、この調査区で駅家あるいは厨家が存在しており、今回の調査区周辺が郡衙中心域になるのではないかと推測している。

今回の調査でも一つの重要な問題提起は、建物群4で確認された液化化現象から佐野郡衙が684年以前の天武朝の「評」(佐益評)段階から成立していた可能性ができたことである。大宝令以前の「評」段階の文字資料は目下のところ坂尻遺跡では出土していない。数智郡衙関連遺跡の浜松市梶子・伊場遺跡出土の木簡のなかに「評」段階に該当しそうな資料がみられ、なかでも天武朝に遡りうる資料は梶子遺跡で不確定ながら己卯年(679年)の紀年銘木簡(浜松市文化協会 1994)が、伊場遺跡で辛巳年(681年)・乙酉年(685年)の紀年銘木簡(浜松市教育委員会 1980)が出土しているので、数智郡衙は天武朝の「評」段階に溯評衙として成立していた可能性が高まっている。同様に今回の調査区ばかりでなく今までの坂尻遺跡の各調査地点において、古墳時代後半期土器Ⅲ-2期(7世紀第3四半期)をもって溝や建物群が一斉に廃棄され人工的に埋め立てられていく状況が得られている。また、川田藤原遺跡で検出された条里水田で判明した広域条里の主軸方向と、今回検出された郡衙関連の建物と思われる建物群4~7や区画溝群2・3の主軸方向と合わない原因として、広域条里設定以前に評衙建物群が磁北方向に設置されていたことが考えられる。これらの点からも佐野郡衙も天武朝に佐益評衙として成立していた可能性が指摘しうる。しかしながら、肝心の天武朝段階(7世紀第4四半期)の後半期土器Ⅲ-3・4期の土器は、現在までに実施された坂尻遺跡における今回調査区やその北・東側、に展開する調査区からはほとんど出土しない。おそらく、天武朝にそれ以前まで続いていた伝統的な首長が居住した古墳時代の集落を一端は廃棄して、今回の調査地点付近の狭い範囲で官衙城を設定したためではないかと想像されるのである。その範囲は今回の調査地区東側には、今までの調査成果から見てほとんど及んでいないのではないかと推測している。

以上の想定が正しいものならば、坂尻遺跡での郡衙成立時期は天武朝に遡り、山中敏史氏が提唱された郡内最有力首長の本拠地に郡衙が成立する本拠地型郡衙遺跡A類に分類されるもの(山中敏史 1983)と考えられる。また、山中氏が指摘した通り首長の居宅を一旦廃棄して、別地点に郡衙施設を設定することも証明された遺跡の一つとなりうるであろう重要な成果がえられた。

平安末〜鎌倉時代の集落構成(第235図)

遠江における通常の中世集落は、建物の建替が激しく建物群の単位が抽出できないことが多い。しかし、今回の調査区では遺構の重なり合いがほとんどなかったの、建物群の抽出が容易でしかも井戸遺構や区画溝の組み合わせから時期認定も容易に行うことができた。すなわち、第235図に示したように、12世紀代ではI期古段階(12世紀第2~3四半期)、I期新段階(12世紀第3四半期)、II~III-1期(12世紀第4四半期~13世紀第2四半期)の3時期に抽出できた。

I期古段階では南北に設定された区画溝SD16を基本に、その西側内部に東西方向に区画溝を設置して屋敷地を設けている。屋敷地の規模は南北30~45m、東西70~90m?となり、東西方向の数値が今少し確定できないが、この数値で屋敷地面積は200~300m²となりほぼ一定の面積をもち条里の長地型地割に近い屋敷地が6地区検出された。内部は例えば区画地I古-4を見るとSB9・10の底付母屋2棟と、SB7の総柱の倉庫と思われる建物1棟、SE2の井戸1基から成るが、他の屋敷地を見るとSB11・98のような納屋のような小規模建物も確認されるので、母屋2棟、倉庫1棟、納屋1~2棟、井戸1基の建物群からなり、この組み合わせが典型例となろう。同様に屋敷地I古-3でもSB5・6の底付の母屋2棟、SE1の井戸1基、区画地I古-2ではSB4・98・108?の底付建物の母屋3棟、SB107の総柱建物の倉庫1棟、SB11・98の小規模建物の納屋2棟、SE24の井戸1基が確認された。

II期新段階ではSD17を区画溝とする屋敷地と、その南に明確な区画溝をもたない雨落ち溝を持つ

特殊な底付建物であるSB2・8が抽出できた。区画地Ⅰ新-1はⅠ期古段階の区画地群とは全く異なり、内部に井戸や生活痕跡を示すごみ穴と思われる土坑は見つかっていない。内部をさらに方形に区画するSD13・14の小溝(塀?)内部にSB1の底付建物と思われる特殊な建物1棟が確認できているにすぎない。この区画地は現代の土地宝典の区画割と一致するため南北130m、東西70m、面積約9000㎡の長方形区画地と想定される。内部にはほとんど建物はなく、1棟ある主要建物も区画溝(塀?)をもち、井戸やごみ穴などの生活痕跡の遺構がないこと、SD17南西コーナー部分で祭祀用の墨書土器と思われるものが出土していることから、この区画地は神社などの宗教・祭祀関連の施設になると推測される。SB2・8については建物の性格を証明する遺物は出土していないが、明確な区画地をもつ建物群にならないこと、生活痕跡を示す井戸やごみ穴が見られること、共通の井戸になるとと思われるSE16からまとまった数の山茶碗(祭祀用?)が出土していることなどから考えると、区画地Ⅰ新-1内で実施された祭祀を行ったあるいはそれを維持管理した人々の居住した住まいである可能性を指摘しておきたいが、推測の枠をでるものではない。可能性の一つとして提示しておきたい。

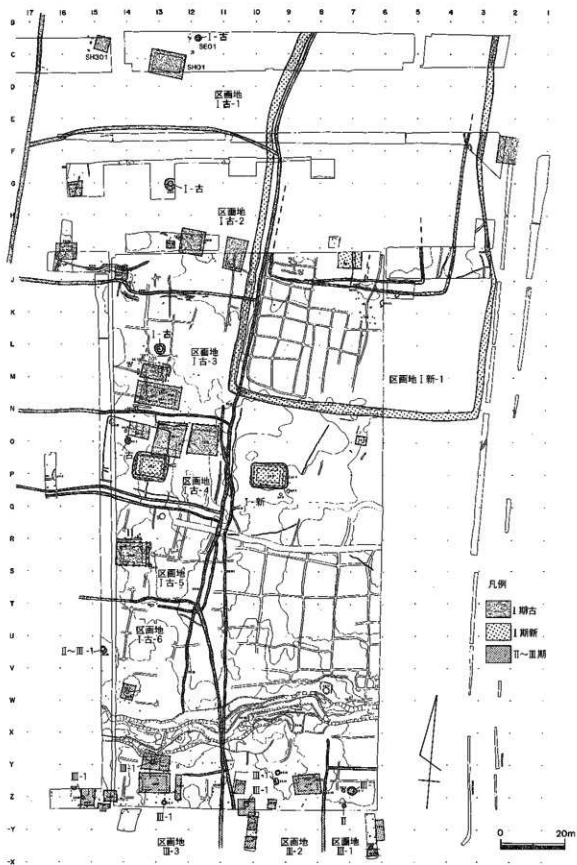
Ⅱ～Ⅲ-1期の遺構は調査区南端部分に集中して検出されている。区画溝はSD223とSD16とほぼ同じ位置に設定された溝を中心として3箇所の区画地が抽出できた。区画地内部の建物群の様相がある程度判明したのは、区画地Ⅲ-2とⅢ-3である。

区画地Ⅲ-2ではSB53の母屋と思われる底付建物1棟を中心として、SB51のSE10の井戸を伴う井戸付建物(厨房?)1棟、SB50・52の小型建物である納屋2棟、SE14・15の屋外井戸2基からなる屋敷地になると思われるが、南側トレンチ内でも2棟前後の建物が認められている。

区画地Ⅲ-3でもSB54の母屋と思われる底付建物1棟を中心として、SB48のSE8の井戸を伴う井戸付建物(厨房?)1棟、SB49の長屋、SB47・55・56の小型建物を含む納屋や住居3棟、SE9の屋外井戸1基からなる屋敷地になると思われる。

区画地Ⅲ-1も同様な母屋1棟、厨房と思われる井戸付建物1棟、納屋や作業小屋数棟からなる屋敷地になると思われる。いずれも似たような構成の建物群からなる屋敷地3箇所が東西に並んでいたと想定される。Ⅰ期古段階の集落がSD16の区画溝に強く規制されて屋敷地が設定されているのに対して、Ⅱ～Ⅲ-1期の集落が調査区南端の東西方向に計画的に配置されている状況に変化したのはいかなる理由からであろうか。おそらく、その屋敷地の配置は中世東海道に規制されて設定されたものと推測される。すると、中世東海道の位置は、現在の調査区外南に隣接して残された近世東海道とほぼ同じ位置にあったと想定される。東海道に面した屋敷地群が単なる農民の屋敷地なのか、あるいは東海道の交通業務に関係した人々の屋敷地なのか、明らかにしうる資料の出土はなかった。ただし、厨房と思われる井戸付建物の存在が気になる。この井戸付建物が中世宿場関連の建物の特徴となれば重要な調査成果となろう。今後の検討課題である。

さて、これらの屋敷地の区画割と中世の条里型地割との関係について検討してみたい。坂尻遺跡周辺の土地宝典による表層の条里型地割の復元は、すでに小柴秀樹氏により詳細になされている(小柴秀樹 1992)。小柴氏の分析によると周辺の表層の条里型地割の主軸方向は、今回の調査区域周辺300m以内に真北を指すC地域、これより北側の小字的場を中心とする狭い地域に西へ10度振れるB地域、今回の調査区西側に広がる広域の水田地帯で奈良時代以来の広域条里と同じ西へ21度振れるA地域に分けられるという。今回の調査区の平安末～鎌倉時代の建物と区画溝の主軸方向から見ると、Ⅰ期古と新段階の遺構群はC地域の主軸方向、Ⅱ～Ⅲ-1期の建物群の主軸方向はB地域と一致するもので、A地域の奈良時代以来の広域条里に規制された遺構群はなかった。しかしながらあえて比較すると、B地域に関係したⅡ～Ⅲ-1期の遺構群のほうが広域条里地割により近い数値で規制され、C地域に関係したⅠ期の遺構群は奈良時代の郡衙関連の遺構群との関係が強いことを指摘しておきたい。平安時代における坂尻遺跡での土地利用状況を証明する遺構群は少ないが、今回の調査区内で検出された奈



第235図 平安末～鎌倉時代の集落構成図

良時代末～平安時代初頭以降の時期に想定された畑遺構に、奈良時代の官衙建物と同じ主軸方向を示すものがあることに注目したい。おそらく平安時代のC地域においては、官衙建物と同じ方向を示す畑地が広がり、平安時代末に本調査区周辺部が再び集落域として利用されるようになると、畑地と同じ地割を利用してI期の建物群・区画溝を設置したと思われる。その後、鎌倉時代においてある程度奈良時代以来の広域条里型地割の影響を受けて設置された中世東海道の整備があり、それに規制されるかたちでⅡ～Ⅲ-1期の建物群・区画溝が設置されたためと考えられるのである。この仮説を説明するためには、古代～中世の東海道関連遺構と平安時代の水田・畑の地割遺構の更なる検出が必要となってくるので、この仮説の証明も今後の周辺地域の調査待ちということである。

以上のように今回の調査区で平安末～鎌倉時代の遺構から得られた成果は多大なものがあつた。すなわち、集落内部での土地利用状況が居住区から祭祀空間（神社？）、再び中世東海道に規制されたと思われる居住空間と目まぐるしく変わっていく状況と、中世広域条里型地割の集落内における復元状況の一旦を明らかにしたことである。そして得られた成果を確実にするための検討課題もさらに増加したが、坂尻遺跡は当地域の中世集落を考えるうえで重要な遺跡になることは今回の広範囲な調査区から十分に証明されたことと思う。今後は集落内ばかりでなく中世の条里型水田や畑の地割、東海道の遺構を対象として、周辺地域を含めたなかで発掘調査が実施されることが期待される。

第2節 遺物について

古墳時代前半期土器（第236図～第238図）

前半期の土器編年については、すでに前回の市パイパスの調査区の報告書（松井一明 1985）や、若作遺跡の報告書（松井一明 1990）で、Ⅰ～Ⅳ期区分の編年案を示してあるが、土器の型式組列については明らかにしていない。また、第2章でも述べた通り従来のⅣ期新段階を須恵器編年TK208段階並行としていたものを、後半期土器編年Ⅰ-1段階に編入した。そして、従来のⅣ期古段階に編年していたものを、古と新段階に細分しⅣ-1期とⅣ-2期とした。また、Ⅰ期については細分の可能性を提示していたが、今回の調査で得られた資料から細分の可能性が高まったので、Ⅰ期についても古と新段階に細分しⅠ-1期とⅠ-2期とした。他の段階については従来の資料に、追加資料を加えて型式組列を明らかにした。以下各段階の説明を加えたい。

編年

Ⅰ-1期（第237図・第238図） 本段階の資料は今回調査区SH33（1・2・6・14・19・20）、袋井市小山角田遺跡SK17（4・9・13・18・21、岩本貴 1995）、袋井市若作遺跡B12号住居（22、袋井市教育委員会 1990、出典以下同じ）、掛川市高田遺跡SB04（3・5・8・10・15・16、掛川市教育委員会 1988）、掛川市女高遺跡Ⅰ区4号住居（11・24、掛川市教育委員会 1983、松井一明 1985）、浅羽町青木遺跡AX1（7、浅羽町教育委員会 1984、出典以下同じ）、菊川町三沢原遺跡SB11（12・17・23、菊川町教育委員会 1985、出典以下同じ）が該当する。

壺形土器は弥生時代後期の菊川式の系譜を引くと考えられる壺A-1類（折返口縁）と壺B-1類（内彎単純口縁）と、広口の鉢形ともいえる形態をなす壺H-1類に対して、口縁と胴部がくの字状に接合し球形胴の形態となる弥生時代からの系譜が追えないもので、受口状口縁になる壺C-1類、複合口縁になる壺E-1類、直口縁気味の壺D-1類、口縁端部を摘み上げる壺F-1類が存在している。また、台付のものしか提示できなかったが所謂ひさご壺の壺G-1類が組成されている。後者のうち複合口縁になるE-1類、短頸の直口壺に類似するD-1類が畿内系、C類、F類とG類は伊勢湾岸地域からの系譜が考えられる。前者の菊川式系の壺は、図示した壺A・B類は胴部の張りには弱くより弥生時代的な要素を残すものであるが、他に胴部の下半の張りが大きくなるものの2種類が存在する。

しかし、何れも頸部の径は大きくなり、A類については外反が減少すること、B類についても内彎度が減少し大きく開くような口縁部形態に変化するため、弥生時代後期の菊川式壺とは峻別が可能である。壺H-1類についても口縁部が長いものから短く直立する形態に変化しているため、この型式についても弥生時代のものとは峻別が可能である。

高環については伊勢湾岸系の内彎口縁と脚の特徴を持つ高環A-1類、やや脚部が短く開くようになる新しい要素を持つA-2類、脚が大きく開く高環A類と同形態の坏部を持つ高環B-1類と、坏部に鋭がない畿内系高環が在地化し変容した形態?と思われるC-1類の3種類が見られる。

器台は脚部に貫通する穴を持たないが畿内からの影響で三河~遠江?での変容で生まれたと思われる小型器台（小型高環の可能性もある）であるA-1類のほか、伊勢湾岸~遠江で変容して生まれたと思われる山陰系器台のA-1類が少量確認された。

鉢は小型の器台A-1類とセットになるであろう畿内系と思われる小型鉢でくの字状口縁になるA-1類と、やはり畿内系と思われるコップ状の形態のB-1類が認められた。他に数少ないが皿状に開く弥生時代からの菊川式の系譜を引くが小型化しているC-1類も確認された。

台付壺は長胴化し口縁部は刻目が見られず横ナデ調整になる伊勢湾岸系（三河）の外反口縁（くの字系変容型）C-1類が主体となり、菊川式に系譜をもつ口縁部に刻目を施すA-1類、折返口縁のB-1類が少量残存する。台付壺C-1類と同形態であるが、台付でない平底壺A-1類も一定量見られる。ただし、台付壺C類の中には弥生時代的な球形胴のものも少量見られるし、反対にA-1類の中にも刻目を施す前に口縁部横ナデ調整を施す弥生時代には見られないものも存在する。また、伊勢湾岸系の薄壺はS字壺B類の内でも立ち上がりが高く長胴傾向があり古手になりそうなA-1類、畿内系でV線式の叩壺A-1類、三河~遠江系の台付叩壺A-1類が存在している。

以上I-1段階は壺形土器は弥生時代の菊川式の系譜を引く壺A・B・H類が主体的となり、畿内系の壺D・E類と伊勢湾岸系の壺C・F・G類は今だ少ない段階である。高環は高環C類の祖形が畿内系高環と考えられる他は、ほとんど伊勢湾岸系、器台については山陰系のものが少数存在はするが、小型器台と小型鉢のほとんどは畿内系のものであろう。しかし、近年出土した川田藤藏遺跡4区SF04のなかに、菊川式からの系譜をもつ高環が少量見られる（飯塚晴夫氏ご教示）。壺については、弥生時代に続いて台付壺が主体となるが、口縁部に刻目の施されているものはほとんどなくなり、形態的にも伊勢湾岸系（三河）の長胴の台付壺に変化している。伊勢湾岸系の薄壺であるS字壺や畿内系の叩壺の出土量は極めて少ない。本段階についてまとめると、壺については菊川式系が主体で畿内と伊勢湾岸系のものが少量、台付壺・高環については伊勢湾岸系、小型器台・鉢については畿内系にまとめられるが、S字壺を始めとする薄壺の組成率は極めて低い。

I-2期（第237図・第238図）本段階の資料は今回調査区SH25（32・34・35・37・39・43）、袋井市土橋遺跡SK1（25・48・49、袋井市教育委員会他 1985、出典以下同じ）、磐田市野原遺跡1号墓（36・44、磐田市教育委員会 1994、出典以下同じ）、浅羽町青木遺跡AK4（27・46）、菊川町三沢西原遺跡SB25（38・40）、同SK24（28）、同SX21（26・29・30・31・33・41・42・45・47）が該当する。

壺形土器は、菊川式系のA・B類は胴部の張りが弱くなり無文化が進んだ形態で、文様はあるが口縁の折返部が幅広になる変化を見せる壺A-2類（折返口縁）と、口縁部の内彎がほとんど見られなくなり短く開くように変化した壺B-2類（内彎単純口縁）が存在するが、何れも数は減少傾向にある。壺H-2類は口縁部の外反度が強まる以外、あまり変化がない。また、折返口縁の壺であるが球形胴で口縁部はさらに幅広の折返部を持つようになる壺K-1類が見られる。壺K類の確認数は壺A類とは反対に一定量組成される傾向にあるため、壺K類については菊川式系の壺A類とは別系譜になるものと考えた。折返口縁の特徴から見ると駿河湾からの影響で成立する型式と想定しておきたい。

畿内系の壺D・E類と伊勢湾岸系の壺C・F・G類についても、口縁の開き具合が大きくなる壺C-2類、球形化が進むがほとんど形態変化のない壺D-2類、口縁部の外反度が強くなる壺E-2類、口縁端部の摘み上げが長くなる壺F-2類、ひさご壺も胴部が下膨れで強く張る形態に変化した壺G-2類が見られ、組成率は何れも増加傾向にある。他に伊勢湾岸系の壺として口縁部に横位の沈線文と棒状浮文を配する加飾性のある壺J-1類と、ひさご壺の一種と思われる口縁部が内彎気味に長く伸びる壺I-1類も見られるようになる。

伊勢湾岸系の高坏A・B類は坏部がやや浅くなり脚部が外に短く開くようになる高坏A-3類、脚がさらに大きく開くように変化した高坏B-2類が存続する。

器台は前段階とほとんど変化のない在地系の小型器台であるA-2類のほか、脚部と受部に貫通する穴をもつ畿内系の器台B-1類が加わる。

畿内系の小型鉢A-2類・B-2類は底の形が小さいものから広いものへ変化する以外、ほとんど変化が見られず、小型鉢の主流として存続する。菊川式系の小型鉢C類は確認されない。

伊勢湾岸系の台付甕C類は口縁部の外反度がやや大きくなる程度で長胴傾向のC-2類があまり変化がなく存続するし、球形胴のものも少量存在する。口縁に刻目のある台付甕Aも口縁部の外反度が弱まり存続するが確認例は極端に少ない。折返口縁のB-1類は確認できない。平底甕A-2類も台付甕C類と同じように口縁部の外反度が強まり胴部の球形胴化が見られる変化をしている。伊勢湾岸系のS字甕は、口縁の立ち上がりが短くなり肩も張るように変化したB類の中でも新段階になるA-2類が、増加傾向をもって確認される。畿内系では引き続き一部ハケメ調整の見られるV式系の叩甕A-2類、内彎口縁で端部摘み上げ、内面へうろけられた薄甕である庄内系甕A-1類、三河～遠江系?の台付叩甕A-2類も小数存在している。

以上I-2段階は壺形土器は菊川式系の壺A・B類は極端に減少傾向となり、畿内系の壺D・Eも一定量組成されるが、伊勢湾岸系の壺C・F・Gを始めとして同系の壺I・J類などが加わり、伊勢湾岸系の壺はバラエティばかりでなく組成率も高まる。高坏・器台・小型鉢は、畿内系の小型器台B類が加わるが、前段階と同じくほとんどは伊勢湾岸系のもので占められ、壺と同じく伊勢湾岸からの影響が強い。甕は引き続き伊勢湾岸系の台付甕C-2類が主体でS字甕も増加傾向にあり、甕についても伊勢湾岸からの影響が強まる。畿内系の叩甕の出土量は極めて少ない。本段階についてまとめると、壺については在来の菊川式系が減少傾向で、反対に菊川系・畿内系を凌駕する形で伊勢湾岸系が増加し、台付甕・高坏についてはほとんど伊勢湾岸系、小型器台・鉢についても畿内系にまとめられる。S字甕B類の組成率は比較的高まり、中・東遠江でも製作が始まっている可能性が指摘しうる。

II-1期(第237図・第238図) 本段階の資料は今回調査区SD183(59)、同SD270(65・82)、市バイパス調査区SK2(60、袋井市教育委員会他 1985、出典以下同じ)、袋井市若作遺跡B1号住(63・79)、同B5号住(85)、同B9号住(58・68・73・80)、磐田市野際遺跡3号墓(51・55~57・66)、浅羽町青木遺跡AK6(52・54・62・64・69・81)、同AK9(53)、同AT1(77)、浅羽町新堀遺跡4区SF413(71、静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993、出典以下同じ)、同4区SF427(61・74・76・83・84)、同4区SF465(50・70・72)、同4区SD448(78)、同4区凹地(67)、菊川町三沢西原遺跡SK07(75)が該当する。

壺形土器のうち菊川式系のA・B類は、胴部の張りさがさらに弱くなり球形胴に近くなる形態に変化し無文となった壺B-3類(内彎単純口縁)として少量残存し、A類についてはK類に取って代わられ消滅している。畿内・伊勢湾岸系の壺C~J類については、壺F類が確認できなくなる他は、口縁の開き具合がさらに大きくなる壺C-3類、ほとんど形態変化のない壺D-3類、口縁部が直立気味に短く外反するようになる壺E-3類、球形胴に変化し口縁端部の面も形骸化する壺G-3類、扁平化した形態に変化した壺H-3類、口縁部の施文面が狭くなるが加飾性はある壺J-2類、口縁部が

短く内彎気味に伸びるようになった壺Ⅰ-2類の変化が見られ、組成率は安定的に一定量確認される。また、壺Ⅲ類についてはⅢ-3類とした口縁外面の文様が沈線文から羽状の刺突文に変化し、おそらくⅡ-2期段階に安定的に存在する所謂柳ヶ壺の祖形となる壺も存在する。さらに、本段階では球形胴で外反口縁の壺Ⅰ類、大きな外反口縁の壺Ⅲ類、広口壺である壺Ⅳ類、壺Ⅴ類から派生が予測される畿内系の壺Ⅵ類、球形胴で口縁部が直線的に大きく開く壺Ⅶ類が新型式として組成される。

伊勢湾岸系の高坏A・B類は坏部の内彎度が弱まり脚部がさらに外に短く開くようになる高坏A-4類、一層坏部が浅くなり脚も開くようになったA-5類、器高が低くなり坏部も小型化した高坏B-3類が認められる。また、高坏B類と同じく器高が低くなるという形態変化をした鉢形の坏部をもつ畿内系高坏のC-2類も目立って確認される。

器台は前段階とほとんど変化のない在地系の小型器台であるA-3類のほか、畿内の影響のもと伊勢湾岸へ遠江で成立したと思われる受部に稜を持たせるように端部を外反させるか、図示していないが端部を引き出すような形態をもつバラエティのあるC-1類、畿内系で受部の端部を積み上げ小さく開くD-1類が加わり、小型器台のバラエティと確認例が増加する。また、長脚化した脚部に円形の穴が穿たれた山陵系の器台と思われるA-2類も少数存在する。

鉢A・B類は前段階とほとんど変化せず小型鉢A-3類・B-3類として存続するが、畿内系の扁平な器形でS字状口縁をもつD-1類、口縁部が大きく外反する粗雑な作りの在地系？のE-1類などが見られ、小型器台と同様にバラエティと確認例が増加する。さらに、小型土器のうち本段階の最大の特徴として、所謂小型丸底埴と呼ばれる小型埴A-1類の出現があげられる。また、少量であるが口縁を水平に近く大きく開く脚付鉢A類も認めらる。脚付鉢A類と類似のものは三河でも分布が確認され、畿内で見られる有稜高坏が伊勢湾岸（三河？）地域で変容し成立したものと考えられる。

伊勢湾岸系の台付甕C類は口縁部は外反し球形胴に変化したC-3類が主体的に存続する。また、口縁部を内彎させる台付甕D-1類も少数ではあるが確認される。台付甕A類は全く確認できなくなる。平底甕AはA-3類の球形胴化が見られるが変化は少ない。S字甕はA-3類のように口縁の立ち上りが低くなり肩も強く張るようになるC類の最古段階、A-4類のやや肩の張りが下がったC類の古段階のものが安定的に一定量存在する。また、S字甕にはならないが、やはり伊勢湾岸系の薄甕で受口台付甕A-1類も少数確認される。畿内系の薄甕は内面へう削りが施され外面ハケメ調整、口縁部は内彎する布留系甕A-1類が少数存在している。

以上Ⅱ-1期段階は壺類について菊川式系の壺はB類とH類が極めて少量存続する程度となり、畿内系の壺はD・E類のほかO・P類が加わり、伊勢湾岸系の壺もF類はなくなるがC・G・I・J類を始めとして壺L・M類などが加わり、伊勢湾岸系ばかりでなく畿内系の壺もバラエティと確認数も高まる。高坏・器台・小型鉢は、前段階と同じくほとんど伊勢湾岸系のもので占められるが、畿内系と思われる高坏C-2類、小型器台D-1類、小型鉢D-1類、小型埴A-1類も加わり、壺形土器同様に畿内の影響が強まる。甕類は引き続き伊勢湾岸系（三河？）の台付甕C-3類が主体となるが、S字甕も一定量組成され、内面ハケメ調整の確認される例なども多数認められるので、中・東遠江においてもⅡ-2段階から始まったS字甕の製作も本段階で本格化したと理解される。畿内系の薄甕は布留系甕が伴うようになるが確認例は少ない。本段階についてまとめると、菊川式系壺がほとんど消滅、伊勢湾岸系の壺・高坏・台付甕のほかに、畿内系の複合口縁の壺・小型鉢・小型器台・小型埴などが目立って出現する畿内色の強まる時期で、前段階と比較すると大きな画期が読み取れる。

Ⅱ-2期（第237図・第238図） 本段階の資料は今回調査区では確認されず、市パイパス調査区SD 1・2（89・92・96・97・100・102・104・109・110・111）、袋井市土橋遺跡SK76（88・95・101・110）、同SI4（90・94・97・98・103・107・108・112）、袋井市高尾向山遺跡1号住（105・106）、磐田市野麻遺跡17号土坑（86・91・93・99・113）が該当する。

本段階になると壺形土器のパラエティは激減し、在来の菊川式系の壺B・H類は確認されない。折返口縁が大きく外反するように変化した壺K-3類、広口壺の壺N-2類も、口縁部の外反が大きくなる傾向で存続している。前段階隆盛を極めた伊勢湾岸系の壺はほとんどなくなり、僅かに壺J類の所謂柳ヶ壺J-4類として一定量残存するにすぎない状況となる。畿内系の壺も壺D類が口縁部が短くなり大きくも小型化し調整もミガキからナデへの変化、壺E類も口縁部の段が小さくなる変化、壺O類もO-2類のように口縁の開きが弱くなりミガキから横ナデ調整への粗雑化の変化、さらに口縁部が短く形的に外反するO-3類への変化、壺P類もP-2類のように口縁の開きが弱くなりミガキからハケメ調整の残存という粗雑化の変化が見られる。本段階において新形式で目立つのは、直線的に開く長い口縁を持った壺Q-1類の出現であろう。畿内の直口壺に系譜が連なるものだろう。

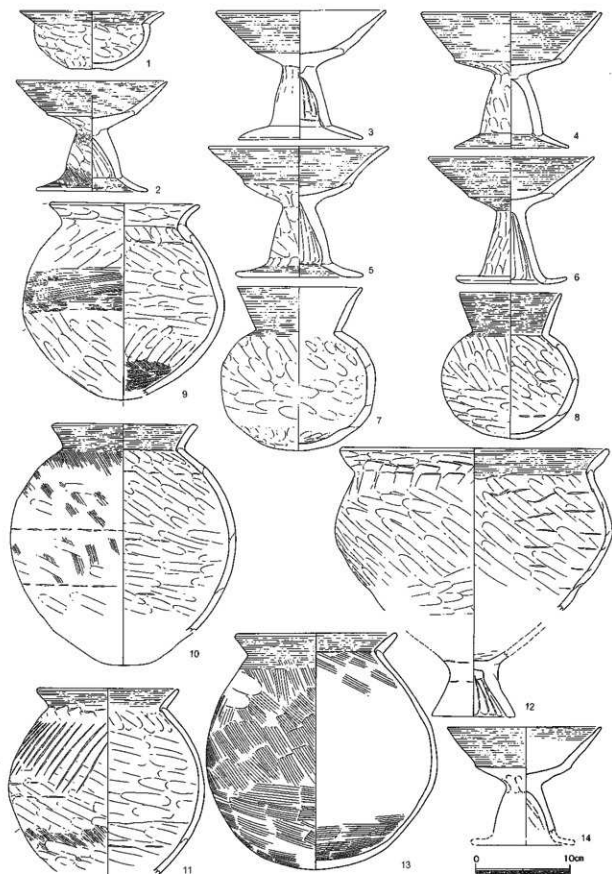
高坏も伊勢湾岸系のA-6類の脚部が短脚化して残存している以外、長脚化し脚部の裾を大きく開く型式で前段階まではミガキ調整で統一されていたものが、口縁部は横ナデ調整に変化するものが新たに出現し、坏部は高坏A類と同じく稜線を持つが比較的太い脚部で裾が大きく開くD-1類、細身の脚でラッパ状に開くE-1類、細身の柱状脚で裾が大きく開くF-1類が新形式として出現する。これらの新形式の高坏群は畿内からの影響で出現すると思われるが、いずれも坏部の形態がA類の影響が強く認められること、E類の脚が異常に高いことなど直接的に畿内と結び付けられる形態をなしていないため、畿内の影響下伊勢湾岸～遠江で独自に変容して生まれた型式の可能性が高い。

器台についても調整手法はナデ調整が主体となり、粗雑が進む以外ほとんど変化のない在地系の小型器台であるA-4類のほか、受部が短く開く在地的な小型器台E-1類が少量見られるにすぎず、前段階のパラエティと確認数は激減する。

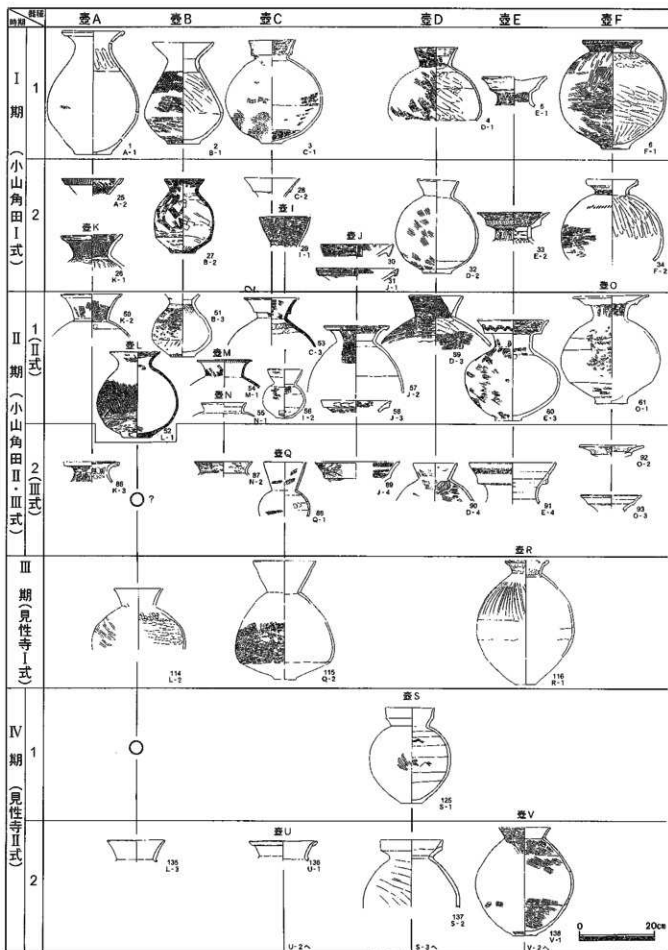
小型鉢B-3類は形態は直立気味の口縁と変化し、調整も手づくね上器のように粗雑化が進み存続するが、A類は確認できない。畿内系のS字口縁をもつ小型鉢D類はS字口縁が崩れ器高がさらに扁平化の進んだD-2類、S字口縁から単純に開く口縁、ナデ調整の目立つD-3類への変化が見られる。D-3類は畿内では認められない変化であるため、伊勢湾岸～遠江で生まれたと思われる。小型埴A-2類は胴部の扁平化が多少見られる程度で少量存続する代わりに、直立口縁で口縁部横ナデ、体部もナデ調整の粗雑化の進んだ小型埴B-1類が見られるようになる。これに、脚を付けたものが台付埴A-1類である。小型埴B類は畿内からの影響で成立していると考えられるが、脚付埴A-1類は伊勢湾岸～遠江で生み出されたものであろう。また、前段階で見られた畿内系と思われる脚付鉢もナデ調整の粗雑が進んだA-2類が少数確認される。

伊勢湾岸系の台付甕C類は口縁部はあまり外反しないで再び長胴化するとともに、脚部が粗雑化し低くなる形態に変化したC-4類が主体的に存続する。平底甕A類、台付甕D類は確認できない。前段階で一定量見られたS字甕は口縁の立ち上がりが一層低くなり球形胴に変化したC類でも新段階のA-5類、さらに肩部の横ハケメが消失し長胴化していると思われるC類の最末段階と思われるA-6類が一定量存在する。畿内系の薄甕は布留系甕の口縁部が直立気味に変化したA-2類、さらに直立するA-3類が認められるが確認例は少ない。

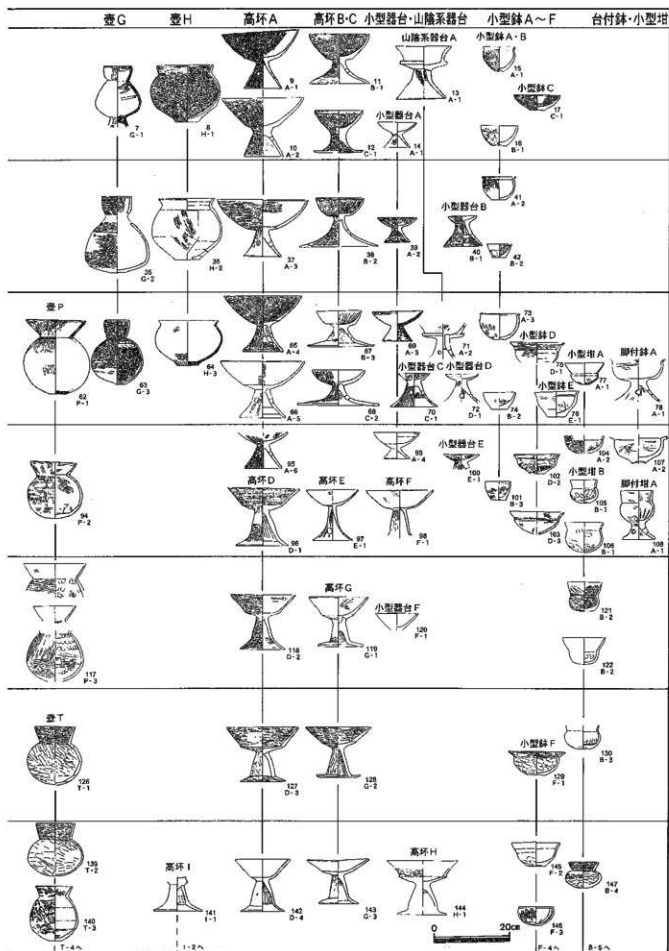
以上Ⅱ-2段階は壺形土器について菊川式系の壺は完全に消滅し、伊勢湾系の壺も僅かにJ類が存続する程度、畿内系の壺もパラエティがなくなりD・E・O・P類のほかQ類が加わる程度になる。高坏も伊勢湾岸系のA類から、畿内の影響があるD・E・F類が取って代わる状況であり、小型埴も畿内に起源のあると思われる小型埴B類が出現する。甕は引き続き伊勢湾岸系（三河?）の台付甕C-4類が主体となるが、S字甕も一定量組成されている。畿内系の薄甕は布留系甕が伴うが確認例は少ない。本段階をまとめると、菊川式系の壺の消滅、伊勢湾岸系の壺・高坏の激減、畿内系の壺が目立つがやはり型式のパラエティが減少する。高坏については伊勢湾岸系のA類が減少し、代わって新形式の高坏D・E・F類が出現している。新形式の高坏D～F類の起源は畿内の系譜に連なるものである



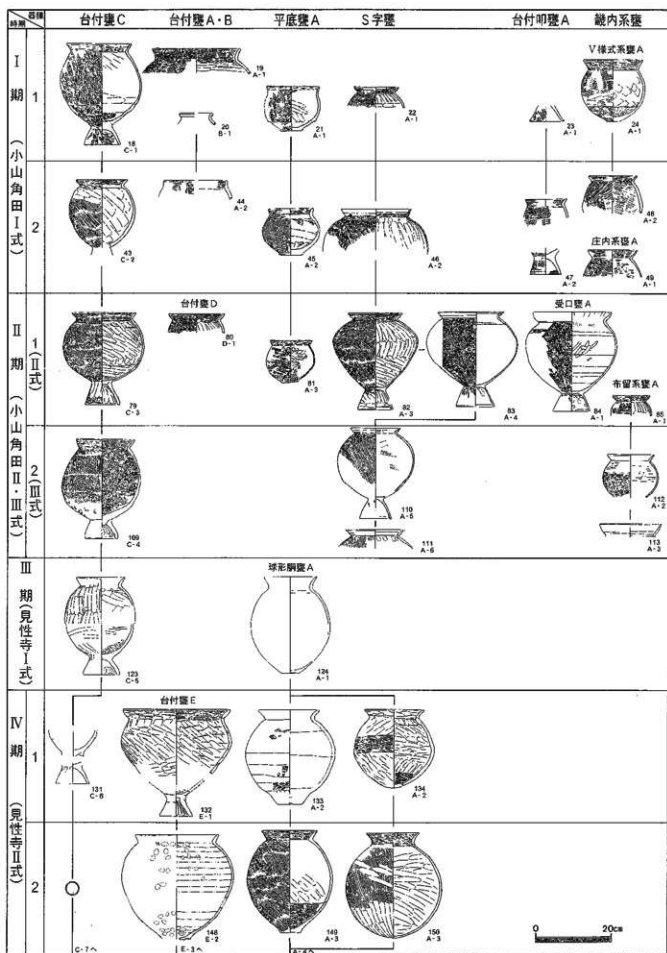
第236図 古墳時代前半期Ⅳ期土器参考資料実測図（1～11見性寺遺跡 13・14古新田遺跡）



第237図 古墳時代



前半期土器編年図 1



第238図 古墳時代前半期土器編年図2

と考えられるが、直接的に伝播した形態をなしていない。伊勢湾岸でも同形態の高坪が見られることから、伊勢湾岸・遠江地域内で成立している型式と予測される。小型器台・鉢・甕も引き続き畿内系が主体となるが、やはり型式のバラエティは減少し粗雑が進んだ小型坪B類の出現が示唆的である。甕は伊勢湾岸系の台付甕およびS字甕が主体となっているが、甕同様に型式のバラエティが減少する変化が見られる。しかし、S字甕の変化は比較的伊勢湾と連動しているように見えるがS字甕のA-5類と、甕C-4類については伊勢湾岸（尾張）ではほとんど見られない形態のようである。

Ⅲ期（第237図・第238図） 本段階の資料も今回調査区では僅かにSH5で断片資料が出土しているにすぎず、良好な一括資料と思われるものは市バイパス調査区SD16・17（114～124）の資料が該当するが、他の遺跡での出土例はほとんど知られていないので、型式群の内容は普遍化し難い段階である。

前段階の壺形土器のバラエティの激減はさらに進み、畿内系の直口壺であるQ-2類が確認できるが、球形胴から下膨れの胴部大きさも大型化し変化したもので同一系譜か検討を要する。他には粗雑なミガキ調整の施された外反口縁の球形胴の壺L-2類があるがⅡ-2期で確認されていないので、Ⅱ-1段階の伊勢湾岸～遠江系の壺L-1類と同一系譜になるかは検討を要する。他に外反口縁の長胴の大型壺R類が見られる。いかなる系譜から出現する型式なのかはよく分からない。畿内系は壺P-3類のように粗雑なミガキ調整が施される調整の粗雑化が進む以外型式変化のあまりないものが存在する程度で、前段階まで辛うじて保たれていた壺諸型式のバラエティは完全に失われている。

高坪も前段階まで見られた伊勢湾岸系のA・D～E類は消滅し、前段階の高坪Dからの系譜をもつD-2類、D類の変容あるいはF-1類の脚が短く太く変化したとも考えられる高坪G-1類が新型式として出現する。細身の柱状脚の高坪E・F類は形式的に連続するものは確認できない。

器台についても前段階からの型式はまったく確認できないが、僅かに新型式の単純に開く受部をもつ小型器台F-1類が確認される。小型器台のバラエティの消失は畿内と連動する動きではあると思われるが、F-1類の形態は遠江での独自の型式と思われる。

小型鉢D類については存在が確認できない。小型坪はB類に限られ口縁部が長く直立する121と口縁がやや開く122に変化したものの2種類があるが、概ね1つの型式にまとめられB-2類としておいた。調整はナデか粗雑なミガキである。

伊勢湾岸系の台付甕C類は前段階と同じく長胴化したものであるが、調整がヘラナデと変化し一層粗雑化が進むC-5類が一定量存在する。しかし、本段階最大の特徴としては、口縁部は外反し長胴気味で小さな底部が付く、Ⅳ期の球形胴壺の祖形となるべく登場した球形胴壺A類の出現であろう。この甕については畿内の布留壺の長胴化と係わる問題もあり畿内からの多少の影響はあったと推測しているが、畿内系の布留壺の特徴は何一つ持っていない。おそらく、台付甕C-5類をベースにして低脚化した台を取り外し平底化したもので、類似のものが駿河湾西岸域でも見られるため、駿河湾西岸域～遠江で成立している可能性が高い。

以上Ⅲ段階は壺形土器について伊勢湾岸系の壺は消滅し、畿内系の壺も僅かに遠江での変容が見られるQ類が存続する程度で、Ⅱ期までつづいた壺型式のバラエティは完全になくなる段階といえる。高坪も伊勢湾岸系のA類は消滅し、畿内からの影響の認められる伊勢湾岸～遠江で成立するD・G類が主流となり、器台も在地的な小型器台F類が少量残存する程度となる。小型坪も畿内に起源のあると思われる小型坪B類が遠江で独自の変化を遂げている。甕は引き続き伊勢湾岸系の台付甕C-5類が見られるが、駿河湾西岸～遠江系の長胴気味の平底の球形胴壺A類の祖形となるA-1類が主体となる。畿内・伊勢湾岸系の薄甕は一切見られない。本段階をまとめると、伊勢湾岸系の壺の消滅と壺のバラエティの消失、畿内の影響下の伊勢湾岸～遠江系高坪の確立とバラエティの消失、畿内系小型器台がほとんど消滅、小型坪B類と高坪D・G類のセット関係の確立、台付甕C類は残存するが駿河湾西岸～遠江系の平底球形胴壺A類の成立に特徴づけられる。この流れは、明らかにⅡ期からの土器型式

群の連続性が減少し、新たな土器型式群の出現・確立が看守される段階で、むしろⅣ期との関係が重視されるべきものであり、Ⅱ期からⅣ期への過渡的な段階ともいえる。また、畿内からの影響とは無関係ではないが、高坏と甕の型式変化を見るかぎりには、伊勢湾岸～遠江～駿河湾のより広範囲な地域を巻き込んだ大きな様式の変化が見られ、それぞれの地域での独自色も強く現れてくる段階でもある。

Ⅳ-1期(第236図～第238図) 本段階の資料は今回調査区では確認されず、僅かに市バイパス調査区SD18・SX2(130・131)、同SX6で知られていたが、いずれも破片資料であり明確な資料提示ができない。他の遺跡で良好な一括性の高い資料としては、浅羽町新堀遺跡1区SE1(125・133)と磐田市見性寺遺跡A7区C層(第236図1～12、126～129・132・134)出土の資料が該当する。今のところこれ以外の良好な一括資料はないので、型式群の全容解明には不十分な段階である。なお、見性寺遺跡の資料は、今回磐田市教育委員会山崎克巳氏のご配慮で観察することができ、再実測・補筆修正図を第236図に示した。

前段階から系譜の連れる壺形土器はまったくない。ただし外反口縁の球形胴の前後の段階から壺L類の存在は予測される。新型式の壺としては受口状の口縁部に稜のある壺S-1類と、直立気味の直口壺であるT-1類が登場している。何れも口縁部横ナデ、外面は粗雑なミガキあるいはナデ調整が施されており、高坏や甕との調整手法の統一化が見られる。

高坏は前段階で確立したD・G類が見られる。D-3類は脚部の屈折がより強くなり中央部に膨らみが出るように所謂関東の和泉式高坏に類似する形態に変化し、脚部の調整もヘラナデに近い粗雑なミガキないしナデ調整への変化が見られる。G-2類は脚部が高く坏部がやや浅くなる程度の変化であるが、多くはD類と同様に脚部の調整がヘラナデに近い粗雑なミガキ調整に変化している。

器台は全く見られない。

小型鉢は口縁部を水平に近く外反させるF-1類が新型式として登場している。所謂和泉式にも伴う小型鉢であるが、畿内でも短い口縁をもつ同様の小型鉢が見られるので、畿内の動きと連動し遠江～関東地域で成立するものと考えられる。小型増は前段階同様B類に限られ口縁部が長く直立するB-3類が存在している。形態的にはほとんど変化がないが、ミガキ調整はほとんど見られず口縁部ヨコナデ、体部ナデ調整に変化している。

伊勢湾岸系の台付甕C類は断片資料しか確認されていないが、前段階と同様に長胴のもので調整がヘラナデの粗雑化したものがC-6類として少量存在する。前段階で登場した球形甕A類は、完全に球形化し口縁部の外反度も強まる変化があり前段階同様の不安定な小さい平底の133と完全に丸底になった134が存在している。底以外形態は変わらないので、どちらも球形甕A-2類とした。甕については他に大型の台付甕E類が出現している。肩が張り胴部下半が窄まる形態で、粗雑なナデ調整が全面に見られる。この台付甕については普及で知りうる限り駿河湾地域(平底のものも存在)でしか類例はないので、現段階では遠江～駿河湾地域で独自に出現したとしかいいようがない。

以上Ⅳ-1段階は壺形土器についてはⅡ-2～Ⅲ期まで存続していた壺Q類も見られなくなり、Ⅱ期からの系譜の壺はL類以外全て消滅する。高坏は引き続きD・G類が主体となるが、D類は所謂和泉式の高坏に類似し、小型鉢F類の出現と共に駿河湾～関東地域との関係もでてくる。器台は消滅するが、小型増は引き続きB類が遠江で独自の変化を遂げている。甕類も引き続き伊勢湾岸系の台付甕C-6類がみられるが、確認数は極端に減少している。球形甕A類・台付甕E類ともに伊勢湾岸ではあまり見られない型式であり、駿河湾地域に類似するものが存在するため、遠江～駿河湾地域で派生し存続するものと考えたい。畿内・伊勢湾岸系の薄甕は一切見られない。本段階をまとめると、壺S・T類の登場に畿内との関係、高坏D-3類への変化と小型鉢F-1類の登場から駿河湾～関東地域との関係を読み取ることができるが、他の型式は前段階からの変化でしかないことが確認される。このことは、Ⅲ期と比べると本段階ではより伊勢湾岸地域からの影響から脱し、遠江～駿河湾にかけての

共通型式が看守される。また、本段階でも新たな土器型式の出現が確認されるが、明らかにⅢ期からの型式群の連続性も認められるため、Ⅱ期とⅢ・Ⅳ期の間に大きな画期が設定される。

Ⅳ-2期(第236図~第238図) 本段階の資料は今回調査区ではSH11・SH12(140~142)、SI2(146)、SB25、SK48(135)、SD93(148)、I13区土器集中(136~138・149)で断片的に確認された。また、僅かな資料であるが市バイパス調査区でもSK10・11・15、SP7・8(149)、県バイパス調査区のSD306(134・139・145・147)、浅羽町古新田遺跡4-1J竪穴住居(第236図13、浅羽町教育委員会 1993、出典以下同じ)、同3-5JC竪穴住居(第236図14)で出土しているが、いずれも完全なセット関係を示すものはないため、明確な型式群の組成を明らかにしてはいない。ただし、近年この段階の良好な一括資料が、掛川市原遺跡で出土している(戸塚和美氏ご教示)。この資料が公開されると本段階での明確なセット関係が明らかとなるであろう。

前段階からの連続性の通れる壺形土器はS・T類で、Ⅲ期で確認されたL類も確認された。壺T類は前段階からほとんど変化のない直口壺のT-2類と、やや長胴で短い外反した口縁をもつ形態に変化したT-3類が見られる。壺S類は口縁部の立ち上がりが短くなったS-2類へと変化している。外反口縁の球形胴の壺L類の存在は認められるが、形態の変化はほとんどないようである。新型式の壺としては球形胴で折返口縁の壺である壺U-1類、球形胴で無頸の広口壺V-1類が登場している。これらの新型式の壺のうちV類は伊勢湾岸で類似したものが存在するので伊勢湾岸系、U類は数少ないが駿河湾地域で類似したものが認められるので駿河湾との関係で考えたい。

高坏は引き続きD・G類が見られる。D類は脚部の屈折が再び甘くなり中央部の膨らみも減少する形態変化をしたD-4類、D類と同じく脚部の屈折が甘くなり坏部も浅くなる傾向が認められたG-3類への変化が見られた。この他にD類から生まれると思われる脚部がD-4類と同じで坏部の接合場所の後縁に粘土帯を貼付して突出させる新型式の高坏H-1類、G-3類がさらに短脚化・屈折が少ない脚をもつI-1類が新たに出現する。前者は安定的存在するが、後者は少数である。

小型鉢は前段階に登場したF類が引き続き存在するが、口縁部の立ち上がりが急になり粗雑な作りになったF-2類や、さらに丸底化し口縁の外反も短くなるF-3類に変化している。小型埴は前段階同様B類に限られ口縁部が短く直立した以外あまり変化の認められないB-4類が存在している。

伊勢湾岸系の台付壺C類は確認できないが、その存在は予測される。球形甕A類は、再び長胴化する変化が見られ、前段階同様149の不安定な小さい平底、150の丸底のものが存在している。本段階でも丸底と平底の底以外に形態は変わらないので、どちらも球形胴甕A-2類とした。大型の台付壺E類も形態的にあまり変化なく、調整がさらに粗雑化に進んだE-2類が確認される。

以上Ⅳ-2段階は壺形土器については前段階からの壺SとT類が引き続き見られ、新型式として壺U・V類が登場する。高坏・小型鉢・小型埴も引き続き高坏D・G類、小型鉢F類、小型埴B類が主要型式となるが、高坏D類の系譜になる高坏H類、高坏G類の系譜になる高坏I類の登場が目される。球形甕A類は再び長胴化への動きが看守された。畿内・伊勢湾岸系の薄甕は一切見られない。本段階をまとめると、引き続き畿内系の壺S・T類と小型埴B類、遠江~駿河湾系の高坏D・G類、小型鉢F類と球形甕A類が定着しており、新たに伊勢湾岸から壺V類が、駿河湾からの影響で壺U類と、高坏H類・I類が登場するが新型式の登場は極めて少ない。よって、前段階からの型式群の連続性の強さと、地域色の点からは前段階同様に駿河湾岸を含めた範囲での類似性が確認された。

まとめ 一山角田様式と仮称見性寺様式の提唱一

近畿・尾張・駿河との比較 坂尻遺跡における古墳時代前半期の土器についてⅠ~Ⅳ期区分に添って説明を加えてきたが、大きな流れから見ると畿内~伊勢湾岸の強い影響を受けているⅠ~Ⅱ期と、その影響を遠江で在地化し独自の発展を遂げるⅢ~Ⅳ期の間に大画期が認められた。以前の編年案よりも今回の整理で中・東遠地域における前半期土器の諸型式内容の変化についてかなり明らかにするこ

とができたと思われる。よって、畿内と隣接地域（尾張・駿河湾地域）との並行関係のさらなる比較検討と、具体的な型式差、各型式の各段階での土器組成とその消長関係を検討することによってのみ可能となる当地域での様式設定の目処が立ったので、今回は様式内容の検討をも行ってみた。所謂古式土師器に該当する畿内と隣接地域編年としては現在までに多くの研究者により編年案が示されているが、比較検討するにあたって多くの土器群の型式内容と中期前半段階までの連続編年を明らかにしている寺沢薫氏の庄内・布留様式編年（寺沢薫 1986）、尾張の赤塚次郎氏の廻間・松河戸様式編年（赤塚次郎 1990・1995）、駿河湾地域では前期の渡井誉英氏の大廓様式編年（渡井誉英1994）と、中期はいくつかの一括性のある資料を組上にあげて比較検討を試みたい。

まず、Ⅰ-Ⅰ期で他地域との指標となりうるものは畿内系では壺Ⅰ・Ⅱ類、小型器台Ⅰ類、小型鉢Ⅰ・Ⅱ類、Ⅴ様式系Ⅰ・Ⅱ類である。壺Ⅰ類については寺沢分類短頸直口Ⅰ類に類似し球形胴で短い口縁部を持つ特徴から庄内Ⅱ式に近い時期、壺Ⅱ類も庄内Ⅱ式の小型二重口縁Ⅰ類に近い形態のもの、小型鉢Ⅰ類は型式変化が少なく庄内Ⅰ～布留Ⅰ式まで存続する小型丸底鉢Ⅰ類に近い形態、Ⅱ・Ⅲ類も形態変化が少なく庄内Ⅰ～布留Ⅰ式まで存続する鉢Ⅱ・ⅢⅠが小型化したものと思われる。小型器台Ⅰ・Ⅱ類は庄内Ⅰ～布留Ⅲ式まで存続する器台Ⅱ・Ⅲ類からの影響で成立するものと思われるが、脚部の円孔はなく在地での変容は大きい受部が大きくなっているもので庄内Ⅱ～Ⅲ式並行のものと考えたい。ただし、この器台については例えば蒲郡市中根山遺跡SB53のように三河ではⅢ類ⅠⅡに伴う時期が多い（吉良町教育委員会 1989）ため、中・東連での出現がかなり古くなり尾張では見られない型式なので、現段階では三河～遠江で出現した可能性を指摘しておく。Ⅴ様式系Ⅰ・Ⅱ類は庄内Ⅰ～布留Ⅰ式まで存続するⅤⅡに該当するもので、叩目のすり消しと底部の突出が小さくなっているため、庄内Ⅱ式に該当する畿内からの搬入品の可能性が高い。このようにⅠ-Ⅰ段階の畿内系の型式群は、当地域での変容が認められ畿内での型式変化が少いものを多く含み並行関係の追及を困難にしているが、概ね庄内Ⅱ式に近い時期を想定する。

伊勢湾岸系では壺Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類、高坏Ⅰ・Ⅱ類、ⅢⅠ類、ⅢⅡ類の存在が目立つ。壺Ⅲ類は東三河の欠山式からの系譜から出現し、壺Ⅳ類は脚付であるが所謂ひさご形壺で、廻間Ⅰ式の壺Ⅲ類の系譜に関連し口縁部が短く開かない形態から廻間Ⅱ-Ⅰ・Ⅱ式のものに類似する。壺Ⅴ類は東三河の欠山式のなかに類似したものが見られるため、伊勢湾岸でも三河の系譜で成立したものと考えられる。高坏Ⅰ類はⅠ-Ⅰ類からⅠ-Ⅱ類への変化が看守され、Ⅰ-Ⅰ類は廻間Ⅰ-Ⅳ式の高坏ⅠⅡ類、Ⅰ-Ⅱ類は廻間Ⅱ-Ⅰ・Ⅱ式の高坏ⅠⅡ類に形態が近いものである。高坏Ⅱ-Ⅰ類は直接比較できる資料はないが、脚の開きが少ないので廻間Ⅱ-Ⅰ・Ⅱ式あたりに該当すると思われる。ⅢⅠⅡ類はすでに述べたように、尾張ⅢⅠⅡ類の中でも古手で廻間Ⅱ-Ⅰ・Ⅱに該当するものである。Ⅰ-Ⅰ段階は伊勢湾岸の編年では一部廻間Ⅰ-Ⅳ式に遡る要素も含みつつ廻間Ⅱ-Ⅰ・Ⅱ式に並行すると思われる。よって、高坏Ⅰ-Ⅰ類を出土した小山角田遺跡SK17の壺は極めて菊川式の要素を残すものを主体とするのに対し、高坏Ⅰ-Ⅱ類を出土した高田遺跡SB02は胴部の張りが弱くなった無文文化が進んだ在来の菊川式系壺を含むため、小山角田遺跡資料と同様な壺を含む坂尻遺跡SB33を古く廻間Ⅰ-Ⅳ～Ⅱ-Ⅰ式並行期に遡らせて、高田遺跡SB02や三沢西原遺跡SB11は新しく廻間Ⅰ-Ⅲ式並行期に並行関係を求め細分される可能性が高い。

駿河湾岸では大廓Ⅰ-Ⅰ式で弥生時代に系譜を持つ壺形土器を多数残しつつ、高坏Ⅰ-Ⅰ・Ⅰ-Ⅱ・Ⅱ-Ⅰ類、小型鉢Ⅰ-Ⅰ類に類似したものを含むので、Ⅰ-Ⅰ期は概ね大廓Ⅰ-Ⅰ式に並行するものと思われる。弥生時代の壺のうち飯田式の形態を残す壺が主体となり、菊川式では小紋型式で二重口縁になる壺も駿河湾岸では多数見られるのに対して、中・東連ではほとんど見られない点、飯田式からの変化が強い球形胴の台付壺が多数存在する点などから、中・東連とは別様式になる可能性が高い。

Ⅰ-Ⅱ期の畿内系で並行関係を求めうるものは壺Ⅱ-Ⅱ類が未だ短い口縁部をもつもので古い要素を

残すこと、壺E-2類の口縁部の外反度が強まるものが庄内3式の壺N類に見られるようになること、小型器台B-1類に類似するものが庄内3式の器台C-1類に見られること、布留0式まで降らない庄内壺を含むことから、I-2段階は概ね庄内3式に並行関係を求めたい。

I-2期の伊勢湾岸系で並行関係を求めるものは増加し、壺G-2類が下彫り形態に変化しているのと同期II-3・4式に、壺I-1類・J-1類、高坏A-3類なども同期II-3・4式おさまるものである。S字壺A-2類もすでに述べたように尾張B類S字壺の新段階のものが主体となるため、II-2段階は概ね同期II-3・4式に並行関係が求められる。

渡井氏によると駿河湾岸ではこの段階に並行させうる資料は少なく、渡井氏の編年では静岡県東部地域での大廓I-2式の具体的内容の提示はなされていない。

II-1期では畿内系の壺E-3類と、壺O・P類、小型器台D類、小型鉢D類、小型埴A類、布留系壺の出現が指標となろうか。壺E-3類は布留0~1式の二重口縁壺N類が直立口縁に変化したものに、壺P-1類は布留0式以降見られる短口縁化した直口壺C-1類に祖形が求められる。壺O類はやはり二重口縁壺の系譜で考えたいが、かなり外反する口縁に変容しているため、畿内とは直接の比較ができない。おそらく伊勢湾岸系の同期III-1式で、突如として現れる畿内系の壺F類に關係したものと思われる。小型土器群のうち小型器台D-1類は庄内3~布留3式の小型器台C-3・4、小型鉢D-1類は布留0~3式の小型丸底鉢IIIb、小型埴A-1類は布留1・2式の小型丸底鉢Bに類似しているので、これらの畿内系小型土器群は總体的には布留0~1式に並行すると思われる。よってII-1段階は畿内では布留0~1式に並行関係を求めたい。

伊勢湾岸系では壺I-2類、J-2・3類への変化、口縁端部に面取りのない壺L・M類の出現は同期III-1~3式へ対応する変化である。ただし、壺G-3類は同期III-1式では見られない型式のため、遠江のみに残存する型式と考えられる。また、畿内系の壺P-1類に類似するものが、伊勢湾岸でも壺D-2類として同期II-4~III-1式から登場している。高坏A-4・A-5・B-3類も同期III-1~3式の高坏A-4・B-2類に対応して変化しているので、高坏A類に関しては時間差が読み取れた。小型器台C-1類は同期III-2・3式の器台B-4類に対応し、畿内系とした器台D類、小型鉢D類、小型埴A類も同期III-1~3式の器台B-3類鉢B-4小型丸底鉢として類似するものが出現している。脚付鉢A類は庄内0式~布留0式まで伴う畿内系の有稜高坏（高坏H類）を祖形として成立したと考えたが、伊勢湾岸での変容が大きく畿内と直接比較できる型式とはならない。台付壺C-3類、受口壺A類については同期III-1~3式ではほとんど見られず比較検討ができないが、受口壺A類はS字壺A-4類と胸部形態が類似するため、尾張C類S字壺の古~中段階に該当するものと考えられ、同期III-2・3式に並行関係を求められる。よってS字壺A-3類はC類S字壺の最古段階の様相を示すもので同期III-1式に並行すると考えたい。II-1期は伊勢湾岸系の並行関係を求めると同期III-1~3式となるが、高坏やS字壺の型式変化を追うと今回調査区のSD270や若作遺跡B-1・9号住居の資料が比較的古い様相を示し同期III-1式並行、今回示した青木遺跡や堀越遺跡の土坑資料、野藤遺跡3号墓の資料は同期III-2・3式に並行関係を求める可能性が高いが、段階設定可能な良好な一括資料に恵まれていないので今回は細分の可能性の指摘に留めておきたい。

駿河湾岸では大廓II-1式の大廓B住居に、外来系とした小型鉢A-3類、高坏B-2類のII-1期のなかで古相段階に類似するものを含むため、大廓II-1式とII-1期古相に並行関係が求められる。しかし、S字壺は駿河独自のもの、大廓I式と同様に壺と壺は弥生時代の飯田式からの変化を示すものが主要型式となっている。大廓II-2式においては月の輪平遺跡62・105号住居と三新田遺跡B09・16号住居で壺O類の出現に係わる外来系壺、高坏A-5類、小型器台A-3・C-1類、小型埴A類、台付壺b-3類に類似した型式を含むため、II-1期でも新しい様相に並行関係を求めたい。大廓II-2式においてもS字壺は駿河で独自に変化し、壺も弥生時代の系譜を引くものが多数見られるので中・

東遼とは別様式になる。

Ⅱ-2期は畿内系としたⅡ-1期からの壺E-4類、O-2・3、P-2類、小型器台D-2類、小型埴A-2類への変化は伊勢湾岸をも含んだ当地域での独自の変化によるもので直接畿内との比較はできないが、壺Q類、高坏D・E・F類、小型埴B類の出現が指標となる。直口壺となるQ-1類は布留2〜3式に見られる長い直立口縁の直口壺A1・B1の変化に対応しているものと考えられる。高坏D・E・F類は布留式以降見られる所謂屈折脚の高坏で、E-1類は布留3式のラッパ状に開き円孔を持つ脚の高坏B6類に系譜を求めうるが、高坏D-1類は脚部の屈折が緩やかであり、高坏F-1も脚部中位が柱状になるもので畿内とは直接の比較はできない。おそらく伊勢湾岸系の廻間Ⅲ-4式〜松河戸Ⅰ式前半で突如として現れる高坏A2類、B類との関係で成立するものと考えられる。小型土器群のうち小型埴B-1類は布留3式に登場する小型丸底鉢D〜F・Fと関係がありそうだ。ただし、廻間Ⅲ-4式の小型壺Aも類似型式で、尾張地域との関連も認められる。布留壺A-2類はFⅡ類、A-3類はFⅠ類にそれぞれ対応するものである。A-2類は内面ヘラ削りでかなり薄手に作られているため布留2式に並行するものと思われる。よって、Ⅱ-2段階は畿内系のうち伊勢湾岸で変容した型式を多数含んだ変化であるため、容易に畿内との並行関係を求めることを困難にしているが、凡そ布留2式に並行関係を求められる要素が見られる。

伊勢湾岸系では僅かに壺J-4類、台付壺C-4類、S字壺A-5・6類への変化が指標となろうか。壺J-4類は柳ヶ坪形壺の変化で、廻間Ⅲ-4式〜松河戸Ⅰ式前半へ対応する変化である。台付壺C-4類は長胴化したもので、くの字状口縁の台付壺の長胴化は廻間Ⅲ-3式で既に見られ松河戸様式に引き継がれる。遼江のものはハケメを顕著に残し、伊勢湾岸では廻間Ⅲ-3式段階からヘラナデ調整へと変化しているため直接的には並行関係を求められない。球形胴化したS字壺A-5類は廻間Ⅲ-4式に並行するもの、S字壺A-6類は伊勢湾岸ではあまり見られないもので、口縁部がC類S字壺のまま、胴部がなで肩で長胴に変化するD類S字壺の特徴も示すため、S字壺A-6類は松河戸Ⅰ式前半に並行する遼江型のC類S字壺最末期になる型式の可能性を指摘したい。よって、Ⅱ-2段階は伊勢湾岸系も畿内系同様に並行関係を確定する要素は乏しいが、概ね廻間Ⅲ-4式〜松河戸Ⅰ式前半に並行関係を求めたい。また、小型丸底埴B類や高坏、S字壺の型式変化を追うと、A-5類のS字壺を主体となし高坏A-6類を残す野原遺跡17号土坑、土橋遺跡SI4・SK76の資料が比較的古い様相を示し廻間Ⅲ-4式並行、遼江型のS字壺A-6類を主体とする市バイパス調査区SD1・2、粗雑化した小型丸底埴B類を持つ高尾山遺跡1号住居の資料は松河戸Ⅰ式前半に並行関係を求めうる可能性がある。ただし、高坏D〜F類の出現時期が松河戸様式とは合わない。この矛盾を解消するための当地域での良好な一括資料には恵まれていないため、さらなる細分は可能性の指摘に留めておく。

駿河湾岸ではⅡ-2段階に並行関係を求めうる資料は少ないが、大庵Ⅲ式の基準資料である三新田遺跡A24号住居出土の屈折高坏が、高坏F-1類に対応するものと考えられる。提示資料が少ないため当地域と別様式となるかどうかは分からない。今後の検討課題である。

Ⅲ期の資料は、中・東遼地域の他遺跡であまり知られていない資料である。型式は壺Q-2・P-3類、高坏D-2類、小型埴B-2類が存在するので、明らかにⅡ-2期からの変化が読み取れた。しかし、畿内からの直接の比較ができる型式は全く含まれていないので、Ⅲ期の畿内との並行関係は良く分からない。しかし、Ⅳ-1期に登場する畿内系壺S-1類と類似する二重口縁壺F2類が布留4式古段階から見られるため、Ⅲ期を布留3式に並行関係を求めることは可能であろう。

伊勢湾岸についても直接並行関係を求めうる壺やS字壺C類やD類などの薄壺を全く含まないことから、Ⅲ期と松河戸様式との並行関係を求めるのを困難にしている。あえて求めるならば高坏D-2・G-1類が、松河戸Ⅰ式後半の高坏B2類に類似することが指摘される。しかし、高坏D-2類は松河戸様式の高坏B類と比べると屈折度が弱いので、一概に並行関係を求めるには危険である。台付壺

C-5類は長胴化し胴部ナデ調整と粗雑化した点は、松河戸様式のくの字口縁の壺C類と共通し口縁部が短く外反し台部も低くなる型式変化から、松河戸Ⅰ式後半に対応しそうな変化を示す。球形胴壺A類については伊勢湾岸では全く見られない。このように再三述べるが、Ⅲ期の内容は畿内からの若干の影響を受けつつも伊勢湾岸の松河戸様式とは一線を画している内容を示し、別様式になる可能性を強く示唆している。不明な点が多いが、並行関係は松河戸Ⅰ式後半と想定しておく。

駿河湾岸でもⅢ期と比較検討しうる資料は少ないが、藤枝市釣瓶落1号墳の資料（藤枝市教育委員会1983）と、山口和夫氏の赤焼土器編年で示されたⅣ-3期に該当する上蔵田川の丁遺跡西地区包含層資料（山口和夫 1987）のなかに関連資料がある。前者の資料では、受部に有孔の見られる小型器台であるが、形態は小型器台F類に類似するものを含む。また、時期は合わないが松河戸Ⅰ式前半の器台、布留1~3式の器台BⅠ・2類にもP-1類と類似するものを含む。同様に、松河戸Ⅰ式の小型増B-2類と布留1~3に類似する小型増、屈折脚を有する高坏台なども組成されているため、概ね遠江Ⅲ期と似た内容となる。しかし、類似型式の器台の存続時期が畿内と伊勢湾岸で合わないし、提示資料は少なく確実な並行関係を検討しうる資料ではない。後者の資料は、遠江高坏D-2類と松河戸Ⅰ式後半の高坏B3類に類似するもの、前者資料と同型式の屈折脚の器台を含むが、Ⅱ-2期新相に該当しそうな高坏、確実に5世紀後半まで降る坏・鉢類も含まれているので確定できる型式内容とならない。よって、現段階ではⅢ期の様式内容まで踏み込める駿河湾との比較はできず、高坏・器台などに遠江と類似した型式が存在すると指摘しうる程度である。今後の検討課題であろう。

Ⅳ-1期については先に述べた壺S-1類が布留4式古段階、松河戸Ⅱ式で有段口縁壺として類似するものがある以外は、編年の指標となる高坏もD-3類のようにむしろ駿河湾以東に関係しそうなものに変化している。小型鉢F-1類の登場は畿内では布留4式古段階で丸底鉢H類が登場しこれと連動すると思われるが、松河戸様式では見られない型式である。台付壺C類も存在はするが数は減少するので、この点をもってしても伊勢湾岸色は後退する。大型の台付壺E類や球形胴壺も伊勢湾岸では全く見られない。このようにⅣ-1期の並行関係を求める根拠は薄いのが、現段階において畿内では布留4式古段階、伊勢湾岸では松河戸Ⅱ式に並行関係を求めておきたい。

駿河湾岸では静岡市瀬名遺跡2・3区9層出土の土器群（静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994）と並行関係が考えられる。壺類はⅣ-2期に見られるくの字状折返口縁をもつ球形胴壺と、壺Ⅰ類に対応する外反単純口縁の球形胴壺、直立口縁の壺T-1類に相当する球形胴壺が安定的に見られ、壺S類が変容した二重口縁の壺も小型のものとして存在している。高坏はD-3類・G-2類の何れにも対応するものが主体的に見られる。小型増B-3類に類似するものは存在するが、小型鉢F-1類に相当するものは確認されない。壺類は台付壺C-6類に対応するくの字状口縁の外面ナデ調整の長胴台付壺、丸底ないし小さな不安定な底部を持つ球形胴壺A-2類に相当するもののほか、Ⅲ期のA-1類に類似する長胴の壺も含んで安定的に存在するようだ。このように、Ⅳ-1期においては駿河湾岸とは共通する型式のものも多数含むが、強いくの字を呈する折返口縁壺、壺S類と同一型式のものがなく変容した二重口縁壺が存在すること、小型鉢F類が存在しないこと、台付壺が多く存在することなどから、類似性は強いが別様式になる可能性もある。

Ⅳ-2期はⅣ-1期からの変化で設定した段階であるため、畿内と伊勢湾岸との並行関係を求めることは困難である。おそらく、Ⅳ-2期に後続する後半期土器Ⅰ-1期が須恵器編年TK208段階のものを含むため、赤塚氏のいうとおり松河戸様式に後続する宇田様式の始まりがTK208段階ならば（赤塚次郎 1988）、Ⅳ-2期はそれ以前の松河戸Ⅱ式に並行しているということになるが、並行関係を論ずる根拠としては弱い。ただし高坏H-1類については、畿内での布留4式新段階の高坏B6類の大型のもの、松河戸Ⅱ式のB4類高坏に連動した動きかも知れない。また、高坏H類も脚部中央が膨らまなく短脚化したもので布留4式新段階の高坏B6類の再度の影響、松河戸Ⅱ式高坏B5類の短脚化の

変化に連動していること、鉢F-3類も布留4式新段階から見られる鉢II類に類似したものがある。このように根拠は薄いが、現段階ではIV-2期を畿内では布留4式新段階、伊勢湾岸では松河戸Ⅱ式に並行関係を求めておきたい。

駿河湾岸では清水市長崎遺跡で足立順司氏により長崎1-2区新として認識された、1-2区SX117・119・121・122の資料が参考となる(足立順司 1991)。壺はQ類と、U類に対応する折返口縁蓋が存在する。高坏はD-4類・G-3類と同じ型式変化が見られ、小型鉢F-2・3類と小型埴B-4類に類似するものを含み、くの字状口縁の台付甕C類の系譜に連なる長胴の台付甕も依然として存在している。やや長胴化が見られる小さな平底をもつ球形胴の甕A-3類に対応する甕や、台はつかないが台付甕E-2類に対応する広口の平底大型甕も存在する。このように、IV-2期においても駿河湾岸とは共通する型式のものを多数含むが、粘土帯の貼付された口縁の壺、高坏D-4類と類似する高坏は脚中位の開きがさらに大きくなっていること、丸底の甕があまり確認されないことなど異なる点も多々見られるので、別様式になる可能性もある。

様式の設定 以上、前半期の土器について隣接地域の様式内容の比較まで触れた並行関係の根拠を長々と述べてきた。画期としては再び述べるがⅡ期とⅢ期の間の様式変化が大きく、中・東遠においてはこの間で別様式に移行していることは明らかであろう。前半のⅠ～Ⅱ期についてはまず菊川式の系譜を強く引く在来の壺が存在し徐々に減少していき、高坏や甕については菊川式の系譜を引くものはほとんどなくなり畿内からの影響、伊勢湾岸影響の壺や高坏、小型器台・鉢・埴などが伴っていく図式にまとめられる。今回は初めて弥生時代の土器様式である菊川式と古墳時代の土師器であるⅠ-1期の接点を詳細に再検討した岩本貴氏の業績(岩本貴 1995)を尊重し、中・東遠地域の前半期土師Ⅰ～Ⅱ期を小山角田様式と称し、Ⅰ-1期を小山角田Ⅰ-1式、Ⅰ-2期を小山角田Ⅰ-2式、Ⅱ-1期を小山角田Ⅱ式、Ⅱ-2期を小山角田Ⅲ式とし、Ⅰ-1式、ⅡとⅢ式については古・新相が見られたことから、それぞれⅠ-1～3式、Ⅱ-1・2式、Ⅲ-1・2式と将来細分される可能性を示しておく。

中・東遠地域での前半期土師器の始まりの問題は、現段階においては菊川式の後半新段階(基準資料土橋遺跡SK77)では、西遠の欠山式との伴行関係から廻間Ⅰ-1～3式に並行関係をもつと考えられるが、Ⅰ期に見られた畿内・伊勢湾岸系の壺・甕・高坏、伊勢湾岸A類S字壺・畿内庄内式のような薄甕など全く見られず、伝統的な弥生時代の型式組み合わせからなるものがある。よって、菊川式後半新段階は土師器とせず、Ⅰ-1段階=廻間Ⅰ-4式の並行期から土師器とする。

また、小山角田Ⅲ式については駿河湾岸と伊勢湾岸の様式内容の厳密な比較検討はできなかったが、少なくとも伊勢湾岸との類似性を指摘したうえで、異なる多くの型式の存在も認められたので単純に廻間様式に含めることはできないと判断し、中・東遠の独自様式として小山角田様式に含めて考えてみた。しかし、小山角田Ⅲ式の内容は弥生時代以来の在来の独自色が存在しないことは明らかで、今回検討できなかった三河や西遠と同一様式になる可能性も存在し、別様式になると思うがⅢ式並行の駿河湾岸との良好な一括資料で比較検討がなされた時、様式名称の再検討をしたい段階である。

後半のⅢ～Ⅳ期については一連の型式変化をしており、一番安定している一括資料を提示してくれた見性寺遺跡の資料から見性寺様式と仮称し、Ⅲ期を見性寺Ⅰ式、Ⅳ-1期を見性寺Ⅱ-1式、Ⅳ-2期を見性寺Ⅱ-2式と整理しておく。仮称見性寺様式は伊勢湾岸の松河戸様式とは明らかに一線を画しているが、駿河西岸域の土器とは類似性が強いことが判明した。今回紙面の関係で検討できなかったが、将来見性寺様式の内容を確定するためには、駿河湾東岸域の土器の比較検討と、川崎みどり氏により指摘された三河の神明式以前元屋敷式後の土器群(川崎みどり 1988)に見性寺様式に類似する型式を含むため、三河と同一様式になるかどうか重要な検討課題となるだろう。また、廻間様式と松河戸様式の境、小山角田様式と仮称見性寺様式との境の並行関係に若干の齟齬があり、この問題については伊勢湾岸と遠江地域での中期的な土器様式の確立時期に差があるのか、Ⅱ-2～Ⅲ期の並行

関係の評価が間違っているのか、これも重要な検討課題となつてよう。

古墳時代後半期土器編年（第239図～第244図）

今回の調査で得られた遺物の大半が、後半期土師器に属する土器群である。かなり良好な一括資料にも恵まれ、従来板瓦遺跡で蓄積された資料を一変させる内容も含んでいるため、過去に示された五島康司氏の市バイパス調査報告書の編年（五島康司 1985）と、篠原修二氏の県バイパスの編年（篠原修二 1992）を参考にしつつ整理を図り、今回は独自の編年を考えてみた。また、隣接地域（東三河と駿河湾西岸域）や近畿圏との比較から様式内容を検討し、様式名称の設定をも試みてみたい。

編年

従来の後半期土師器の取り扱いはい冒頭でも述べたように五島編年では、Ⅲ期の始まりを宮之腰遺跡の遠江須恵器編年Ⅰ期後半段階（田辺編年TK23・47並行）とし、前回報告の板瓦Ⅱ期（遠江土師器Ⅳ期＝今回見性寺Ⅱ式）にTK208並行期（Ⅳ期新）を含めたが、今回はTK208並行期のものを後半期土師器に組み入れた。篠原氏の編年ではⅢ期の始まりを須恵器Ⅱ期段階（MT15）に求めており、五島編年とは異なる見解のもと編年を試みている。今回の編年では前半期土師器と同様に型式の消長関係や、組成の変化で画期を求めたところ、概ねTK208以降の5世紀後半代の土器をⅠ期、6世紀～7世紀初頭の土器をⅡ期、7世紀代の土器をⅢ期に整理することが可能となった。以下、各段階ごとに説明を加えるが、第240図～第242図に示した編年図の分類記号は複雑ではあるが土器型式の継続性を重視して、前半期土器編年の分類記号を継承した。また、今回は土師器編年を主目的にしたので、土師器については知りうる限り組成を明らかにする努力はしたが、須恵器については土師器との並行関係を知る目的で、坏・高坏・甕類の型式変化を容易に追うことができる器種に限って編年図に加えた。

Ⅰ－Ⅰ期（第239図～第241図） 本段階に関する資料は板瓦遺跡においては断片資料に留まっているため、近年良好な資料を提供してくれた浅羽町古新田遺跡（第239図1～17、第239・240図15～22）の資料を中心に検討してみたい。なお、古新田遺跡の資料については浅羽町教育委員会山本義孝氏のご配慮で資料の観察をすることができたので、再実測・補筆修正図を第239図に示した。他に板瓦遺跡のメロンハウス建設調査地区のSD5最下層（4）と4号壜穴P285（2、袋井市教育委員会 1985・1991、出典以下同じ）、磐田市勾坂下原7号墳（3、磐田市教育委員会 1995、出典以下同じ）で本段階の資料が断片的に出土している。

須恵器ではⅠ期古段階新相（TK208）の組成を示す坏蓋・身のA－1類、甕の胴部に文様を入れるA－1類と文様を入れないB－1類、大型甕のA－1類、高坏も一段透の有蓋高坏のA－1類と大型高坏のA－1類がある。

土師器の壺類は見性寺Ⅱ－2式から系譜を引き口縁部がさらに短く変化した蓋T－4類、口縁部が短く変化した折返口縁の壺U－2類、口縁部が外反して開くように変化した二重口縁の壺S－3類、口縁部が短く外反するように変化した球形胴の壺V－2類が存続し、Ⅳ－2期との強い連続性が看守されるが、直口の口縁を持つ壺W－1類も新型式として登場している。

高坏は見性寺Ⅱ－2式に出現した高坏Ⅰ類がさらに低脚化し変化したⅠ－2類が主要型式として続ぐが、高坏D・G・Ⅱ類は継続しない。小型鉢F類は体部の彎曲がなくなり短く開いた口縁に変化したF－4類への変化が確認される。また見性寺Ⅱ－2式からの系譜となる丸底の小型埴B類も小型化してB－5類として存続するが、口縁部が大きく開く小さな底の付く小型埴C－1類が新型式として登場する。また、須恵器の模倣甕と思われる丸底で扁平な球形胴の模倣甕A－1類も見られるようになる。本段階の最大の特徴の一つとして、確認数は少ないが、丸底の内彎口縁A－1類が新型式として登場することである。

甕類も見性寺Ⅱ－2式からの系譜が追えない長胴甕A－1類が、新型式として登場する。形態は胴

部中央の最大径が口径を上回り口縁部が短く外反し小さな不安定な平底となるらしい。また、前段階から見ると小型化する球形胴壺A-4類も引き続き一定量見られる。外反口縁の台付き甕C-3類も少数存続する。確実なものでは確認できていないが、大型の台付甕E類も存続すると予想される。

本段階のもう一つ最大の特徴として甕が新形式として登場する。形態は単純口縁で胴部球形で壺のような作出の平底に放射状の小穴を穿つものである。

以上I-1期については壺類は新形式のW類以外見性寺II-2式のバラエティをそのまま継承するし、小型埴B類、小型鉢F類も存続する。しかし、須恵器の安定的な登場とともに、見性寺II-2式の最大の特徴である高坏D・G・H類は消滅し、球形胴壺も小型化して激減する。代わって新形式の丸底坏A類、長胴壺A類、甕A類の登場と、高坏I類の安定化という大きな様式の変化が見られる段階である。ここに、後半期土師器の大様式の成立を認識したい。

I-2期(第239図～第241図) 本段階に関する資料も板瓦遺跡においては断片資料に留まっているため、主に浜松市の伊場遺跡祭祀遺構KI1(29・31～33・37・39、浜松市教育委員会 1987、出典以下同じ)、同祭祀遺構KI2(30)、同KT201(28・34・38～40)出土の資料を中心に、板瓦遺跡では市バイパス調査地区SD27(24)、メロンハウス調査地区4号竪穴P115(35)、袋井市川田藤藤淵遺跡Ⅲ地区(25、袋井市教育委員会 1993)、袋井市愛野向山B8号墳(27・36、袋井市教育委員会 1988)、磐田市勾坂下原6号墳(23・26)出土の資料を補足として使用した。今回中心的に使用している伊場遺跡の資料は、TK23並行の資料がほとんどであるため、TK47並行の土師器については小型鉢F類と壺W類以外明らかにできなかったことをお断りしておきたい。

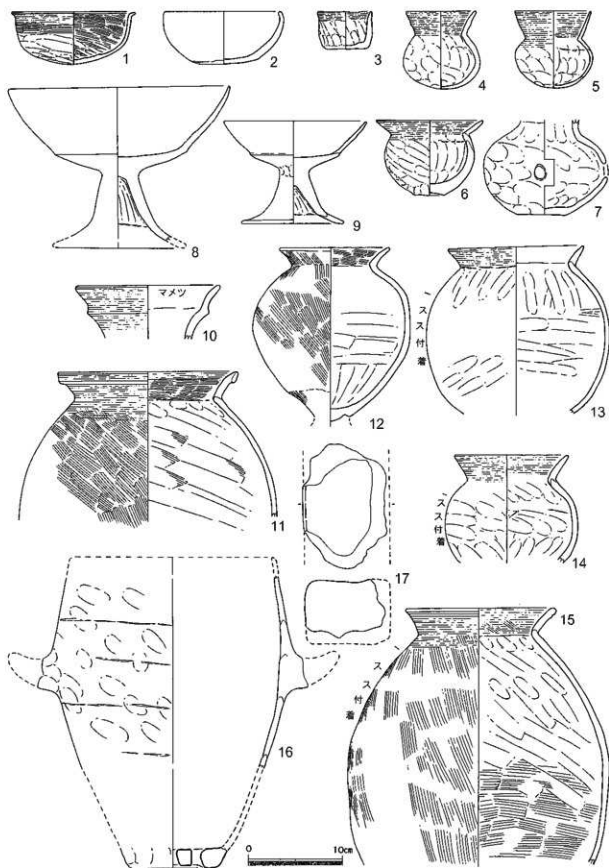
須恵器では口径が15～14cmを計り、口縁の立ち上がりが低くなるI期新段階古相(TK23)の内容を示す坏蓋・身のA-2類、口縁端部に段がつき面取りが見られるI期新段階新相(TK47)の内容を示す坏蓋・身のA-3類への変化が認められた。一段透の短脚有蓋高坏も坏身・蓋と同様に口縁の立ち上がりが低くなるA-2類から、口縁端部に段を付ける面取りが見られるA-3類への変化が見られた。甕は胴部の張りが弱くなり口縁が開く変化を見せるTK47のA-2類が確認できた。

土師器の壺類は前段階から系譜を引き口縁部がさらに短く変化した壺T-5類と、口縁部が長く変化する直口壺W-2類の存在が確認できた。壺U類は前後の段階からその存在が予測されるが、壺S・V類は確認できない。また、新形式の壺の登場は本段階では見られない。

高坏は前段階から見ると若干脚部と坏部の開きがなくなる程度の変化しか認められないI-4類が主要型式として依然と存続する。小型鉢F類は前段階とは体部の彎曲が増す変化のF-5類から、口縁が内彎するように開くF-6類への変化が見られた。平底のコップ型の小型鉢G-1類も少数であるが新形式として登場する。須恵器の模倣甕は口縁が短く球形胴の形態のA-2類が少数確認されている。口縁部が内彎する丸底の坏A類はほとんど変化のないA-2類と、口縁部が直立ないし開く形態の丸底の坏B-1類が主要型式として確認数が増加し、少数型式として小さな底部をもつ内彎口縁の坏C-1類も見られるようになる。口径は14～12cm代とばらつきがあるが、祭祀遺構出土のためか12cm代の小型のものが多く確認されている。坏A・B類の出現比率はA類がやや多い程度である。このように、坏と坏に類した小型鉢のバラエティと確認数が増すことが注目される。

甕類は前段階からの承継のある長胴壺A類が、胴部の張りが少なくなり口径と胴部最大径が同じになる変化を見せA-2類として主要型式として存続する。本段階から長胴壺A類と同形態で、高さ15～20cmを測る小型壺A-1類が加わる。他に前・後段階から球形胴壺A類はその存続が予想されるが、数は激減していると思われる。台付甕C類は確認されない。大型の台付甕E類も存続が予想されるが、確実な資料に恵まれていない。

甕は前段階と同様に単純口縁で胴部が張り下半は窄まる形態のものが存続するが、口縁部は肥厚させ底部も多数の小円孔をなす形態から、底部をそっくり抜く形態のA-2類への変化が見られた。



第239図 古墳時代後半Ⅰ-Ⅰ期土器参考資料図（1～17 古新田遺跡）

以上Ⅰ-Ⅱ段階については資料の制約のため、TK23段階のものを中心として検討した。まず壺のパラエティの減少があり、前半期土師器の壺が担ってきた貯蔵用の多数の用途の減少が本段階で見て取れる。さらに小型埴B類の消滅に伴い、須恵器や土師器の壺が登場したり坏が増加することから、A高坏と小型丸底鉢の組み合わせで行う祭祀様式から、坏・高坏・壺類を主に使用する新たな祭祀様式に変換していると考えられる。または、集落内での坏や高坏などの個人所有の土器の占有率の高まりをも示唆する内容とも考えられる。となれば、Ⅰ-Ⅰ期で依然見られた見性寺様式からの影響が本段階を以てして完全に消滅したことを意味し、新しい土器様式が完成したことを示すのが本段階といえる。

Ⅱ-Ⅰ期(第240図～第241図) 本段階に関する資料も坂尻遺跡においては断片資料に留まっているため、隣接の遺跡である掛川市原川遺跡SD308(41・47～55・57～60、静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989)出土の資料を中心に、坂尻遺跡では今回調査区SK60とSX2(46)、市パイパス調査区SD27(42・56)、袋井市井守塚4号墳(43)、浜松市瓦屋西B2号墳(44・45、浜松市教育委員会 1991)出土の資料を補足として使用した。市パイパス調査区SD27出土資料については、須恵器をみるとⅠ-2～Ⅱ-2期の3時期、土師器では原川遺跡SD308を一括性の高いものと認識すると、Ⅱ-Ⅰ期とⅡ-2期の2時期の土師器を主体とすることが理解される。よって、SD27の出土資料には一括性はないが、今回知られたⅡ-2期の一括資料との型式比較から抽出が可能となった資料であることを予め断しておく。

須恵器では口径が16～14cm台を計り、口縁端部に形骸化した面を持つⅡ期段階(MT15)の内容を示す坏蓋・身のA-4類、高坏も口縁の立ち上がりさらに小さくなる一段透の短脚有蓋高坏のA-4類と、坏蓋に短い脚部を取り付けたような無蓋の高坏B-1類が新型式として登場し、脛は胴・口縁部に文様を入れた型式で、底部が突出するように変化したA-3類が知られた。

土師器の壺類は前段階の系譜をもつ口縁部が一層短く変化した壺T-6類と、変化が不明な直口壺W-3類、球形胴化が進み丸底となる壺U-3類が存在するが、新型式の登場は見られない。

高坏は前段階よりも坏部が浅くなり、脚部が高くなる変化が認められたⅠ-4類が主要型式として存続する。問題となる高坏J類については、SD308に伴うものは脚部破片1点でしかもⅡ-4期に該当しそうな型式であるため、今回はⅡ-Ⅰ期に出現は求めなかった。小型鉢F類は前段階よりも体部の彎曲がさらに少なくなる程度で、さほど変化がないF-7類として確認された。須恵器の模倣壺は確認されない。坏類は口縁部が内彎する丸底の坏A類はほとんど変化なくA-3類として存続し、同じく前段階とあまり変化のない口縁部が直立ないし開く形態の丸底の坏もB-2類として存続する。両者共に組成率は増加する変化は見られるが、坏A・B類の出現比率は、A類がやや多い程度で本段階においても変わらない。また、口径では14～13cm代となり前段階よりも大型化する傾向は見られるが、12cm代のもも少数見られる。本段階最大の特徴としては模倣坏身・蓋の登場であろう。模倣坏身・蓋A-1類は、比較的須恵器を忠実に模倣したものであるが、確認数は非常に少ない。内彎口縁で上げ底の坏C類、コップ形の平底の小型鉢F類は確認されない。

甕類は前段階からの系譜の長胴甕A類が、胴部の張りが増し胴部中央の最大径が口径を上回り口縁部が短く外反し丸底化する変化を見せA-3類として主要型式となる。本段階でも長胴甕A類と同じ変化を見せる小型甕A-2類が存続する。他に数少ないが前段階からの球形胴甕A-5類も確認される。外反口縁の台付甕E類もE-3類として位置付けたが、台付かどうかは確認できていない。

甗は胴部が張る形態で前段階に見られた口縁部の肥厚は折返口縁へ変化したA-3類の他に、やや小型で底部を丸く仕上げ底部穴も小さく穿つ甗B-1類が新型式として登場している。

以上Ⅱ-Ⅰ期については壺類は前段階のパラエティをそのまま継承する。しかし、前段階からやや増加傾向にあった丸底坏A・B類は飛躍的に増加し、少数であるが模倣坏蓋・身も登場する。高坏も前段階のⅠ-4類が安定的に存在する。この点は前段階に確立した坏類と高坏を主に使用する新たな

土器祭祀の頻繁な執行と坏・高坏類の個人所有の器種の増加によりさらなる須恵器の供給不足を招いた結果、土師器の坏・高坏の組成率の増加と、模倣坏身・蓋の出現がなされたと理解したい。甔についても確認率が高まるので、戸塚和美氏が説くように遠江ではⅠ期（5世紀代）よりもⅡ-Ⅰ期段階（6世紀代）から安定的に竪穴住居跡にカマドの導入が確認される状況（戸塚和美 1993）と良く連動する動きである。須恵器のさらなる普及、土師器の坏・高坏類の増加、土師器の模倣坏身・蓋の出現、甔に見るかまどの普及などの点から、Ⅰ期とⅡ期の間に土器様式の大きな画期を見い出したい。

Ⅱ-Ⅱ期（第240図～第241図） 本段階に関する資料は坂尻遺跡では比較的增加の傾向があり、今回調査区のSH54（62・71・74・77・79・84・85）を中心として、同SK61（70・82）、同SX2（69）、同SD80（64）、同SD205（67）、SD217（75・76）、市バイパス調査区SD27（61・73・81）、県バイパス調査区SX01（80）、同SB07（83）、同SD17（72・78）、袋井市団子塚9号墳（63・68、袋井市教育委員会他 1994）、袋井市御所森古墳（65、袋井市教育委員会 1993）、湖西市天神山3号墳（66、湖西市教育委員会 1983）出土の資料を補足として使用した。

須恵器では口径が16～14cm代を計り、蓋・身共に口縁端部に面を持たないが、身の口縁の立ち上りが高く、蓋の稜も明瞭なⅢ期前葉古相段階（TK10の古相）の内容を示す坏蓋・身のA-5類、身の口縁の立ち上りが低くなり、蓋の稜も不明瞭になるⅢ期前葉新相段階（TK10新相）の内容を示す坏蓋・身のA-6類が存在する。また稀ではあるが第118図1748のように口縁部の形態から見て、本段階で口径13cm代のものが少量であるが確実に存在する。高坏は蓋しか確認できていないが、天井は高いが口縁端部の面が無くなる一段透の短脚有蓋高坏のA-5類と、口縁の立ち上がりさらに小さくなり反対に脚部が高くなり端部の垂れがほとんどなくなるように変化した一段透の短脚有蓋高坏のA-6類が見られる。無蓋の高坏B-2類も長脚化の変化が見られた。高坏は一段透の長脚無蓋高坏であるC-1類、円孔の見られる小型高坏A-1類が、短脚高坏類に取って代わり本段階から主要型式として新登場する。甔は胴部の小型化が始まり口縁部が開くように変化したA-4類が知られる。

土師器の壺類は前段階から系譜を引く口縁部の外反がなくなる傾向以外あまり変化の見られない壺T-7類と、口縁部が外反する変化を見せる直口壺W-4類、変化が確認できない壺U-4類が継続するが、本段階でも新型式の壺の登場はない。

高坏は前段階から坏部が小さく、極端な小型化と短脚化した変化が見られるⅠ-5類が少量残存するにすぎず、主要型式の高坏としては短脚の高坏J-1類が安定的に出現する。高坏J類は小型鉢F-8類に脚を付けた形態となっていることから、須恵器の模倣高坏とは異なるものであろう。小型鉢F類は前段階よりも体部が深まり、口縁部の立ち上りが高くなる形態に変化しF-8類として存続し、75の小型のものと76の小型鉢とはいえないような大型の2種類がある。他に口縁部が短く直立し球形胴の鉢H-1類も小敷であるが新型式として確認できる。丸底の坏類は口縁部が内彎する形態で前段階とほとんど変化のないA-4類として存続するが、その組成比率は減少する変化を見せる。坏B類は71のように口径が15cm代を中心とする大口径のものが出現し、口縁が直立するものよりも外に開く型式が増加する傾向が見られた。また、口径では14～13cm代が主体であるが、15・12cm代のものも少数見られ前段階との変化はない。模倣坏身・蓋A-2類の確認数は増加し、形態も口縁部の立ち上がり、蓋の稜線も形骸化し須恵器の忠実な模倣品とはいえない型式に変化している。

甔類は前段階からの系譜のある長胴甔A類が、胴部の張りやや減少し口縁部が短く立ち上がるように外反する変化を見せA-4類として少数存続する。本段階から口縁部の外反が少なくなり、胴部の張りもほとんどなくなった長胴甔B-1類が新型式として出現する。胴部は寸胴で底部も平ら気味の丸底形態に変化したのは、おそらくカマドの普及に伴いカマド内での安定性と熱効率のを追及した結果から変化した型式と推定される。本段階でも長胴甔A類と同じ変化を見せる小型甔A-3類が存続する。台付甔E類も存続すると思われるが、良好な資料に恵まれていない。

飯は胴部の張りがなくなる変化を見せるが、口縁部は依然として折返口縁で底部は窄まる形態を残すA-4類、砲弾型の底部穴も小さく穿つ飯B-2類も存続するが型式変化はよく分からない。

以上Ⅱ-2段階については土師器の壺類は前段階のバラエティをそのまま継承する。さらに丸底坏A類は減少傾向にあり、B類はさらに増加し主要型式として存在する。模倣坏蓋・身も模倣度を減少させながら増加し安定的に存在する。高坏は前段階のI類が突如として減少消滅し、新たにJ類が主要型式として出現する。長胴甕も従来のA類以外に、胴部の張りの少ないかまどの普及に伴う形態に変化したB類の出現が見られた。また、須恵器の組成比率も本段階からかなり増加し、前段階から見られた須恵器の不足を補う形で、おそらく湖西窯の生産量がさらに高まるにつれて、地元の須恵器窯である袋井市衛門坂窯（袋井市教育委員会 1989）の生産も本格化することと連動していると思われる。このように、Ⅱ-2段階は高坏や長胴甕の一部に大きな変化は見られるが、他の型式は概ねⅡ-1期からの変化を継承すると考えられる。

Ⅱ-3期（第240図～第241図）本段階に関する資料は坂尻遺跡においては、一括資料の確認数はⅡ-2段階同様少ないが、遺物の出土量は増してくる。袋井市の県道増設に伴う調査区のSI4（86・96・101・106・107、袋井市教育委員会他 1984）と今回調査区のSH55（102～104）を中心として資料提示する。また、県バイパス調査区のSB06・SB12・SX12でも本段階の良好な一括資料が出土している。さらに、今回調査区SK55（89）、同SX6（87・97・98）、同SD80（95）、同SD148（93・94）、同SD260（105）、市バイパス調査区SK21（92）、袋井市高尾向山7号墳（99・100）、袋井市長者平21号墳（91、袋井市教育委員会 1982）、掛川市山麓山横穴（88・90、静岡県 1992）出土の資料を補足として使用した。

須恵器では15～14cmの大口径のままであるが、身の口縁端部の立ち上がりが低くなり、蓋の縁も明瞭でないⅢ期中葉段階（TK43並行）の変化を示す坏蓋・身のA-7類が存在する。高坏も口縁の立ち上がりが一層小さく、反対に高い脚部で端部の垂下と透もほぼなくなる変化が見られる有蓋高坏のA-7類が確認された。無蓋の高坏B類は非常に数少ないが、坏部の縁が明確であり脚端部の垂下が見られるB-3類が確認できた。高坏は他に二段透の長脚無蓋高坏のD-1類と、同形態で二段透の長脚有蓋高坏のE-1類が、高坏の主要型式として新登場している。甕はおそらくA-4類が長胴化し大きく開く口縁部が変化したC-1類が新型式として登場する。長めの頸部をもつC-1類が古相、頸部が少し短く変化したC-2類が新相として確認できた。短頸の甕A類は確認されない。

土師器の壺類は前段階から系譜を引くものは、僅かに口縁部が短く胴部が球形になる変化を見せる直口壺W-5類が見られる程度である。しかしながら、型式変化が大きいためW類に分類すべきか問題もある。須恵器高坏の長脚化に関係すると思われる壺W-5類に脚を付けた脚付壺A-1類も出現する。壺T類の存在は確認できないが、前・後の段階から本段階でもその存在が予想される。壺類は本段階でも新型式の登場はない。

高坏はJ-2類が坏部が浅くなり口縁部の傾斜が見られるように変化した、前段階と同様に主要型式となっている。本段階の最大の特徴となる須恵器高坏の長脚化に関連すると思われる長脚の高坏K-1類が、高坏J-2類と共に主要型式として登場する。小型鉢F類は消滅するらしく、本段階における小型鉢の存在は確認できないが、前後段階からH類の小型鉢の存在が予想される。丸底の坏はA類は消滅し、坏B類が主体となる。坏B類は、96のように口径が15cm代を中心とする大口径のものが引き続き見られる。また坏B-4の口径は前段階と同様に14～13cm代が主体であるが、15・12cmのものも少数見られるため、前段階との形態と法量の変化は明確ではない。模倣坏身・蓋も一定量見られ、形態も須恵器坏身・蓋と同様に身の口縁部の立ち上がりがさらに低く、蓋も縁線も全く形骸化するA-4類に型式変化するが、口径の変化は坏B類と同様にほとんどないと考えている。

甕類は前段階からの系譜のある長胴甕A類は極めて少数しか確認されないが、最大径が胴部中央に

あり口縁部が外反からくの字状に変化を見せたA-5類、長胴甕B類も口縁径と胴部径の差が無くなり胴部の張りもほとんどなくなり寸胴となる変化を見せるB-2類として存続している。本段階における甕類の最大の特徴は、くの字状口縁で肩部に最大径があり、口縁部と胴部最大径があまり違わず底部の形態は丸底であるが尖り気味である形態となる新形式の長胴甕C-1類の登場である。C類の出現は例えば外面のハケメ調整を見ると、A類は単位のない斜行ハケメ調整、B類はやや単位の見える縦ハケメ調整であるのに対して、肩部と胴部中央、下半それぞれの単位(3~4単位が多い)で分割縦ハケメ調整(以後縦ハケメ分割調整と言う)が観察され、従来のA類とは異なる調整手法が見られる。この手法は画一的な調整により土器製作の効率化を図ろうとする試みで、本段階から何れかの地からもたらした外来手法と考えられる。また、本手法はⅡ-3(2?)期から始まりⅢ-2期まで一貫として受け継がれる技法で、まとめの項でその伝播経路を検討する。本段階でも長胴甕C類と同じ型式変化を見せる小型甕が存続すると思われるが、良好な資料に恵まれていない。台付甕E類はくの字状口縁で肩が張り胴部下半が窄まる形態になるE-4類が確実に確認できる。

甕は単純口縁となり胴部の張りがなく下半が窄まる形態を残すA-5類、砲弾型で口縁部の大きさが増し寸詰りのような形態に変化した甕B-3類が存続する。

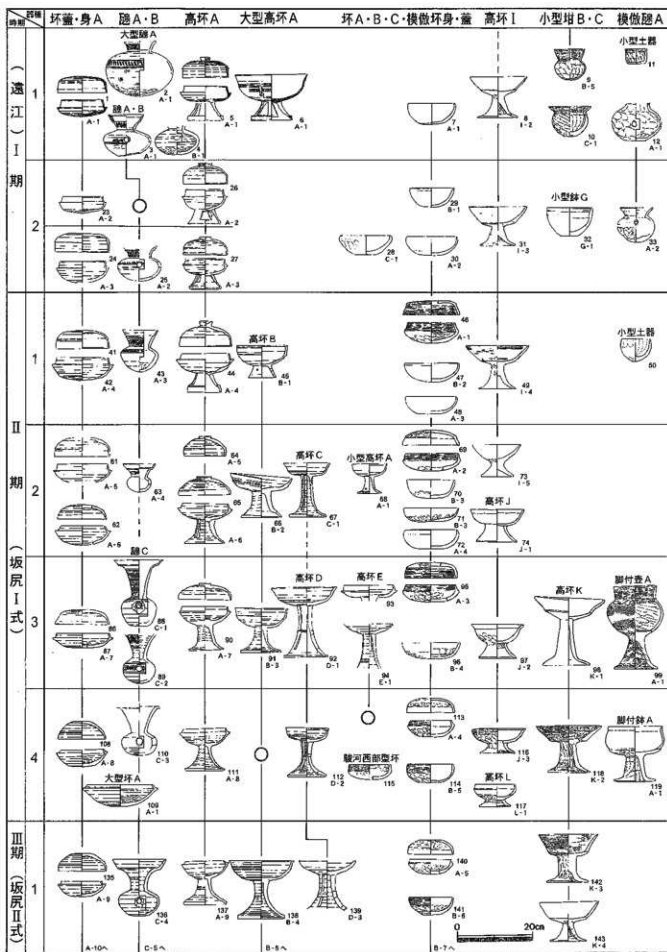
本段階の新形式として、丸底で広口のくの字状口縁になる鍋A類の登場があげられる。101は把手は付かないが、把手付のものも存在すると予想されるが、今のところ確認されていない。

以上Ⅱ-3段階は土師器の壺類は前段階のバラエティがほとんどなくなる。さらに丸底坏A類は消滅し、B類が主要型式として安定する。模倣坏身・蓋も須恵器の形態変化を追いながら安定的に存在する。前半期以来続いた小型鉢F類は消滅する。高坏は引き続き在来のJ類が主要型式として存続するが、新たに須恵器の高坏・甕・瓶類の長脚、長頸化と連動するように長脚の高坏K類が安定的に突如出現する。長胴甕も前段階からのA・B類以外、製作効率を追求した新形式のC類が出現する。また、新形式の鍋A類の出現も大きな変化として捉えられる。須恵器の組成率も本段階からかなり増えてくる。このことは、前段階から見られた須恵器の増産は安定期を迎え一定量の確認ができるようになる。このように、Ⅱ-3段階は前段階と比較するならば、須恵器の長脚・長頸化の変化に連動する高坏や脚付土器の出現、新形式の長胴甕や鍋の出現を見ることができ、前段階と比べるとやや大きな画期が想定される。

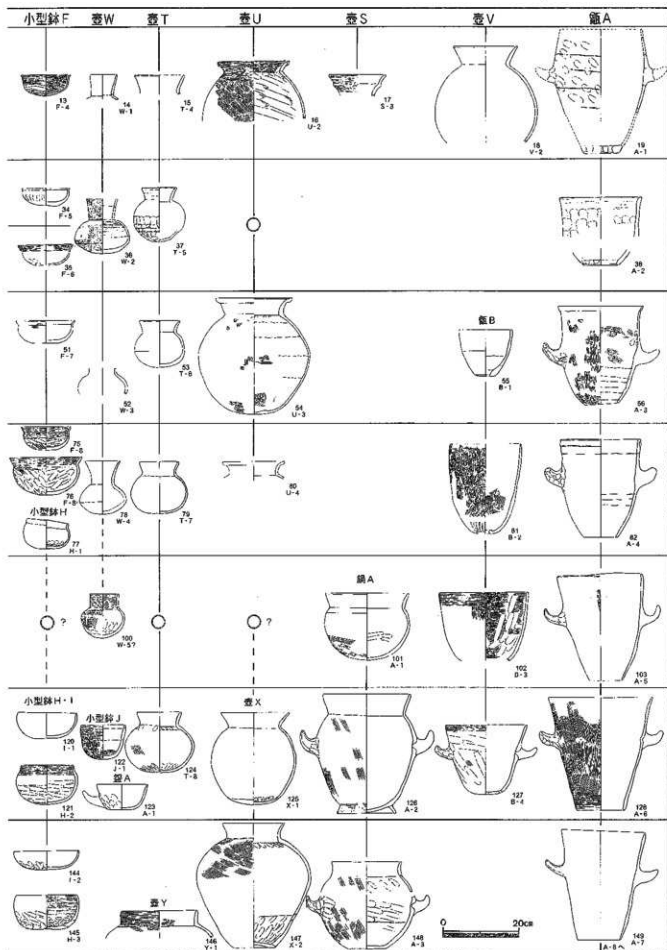
Ⅱ-4期(第240図~第241図) 本段階に関する資料は坂尻遺跡では、前段階と比較すると一括資料の確認数は飛躍的に増加する。今回調査区のSH18(125~128・130~132)を中心として、Ⅲ-1期を含む資料であるが型式分離が容易なSD80(108・113・114・116・117・119~121・124)、SD148(109・115・118・122)、SD244(133)、SD260(123・129)出土資料を提示する。また、県バイパス調査区のSX601・SX613で本段階の一括資料が報告されている。さらに、今回調査区SK83(134)、袋井市金山B9号横穴(110)、袋井市八幡ヶ谷3号横穴(112)、浜松市山地蔵平B14古墳(111)、浜松市文化協会1992、以下出典同じ)出土の資料を補足として使用した。

須恵器では坏身・蓋とも口径が13cm前半~12cm後半代と小型化したⅢ期後葉段階(TK209並行)の型式内容を示す坏蓋・身のA-8類が存在する。数少ないA-8類の坏身と同形態で口径が20cm近くある大型坏身A-1類の存在が確認された。高坏は本段階でも数少ないが、坏の変化と同様に坏部の小型化が始まった有蓋高坏のA-8類が見られる。無蓋の高坏B類は前・後の段階からその存在が予測されるが、確実なものは確認できていない。二段透の長脚無蓋高坏は、脚部が短く坏部も小型化したD-2類に変化している。高坏E類は確認できていないが、本段階でもD-2類と同様の変化がある型式の存在が予測できる。甕も坏の小型化、高坏の短脚化にともない頸部も短頸化し、施文も少なくなる変化を見せるC-3類が引き続き見られる。

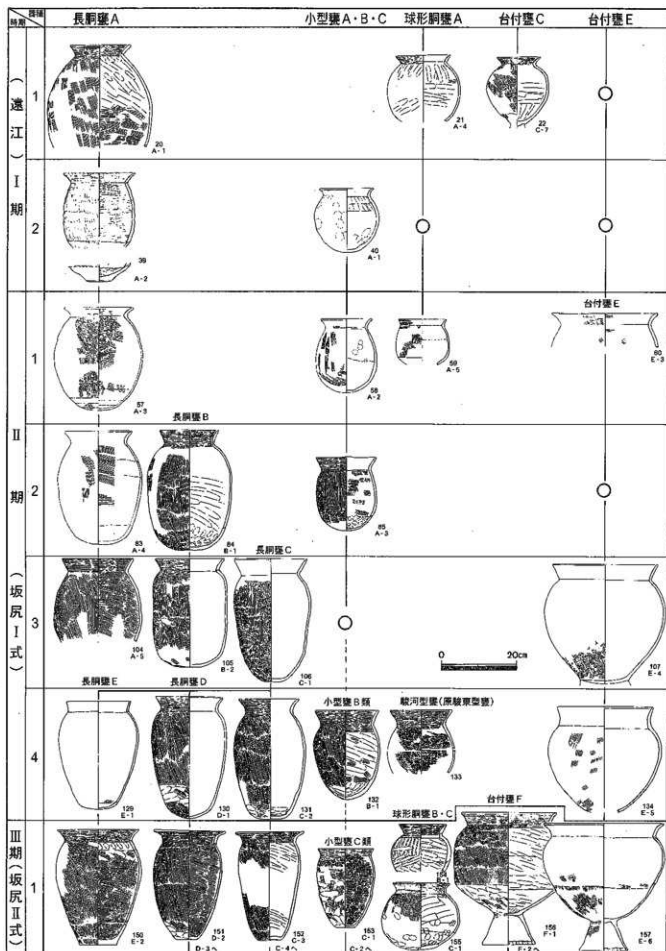
土師器の壺類は前段階からの系譜を引くもので、直立の口縁に変化する以外さほどの変化も見られないT-8類が存在する。丸底が基本であるが第104図1504のように高台の付くものも少数存在する。



第240図 古墳時代



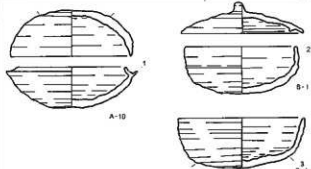
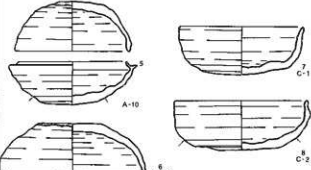
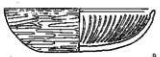
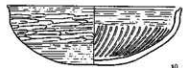
後半期土器編年図 1



第241図 後半期土器編年図2

時期	環蓋・身 A・B・C			甕C	高環B	小型高環B	環B・C・D	高環M	甕A	
Ⅲ期(坂尻Ⅱ式)	2	 A-10	 B-1	 C-1	 C-5	 B-5	 B-5 飛鳥様式環C	 B-7	 M-1	 A-8
	3	 A-117	 B-2	 C-2		 B-6	 C-1	 C-3	 M-2	
	4		 B-3	 C-3		 C-4	 B-4	 D-1	 M-2	

時期	小型鉢K	長胴甕C	長胴甕D	小型甕C類	壺X・鍋A	台付甕F	台付甕E
III期 (坂尻Ⅱ式)	2  3 						

時期	須恵器 環蓋・身 A・B・C	飛鳥土師器・環C
觀音堂2号横穴		
觀音堂6号横穴		
坂尻第2土器集積		

第242図 後半土器編年図3・遠江出土飛鳥様式土師器參考資料実測図

本段階から口縁部の形態が長胴甕C-2類やD-1類と共通する直立気味の外反口縁、ないし端部を摘み上げる口縁を含む丸底球形胴の広口壺X-1類が、新型式として一定量存在する。

高坏は前段階からの主要型式のJ類はさらに坏部が浅くなり、口縁部の傾斜が強まる変化が見られるJ-3類、長脚高坏のK類も須恵器高坏の短脚化の変化と対応し小型化した坏部、短脚化した脚部の変化が見られるK-2類として確認数を減らして主要型式として存続する。また、新型式の高坏として数は少ないが、模倣坏身と高坏K類の脚を合体させて生まれたと思われる有蓋高坏L-1類が少数見られた。本段階で坏B類を大型化したような小型鉢I-1類、口縁部を引き出して作る丸底球形胴の小型鉢H-2類が、安定的に出現する。小型鉢H-2類に脚を付けた脚付鉢A-1類も同時に出現する。丸底の坏類は前段階同様坏B類が主体で、須恵器坏身・蓋と同様に小型化が進み12cm代を中心とするものが主体となるが、13・11cm代のものもかなり見られ、前段階の形態・口径と重なる部分もあるため、形態・口径差では前・後の段階と確実に分離はできない。模倣坏蓋・身の確認数も前段階同様一定量見られ、形態も須恵器の坏身・蓋と同様に身の口縁部の立ち上りがさらに低くなり、口径も12cm代と小型化したA-5類に変化している。ただし、今回大量に資料提示出来たSD80などの模倣坏身・蓋の資料を見ると身に対して蓋の数が異常に多いため、蓋のなかに身として使用され無蓋坏身に変化しているものを多数含むと考えられるが、身とする型式の根拠を示せなかったので本報告書ではすべて蓋として報告した。しかし、今後細別型式を認識し無蓋坏身を分離することが、無蓋模倣坏身が多数存在する駿河湾岸域との様式比較をするうえで望ましいとは考えている。また、本段階で搬入品として、駿河西岸域に分布する駿河西部型坏が確認された。

甕類は前段階からの系譜のある長胴甕A・B類は消滅し、代わって長胴甕C類から派生する長胴甕D類とE類が登場する。長胴甕C類は口縁部がくの字状口縁から直立気味の外反口縁のC-2類へと変化する。D類はC-2類とほとんど同じ形態であるが、口縁端部を摘み上げる特徴が見られるものである。E類も底部が平気味の丸底になる以外、C類とほぼ同形態で口縁部は短いくの字状口縁になるものである。長胴甕の主要型式はC-2類とD-1類で、E-1類は少数型式である。さて、本段階の一括資料とされる県バイパス調査区のSX601とSX613で、平底の長胴甕が出土している。形態と胴部下半に接合痕を明瞭に残す成形技法から見ると、SX601出土のものはⅢ-1期に該当する長胴甕C-3類、SX613出土のものもⅢ-1期の小型甕C-1類に極めて類似するものである。Ⅲ-1期に先行して平底の長胴甕が出現している可能性もあるが、今回調査区の資料からはこの状況は確認できなかった。後述するとおり長胴甕C-3類の成形技法は特徴的で、今回の編年ではこの型式の平底長胴甕はⅡ-4期に含めなかった。しかし、後述するようにC-3類の製作技法出現以前の形態を保ちつつ、Ⅱ-3・4段階と並行する時期の平底長胴甕が菊川流域に存在することも確認されているので、本段階で平底の長胴甕が全くないとも言いきれない。また、本段階でも長胴甕C・D類と同じ型式変化をした、小型甕B-1類が存続する。台付甕E-5類は口縁部は長胴甕C-2類・D-1類と同じ型式変化をする、くの字状口縁で肩が張り胴部下半が窄まる形態のE-5類が一定量確認できる。また搬入品と思われる駿河湾岸部に分布する所謂駿東型甕が確認され、駿河西部型坏とともに駿河湾との交流と並行関係を考えるうえで注目される資料となった。

甌は単純口縁で胴部下半の窄まりはなくなり、はの字状に広がる胴部形態に変化したA-6類が主要型式として、砲弾型で胴部の張りが失われた形態に変化した甌B-4類が少数確認されている。

鉢A類は長胴甕C-2類や長胴甕D-1類と同じような直立外反口縁、ないし口縁端部摘み上げ形態で扁平から球形胴に変化したA-2類が主要型式として確認できる。丸底が普通であるが126のように、高台をつけるもの、第105図1512のように小型のものも少数存在する。

Ⅱ-4段階については土師器の壺類はX類が、主要型式として登場する。坏類はB類が主要型式として安定し、須恵器坏と同じく小型化の変化を示す。模倣坏蓋・身も須恵器の形態変化を追いながら

安定的に存在するが、蓋が無蓋坏身として変化し、多数存在している可能性が指摘できた。鉢類は新形式の小型鉢Ⅰ類、脚付鉢A-Ⅰ類が新形式として登場する。高坏は引き続きⅢ類が扁平化、Ⅳ類は須恵器の長脚高坏の短脚化と連動するよう変化している。長胴壺も前段階からのA・B類は消滅し、C類が主要型式となりD・E類が新形式として登場する。鍋A類も安定的に存在している。須恵器の組成比率はさらなる増加が見られ、本段階から上師器に対して須恵器が2割以上の組成率が確立すると考えられる。このように、Ⅱ-4段階は前段階からの器種組成を発展させ、かつバラエティを持たせたもので、最も6世紀代の土師器組成を確立した時期といえる。

Ⅲ-1期(第240図～第241図) 本段階に関する資料は坂尻遺跡においては、前段階と同様に一括資料の確認数は多い。今回調査区のSK90(135・138・140・141・146・148・151・152・154)を中心として、Ⅱ-4期にまたがる資料であるが型式分離が容易なSD80(136・139・144・145)、SD244(150)、SD248(147)、SD260(142・149・153・156・157)出土資料を提示する。また、県バイパス調査区のSB01でも本段階の良好な一括資料が出土している。さらに、市メロンハウス調査区SD5(143・155)、浜松市山地蔵平B11・12号墳(137)出土資料を補足として使用した。

須恵器では坏身・蓋とも口径が12前後～11cm代と小型化したⅢ期末葉段階(TK217古相?)の内容を示す坏蓋・身のA-9類が存在する。高坏は本段階でも数少ないが坏身・蓋の変化と同様に、坏部のさらなる小型化が見られる有蓋高坏のA-9類が確認できた。無蓋の高坏B類は深い半円形の坏部と、やや長めの脚で脚端部を垂下げる変化をしたB-4類が、D類と交替するかのようになり主要型式として出現する。二段透の長脚無蓋高坏D-3類は坏部と脚部共にB-4類と同じような形態に変化し少数型式として確認される。壺もさらなる小型化に伴い頸部も短頸化し、胴部の注口部が突出するように変化を見せたC-4類が継続する。

土師器の壺類は前段階からの主要型式となったX類は、口縁部が大きく外反し肩の張る胴部と平底の形態に大きく変化したX-2類が主要型式として存続する。さらにX-2類と同じ形態で口縁が短く直立するY-1類も一定量存在するようだ。壺T類は本段階では確認できない。

高坏はⅢ類は消滅し、長脚の高坏のK-2類がさらに短脚化し小型化したK-3類、その変化がさらに進んだK-4類への変化が見られ、これらが本段階の主要型式として存続する。小型鉢のうちⅠ類は浅くなる変化でⅠ-2類、Ⅰ類は口縁の引き出しが弱くなり平底気味になる変化が見られるH-3類として前段階よりもやや減少傾向はあるが一定量は存続する。丸底の坏類は坏B類のみが主要型式で、須恵器の坏が小型化すると同様に口径10～9cm代を中心とするものが主体となる。しかし、本段階でも11cm代のものもかなり見られるため、本段階においても法量だけでは前・後の段階と確実には分離できない。模倣坏身・蓋の確認数は前段階から見るとかなり減少傾向が見られる。形態も須恵器と同様に身の口縁部の立ち上がりさらに低く、口径最大径も11～10cm代と小型化したA-6類に変化している。ただし、本段階でも蓋のなかに無蓋坏身に変容しているものを含むと考えられる。

壺類は前段階からの系譜のある長胴壺C・D・E類が存続するが、いずれも口縁の外反度が大きくなり肩部の張りが高まり、胴部下半に明瞭な接合痕が見られ小さな平底が付く点、系譜の変化はないが型式の変化は大きいものがある。ただし、150の底部は厚手の平底で異質な作りである。菊川地域の平底長胴壺と関係するものか。長胴壺の主要型式は前段階同様C-3類とD-2類で、E-2類は少数型式である。本段階でも長胴壺C・D類と同じ型式変化を見せるが、口縁部が短く外反する変化が見られた小型壺C-1類が存続する。台付壺E類は長胴壺C-3類・D-2類の口縁部と同じ型式変化をする外反口縁で、前段階の系譜からの胴部下半が窄まる形態のE-6類と、新形式の胴部がす胴になるF-1類が登場する。本段階をもって大型台付壺は型式のバラエティが増すばかりでなく、確認数も飛躍的に増加する。搬入品の可能性がある丸底の球形胴壺C-1類と、これの在地での模倣品と思われる球形胴壺B-1類がある。伊勢湾西岸域からの影響であろうか。

飯は単純口縁で胸部のはの字状に大きく広がる形態から、傾斜が減少し筒形形態に変化したA-7類が主要型式として存続する。飯B類は確認できない。

鍋A類も長胴甕C・D類や壺X類と同じように大きく外反した口縁、肩の張る胸部で平底化した形態変化の見られたA-3類が安定的に確認できる。

Ⅲ-1段階は土師器X類が主要型式として安定するが、長胴甕や鍋類と同様に平底化する。坏類はB類が主要型式として存続するが、須恵器坏A-9類が増加傾向にあることと連動するように、模倣坏身・蓋の確認数は減少する。ただし、模倣坏身・蓋は前段階と同様に蓋が無蓋坏身として変容して存在している可能性が指摘できた。鉢類は前段階からの小型鉢H・I類が数を減少させながら存続する。高坏は須恵器の長脚高坏D類の激減と高坏B-4類の安定化と連動するように、J類は消滅しK類もさらに短脚が進んだ形態へと変化する。長胴甕は前段階からのC・D・E類が依然として存続するが、全て平底化しさらに底部下半に接合痕を残すなどの画一的な製作技法に変換しておりここに大きな型式変化を読み取ることができる。鍋A類も平底化し一定量存在している。須恵器の組成比率は前段階から比較すると一層の増加が見られ、本段階でも前段階と同様に土師器に対して須恵器が2割以上の組成率には確実にとなると考えられる。このように、Ⅲ-1段階は概ね前段階からの器種組成を発展させるが、須江器の高坏B-3類の安定と坏や甕の小型化に見るような大量生産に向けた須恵器の大変革と連動するかのよう、土師器の高坏J類の消滅とK類の極端な短脚化、模倣坏と丸底坏の減少と、長胴甕・壺・鍋類の平底化が看守された。このように本段階では、土師器はもとより須恵器にも大きな変動の見られるため前段階との間に大きな画期を設定したい。

Ⅲ-2~4期(第242図) 本段階に関する資料は冒頭でも述べた通り坂尻遺跡においては激減し、良好な一括資料に恵まれていないので補足資料が多い。よって、Ⅲ-2期では土師器のかんりの型式内容を確認できたが、Ⅲ-3・4期は須恵器・土師器の坏・高坏類を中心に記述するに留めざるを得なかった。今回調査区では断片資料であるが一括性のあるSK129(166)、SX5(159)、SD66(162・174)、SD152(171)、SD152(160)と、組成の分かる一括資料のメロンハウス調査地区4号住居(169・172)、袋井市権現山遺跡8号住居(173)、袋井市教育委員会 1990)を中心に提示する。さらに、今回調査区SD244上層(158)、市バイパス調査区NSD21第2土器集積(184)、メロンハウス調査区SD5(186)、袋井市山田原1号墳(161・163・177・180、袋井市教育委員会 1994、出典以下同じ)、同2号(167)、同3号墳(164・165)、同八幡山3号横穴(170)、磐田市勾坂4号墳(168、磐田市教育委員会 1989)、同高山4号墳(176、磐田市教育委員会 1989)、同事神A1号墳(187~189、磐田市教育委員会 1984)、豊岡村押越4号墳(178・179、豊岡村教育委員会 1983)、掛川市天段1号墳(181~183、掛川市教育委員会 1989)、森町観音堂横穴2号墳(184、日本楽器製造株式会社 1979、出典以下同じ)、同8号墳(175)出土の資料を補足とした。

須恵器では坏身・蓋とも口径が10~9cm代と最も小型化したⅣ期前半段階(TK217中相?)の内容を示す坏蓋・身のA-10類がⅢ-2期段階までは確実に存在する。しかし、175のように蓋で口径11cm代であるが、天井部切放後未調整のA-10類に特徴的な調整と形態をなしているものがあり、A類がⅢ-3段階まで残存した可能性のあるものも存在する。よって坏A類はⅢ-3・4期まで数を減らしながらも、残存する可能性を指摘しておきたい。Ⅲ-1期段階では他にA-10類と同口径・最大径の坏身・蓋が逆転した身底部の丸いA-10類の系譜を引くB-1類、坏身底部が平らに変化するC-1類が新型式として登場する。Ⅲ-2段階のB・C類の蓋は何れも乳頭状ないし乳頭状の頂部が窪むつまみの付く蓋の組み合わせからなる。Ⅲ-3期段階では坏身・蓋A類は一部残存しつつ、Ⅳ期後半段階(TK217新相?)の特徴を示す口径がやや大型化した12~11cm前後になる身と宝珠形のつまみの付く蓋の組み合わせになるB-2類とC-2類への変化、Ⅲ-4期ではⅢ-3期と同形態で口径13~12cm代のB-3類とC-3類、さらに口径が14~15cm代の大型の高台坏であるB-4類とC-4類への変化

が確認できる。

主要型式の無蓋の高坏B類は坏部は浅く、脚部も短脚化する変化が、Ⅲ-2期のB-5類からⅢ-3・4期のB-6類への変化として確認された。他に確認数は少ないが高坏B類と形態が類似する小型高坏B-1類が、Ⅲ-2期で確認された。Ⅲ-1段階まで見られた形骸した二段透の長脚無蓋高坏は、Ⅲ-2期以後は消滅する。甕も坏と同様にさらに小型化し頸部も一層短かく肩部もやや張り、注口部もさらに突出するように変化を見せるC-5類がⅢ-2期に引き続き見られ、同じような形態でⅢ-3・4期でも存続すると思われる。

土師器の壺類は全く確認できていない。壺X類に類似する外反口縁の土師器の壺は奈良時代初頭にも確認されるので、Ⅲ-2~4期にも存続することは確実だと思われるが、数は激減するらしい。ほとんど須恵器の壺・甕類に取って代わられてしまうのだろうか。

高坏は前段階までの主要型式であるK-2類は消滅する。かわって赤彩色の見られる皿状の坏部と筒状の低い脚部で、坏部に暗文が見られる高坏M-1類が主要型式として出現する。Ⅲ-3・4期では坏部が浅く脚部も低くなるM-2類への変化を示す。小型鉢は前段階までのH類・I類は消滅し、代わって全面赤彩色とミガキ調整された内彎口縁、平底形態で内面に暗文が見られる小型鉢K-1類が新型式として登場する。小型鉢K類はⅢ-3・4期では入念なミガキがなくなり、体部口縁の内彎度が低くなる粗雑化が進んだK-2類への変化が確認できた。丸底の坏類はⅢ-2期では前段階と同様に坏B類が確認数を減少させながら主要型式として存続し、須恵器の坏が小型化すると同じく最大径10~9cm代となり11cm以上のものは確認されない。さらに坏B類はⅢ-3・4期で確認されないで、ほぼ消滅していると考えられる。模倣坏蓋・身と無蓋模倣坏はⅢ-2期以後は確認されない。坏類も在来のB類にとって代わるように、Ⅲ-2期で盤形態に近い赤彩色の施されるC-1類、Ⅲ-3・4期でも全面赤彩色と入念なミガキ調整が施され口縁が外傾する坏D-1類が出現する。これらの盤状坏も高坏M類や鉢K類と共に、畿内からの影響で出現すると考えられる。第242図に示した遠江で確認された飛鳥様式土師器坏C類の出現状況についても、後述のまとめの項で触れる。

甕類は前段階からの系譜のある長胴甕C・D類が、Ⅲ-2期までの存続が確認できた。少数型式のE類は確認できない。C・D類共に口縁の外反度がさらに大きくなり肩部の張りが弱まり寸胴形態に変化はするが、胴部下半には明瞭な接合痕と小さな平底が付くことも確認できるため前段階からの大きな型式の変化は認められない。おそらく、長胴甕C・D類はⅢ-3・4期でも、さほどの型式変化はなく存続しているものと推測される。本段階でも長胴甕C・D類と同じ変化を見せる小型甕C-2類が引き続き存続する。台付甕F類はⅢ-2期で長胴甕C・D類の口縁部と同じ型式変化をしたさらに外反度の増した口縁と球形胴化が強まる変化を示すF-2類が確認できた。台付甕E類も浜松市幌子遺跡で奈良時代の台付甕E類の系譜を引くものが確認されている(浜松市遺跡調査会 1983)ので、Ⅲ-2~4期でもF-2類と同じ口縁部を持つ型式の存在が予測される。

甕は前段階よりも底径と口径差は少ないがほとんど変化が見られない単純口縁で筒形形態のA-8類がⅢ-2期に確認される。おそらくあまり変化がなくⅢ-3・4期にも存続すると予測される。

鍋類は全く確認できていない。鍋A類に類似する外反口縁の鍋形土器は奈良時代初頭にも確認されるので、Ⅲ-2~4期にも存続することは確実だと思われる。

以上Ⅲ-2~4段階については、土師器の壺類は全く確認できない。須恵器の壺や甕への比重が高まるのだろうか。後半期の土師器の特徴であった坏B類、模倣坏身・蓋A類、高坏K類、小型鉢II・I類については、坏B類は小型化してⅢ-2期までは何とか存続するがⅢ-3期以降確認することができなくなり、他の型式はすでにⅢ-2期で全く確認できなくなる。代わってⅢ-2~4期は赤彩色の施され放射状の暗文の施される新型式の坏C・D類、高坏M類、小型鉢K類が登場し、供膳具に大きな様式の変化を見ることができる。煮沸具の長胴甕、台付甕、甕はⅢ-1期で大きく変化を遂げた長胴甕

C・D類、小型甕C類、台付甕F類、甕A類があまり変化をせずに存続する。Ⅲ-1期で貯蔵具と煮沸具に始まった様式の大きな変化は、Ⅲ-2期以降現れる供膳具の大きな変化で完結されるといえる。ただし、Ⅲ-3～4期の煮沸具・貯蔵具の型式変化を明らかにできていないため、これについては今後の資料増加をまって再検討されなければならないだろう。

まとめ一 坂尻様式の提唱一

このように、後半期土器についても坂尻遺跡出土の資料を中心に中遠地域の編年を試みてきた。次に、遠江全域でこの編年が有効なのか、東・西遠江の資料を確認し、東三河と駿河西部・東部の隣接地域との比較のなかで、様式設定の問題にも踏み込みたい。最後に畿内圏との比較を試み、畿内との層年代の比較のなか、凡その絶対年代を当地の様式に与え後半期土器のまとめとしたい。

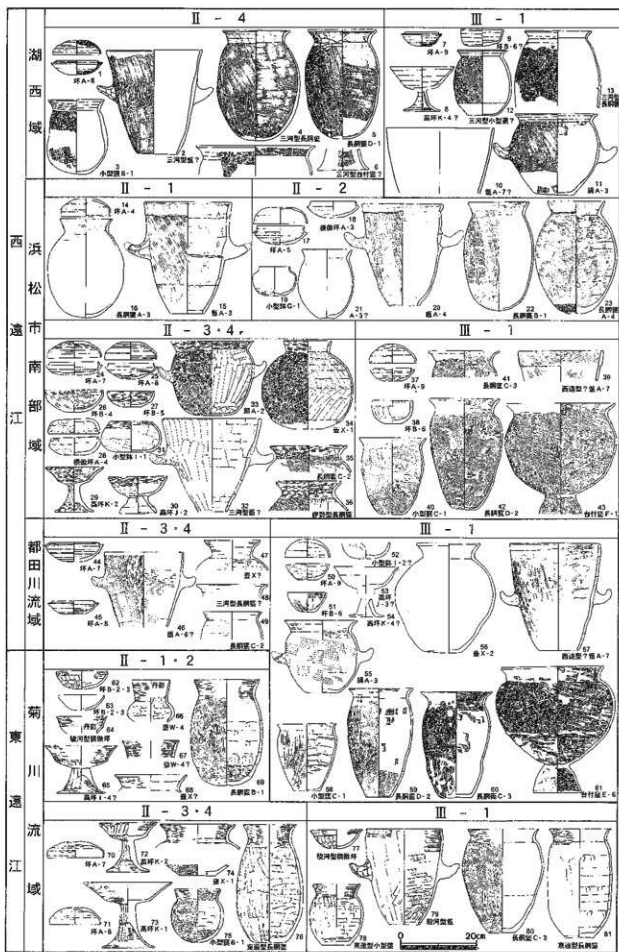
西・東遠江の様相(第243図) 西遠江では体系的に編年の比較ができる遺跡の資料は未だ少ないが、浜松市南部域の伊場遺跡(14～23・28、浜松市教育委員会 1987・1990、出典以下同じ)、城山・梶子遺跡(24～27・29～43、浜松市文化協会 1994・1993)、都田川流域の浜松市向山遺跡(浜松市教育委員会 1982)、同沢上・前平遺跡群(44～49、浜松市教育委員会他 1990)、細江町川久保船渡遺跡(50～61、細江町教育委員会 1933)、湖西市域の西笠子64号竈跡(1～11、湖西市教育委員会他 1987)、加賀山第2地点遺跡(湖西市教育委員会他 1991)で比較的良好な一括資料が見られる。

伊場遺跡群ではⅠ-2期の基準資料に使用した祭祀遺構関係の一括資料のほかに、Ⅱ-1・2期に該当する伊場遺跡竈穴住居跡(KD12・14)の一括資料、Ⅱ-3～4期については伊場・梶子遺跡の大溝中の一括性のない資料、Ⅲ-1期では梶子遺跡竈穴住居跡(SB01)出土の良好な一括資料が知られている。これらの資料群から見るとⅡ-1・2段階については、何れも中遠編年とほぼ同じ型式群の土器から構成されていることが分かる。Ⅱ-3・4期の資料群についてもほぼ同じ内容の型式群からなるが、土師器の坏・模倣坏類と高坏類の確認数が少ないこと、36の端部摘み上げ口縁の伊勢型?長胴甕も含むため、東三河からの影響も見られる地域である。また、Ⅲ-1期でも土師器の坏・模倣坏類・高坏類がほとんど確認されなくなり、40～43の長胴小型・台付甕は中遠と同一の型式で構成されるが、39の甕に口縁部肥厚帯をもつ折返口縁状の甕が存在する地域色(西遠型?)が存在し、この種の甕型式も折返口縁の甕がⅡ-4期まで残る三河からの影響で考えたい。

都田川流域の遺跡群では、主にⅡ-3～Ⅲ-1期の竈穴住居跡から出土した一括資料を中心としてその型式内容が判明しているが、Ⅱ-1・2期の良好な資料は確認されていない。浜松市南部の様相とほぼ同じく、Ⅱ-3・4期では、土師器の坏・模倣坏類と高坏類の確認数が少ないこと、48のように大きく外反する口縁をもつ東三河型長胴甕に類似した型式が見られ、Ⅲ-1期でも土師器の坏・模倣坏類・高坏類がほとんど見られなくなり、55・56・58～61の蓋、鍋、長胴甕は中遠と同一の型式で構成されるが、57の甕に口縁部肥厚帯をもつ折返口縁状の甕が存在し、浜松市南部と同じ地域色(西遠型?)となる事は明らかである。

湖西市域でもⅡ-4～Ⅲ-1期の西笠子遺跡竈穴住居跡からの良好な一括資料が出土している。1号住居の11～13のⅢ-1期の長胴甕・鍋類の平底化は確実と思われるが、Ⅱ-4期の2・4・6の資料を見ると浜松市南部域の東三河的傾向がさらに強まり、土師器の坏・高坏類はほとんど確認されず模倣坏も全く存在しない。長胴甕・台付甕の4・6は外反口縁の東三河型、甕も2の寸胴形態で胴部下半が押れる東三河型のもので構成されるため、ほとんど東三河の様式圏に入っても良い地域である。

東遠江の菊川流域では、古墳時代後期集落の調査例が少ないため後半期土器の様相はあまり明らかではないが、菊川町の豆尻Ⅱ遺跡と原段Ⅰ遺跡(菊川町教育委員会他 1988、菊川町教育委員会 1989)で、Ⅱ-1～Ⅲ-1期の資料が出土しており、とくに原段Ⅰ遺跡の竈穴住居SB1(62～69、Ⅱ-1・2期)、SB2(70～76、Ⅱ-3・4期)、SB3(77～81、Ⅲ-1期)出土資料が一括性が高く良好な資料である。中遠で確認された全型式との比較はできないが、Ⅱ-3・4期は76の長胴甕に中遠と口



第243圖 古墳時代後半期土器隣接地域（西・東遼江）參考編年図1

緑部・胴部は同形態である平底長胴甕、Ⅲ-1期で78・81の西・中遠では見られない同形態の平底長胴甕、79の外反口縁の駿河型甕、77の外反口縁の駿河型の無蓋模倣坏身などが出土しているの、駿河からの影響が強く見られる型式や東遠独自の地域色も見られる。しかし、東遠では駿河の最大の特徴である駿河型甕（駿東型甕）は主要型式とならないし、中遠の長胴甕D・C類や坏・高坏類も確認されるため、概ね中遠と同一様式圏で捉えられる地域である。

以上の西・東遠江の資料群から判断すると、Ⅱ-1～Ⅲ-1期を通じて、湖西地域を除く西遠江～東遠地域までは若干の型式に隣接地域のもが含まれたり独自の地域色も存在するが、ほぼ同一様式圏に含まれると考えられる。ただし、湖西地域は東三河と同一様式圏に含まれる可能性が高い。また、中遠でもⅢ-3・4期の様相は不明であり、遠江全域に広げて検討しても古墳・横穴墓以外の集落遺跡出土の良好な一括資料に恵まれていないので、確実な様式内容は掴めていないのが現状である。

東三河の様相（第244図） 東三河の5世紀後半～7世紀初頭の土師器編年については、すでに小林久彦氏により編年案が提示されている（小林久彦 1990）。小林氏により提示された一括性の高い資料と、小林氏は使用していない資料で一括性は低い東三河での様式内容を知るうえで重要な土器群を出土した遺跡の資料を加えて、さらに小林氏の使用した湖西地域の土器を除外して、中遠編年と比較できるようにしたのが第244図である。ちなみに、小林氏編年と中遠編年の並行関係を求めると提示された須恵器編年との並行関係から、東三河Ⅰ期は遠江見性寺Ⅱ-2式（Ⅳ期-2）、東三河Ⅱ期はⅠ-1期、東三河Ⅲ期はⅠ-2期古相、東三河Ⅳ期はⅠ-2期新相、東三河Ⅴ期はⅡ-1期、東三河Ⅵ期はⅡ-2期、東三河Ⅶ期はⅡ-3・4期、東三河Ⅷ期はⅢ-1期となる。資料の出典は、一宮町宮沢遺跡遺物集積U-1（1・2・4・6・7、一宮町教育委員会 1989）、豊川市堂前遺跡SD-1（3・5、豊川市教育委員会 1987）、渥美町青山貝塚遺跡竊穴住居（8～18、渥美町教育委員会 1988）、田原町山崎遺跡（19～27・32・39～41・44・45・48・49・56・62、田原町教育委員会 1991・1993、出典以下同じ）、豊橋市水神古窯（28、豊橋市教育委員会 1987）、豊橋市見丁塚遺跡SB1（60、豊橋市教育委員会 1990、出典以下同じ）、同SB2（29～31・34・36・37）、同SB4（57～59）、同SB7（61）、豊橋市大海津遺跡1号住居？と付近包含層（33・35、小林 1990と同じ）、豊橋市白山Ⅱ遺跡SK1（50・51・55、豊橋市教育委員会 1988、出典以下同じ）、同西屋敷土器集積4・5（42・46・47）、豊川市山西遺跡自然流路（38・43・52～54、豊川市教育委員会 1988）、西尾市八ツ両山北部遺跡02DSB23（63・64・65、西尾市教育委員会 1992、出典以下同じ）、同02ASB02（66）、同03DSB23（66）、同03BSB24（67）である。

東三河での後半期土師器の端緒は、Ⅳ-2並行期の4の高坏A-1類と1の丸底の小形埴A-1類を見る限り見性寺Ⅱ-2式のものと同型式のものを含むが、甕は7の球形胴の甕が長胴化したような長胴の甕A-1類、甕も5の外反口縁の砲弾型形態の甕が出現している段階である。よって、東三河では遠江より1段階古い時期から、後半期大様式に移行していることが分かる。おそらく畿内との比較から伊勢湾岸での後半期土師器の出現を考えるうえで重要な資料群になるだろう。ただし、後述する畿内圏との比較では、長胴の甕A-1類は前段階の球形胴の甕からの変化、甕も砲弾型の形態で畿内の甕に祖形は求められるが、口縁部形態は鍋A類に近いもので、東三河での変容も大きなものがあり、単純に畿内との型式比較ができない。

東三河でも須恵器の坏・高坏類が安定的に出現するのは、8のように遠江と同じくⅠ-1並行期（TK208）からで、19のⅠ-2新相並行期（TK47）、29のⅡ-1並行期（MT15）、38のⅡ-4並行期（TK209）、57のⅢ-1並行期（TK217古相？）などが安定普及時期の須恵器である。

土師器の壺類は遠江と異なり各段階でほとんど確認されないが、Ⅳ-2～Ⅰ-1並行期での3と11の壺A-1・2類は遠江壺T類に関係するもの、Ⅱ-1並行期で伊勢型の壺と類似する12の口縁部摘み上げ手法の見られる広口の壺B-1類、Ⅱ-1・2並行期の31の直立口縁の広口壺C-1類、43

の遠江壺X類と関係のありそうな広口の外反口縁の壺C-2類などが見られる。壺B-1類は遠江では存在しない型式である。東三河では各段階を通じて土師器の壺に対する出現率は低く、須恵器の壺類が普及していた結果とも考えられる。

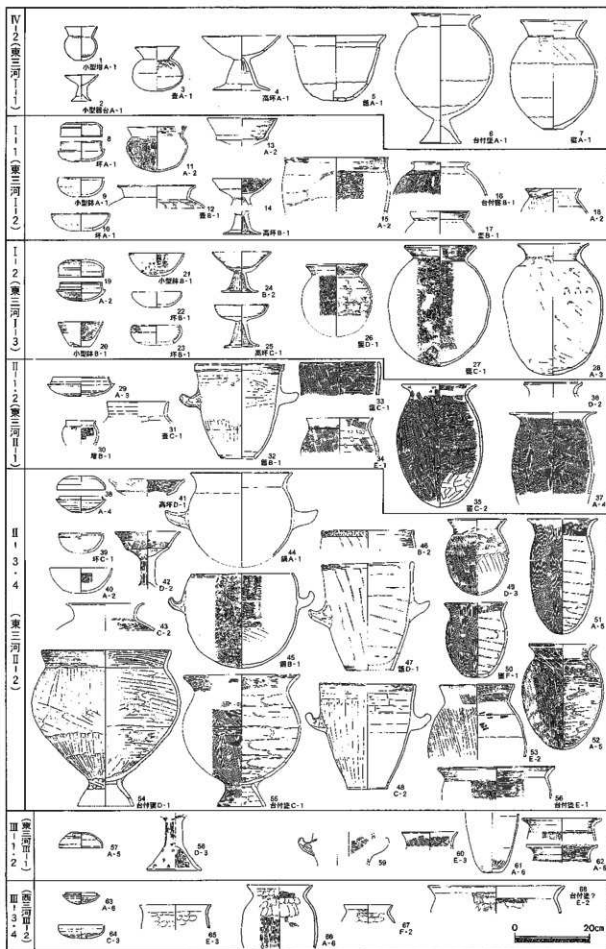
坏類も各段階を通じてほとんど確認されないが、僅かにI-1並行期で10の口縁部を直立させる丸底の遠江坏B類、I-2並行期で22・23の内彎口縁の丸底坏B-1類は遠江坏A-1類、II-3・4並行期で40の丸底の遠江坏B類と同型式のものが存在している。また、39はII-4期の遠江無蓋模倣坏に類似するものか。9の小型鉢A-1類は遠江小型鉢F-1類、I-2並行期の20・21の小型鉢C-1類も、遠江小型鉢F-1類に対応する型式だろう。高坏はI-1・2並行期で短脚化の見えるB-1類とB-2類は遠江高坏I類に対する変化と対応するが、13の高坏の坏部は見性寺IV-2式高坏H類と同型式、25の丸底坏を取り付けたような坏部を持つ高坏C-1類は、遠江ではあまり見ない型式である。前者は混入品で、後者はむしろ布留4式新相からの系譜をもつと考えられる布留式起源の東三河型？高坏と思われる。II-3・4並行期に41・42の有縁坏部をもつ長脚になる高坏D-1類とD-2類、さらにIII-1並行期のD-3類は、遠江高坏K類に対応する型式と思われる。しかし、D-2・3類の柱状脚化は遠江では見られない変化で、東三河特有の型式となる。

甕類はI-1・2並行期に散見される16の字田型甕、各段階を通じて18・28・37・51・52の口縁部の外反度の強い口縁を持つ三河型長胴甕A-2～5類への変化、50の同型式の小型の甕F-1類、27・35・36の口縁端部を摘み上げ技法の見える伊勢型長胴甕C-1～3類、26・49の伊勢型の小型の甕D-1・2類、34・53の遠江長胴甕C類に関係しそうな直立気味口縁の甕E-1・2類が確認されている。また、II-3・4並行期には遠江と同じく大型の台付甕で54の遠江の台付甕E-5類に関係しそうな遠江型の台付甕D-1類、口縁部を強く外反させる東三河型の台付甕C-1類、口縁端部を摘み上げる東三河型（伊勢湾型？）の台付甕E-1類が見られる。遠江型に近い甕E-2類と台付甕D-1類は中途での口縁端部の摘み上げは観察されず、遠江型といえども東三河独特の変容を遂げている。東三河型の外反口縁の長胴甕A類も、A-2・3類までは遠江長胴甕A類と類似型式になるが、II-1・2並行期のA-4類以降は外反度が増す口縁に変化し遠江と異なる独自の型式となる。III-1並行期の長胴甕の変化は、東三河で分かる資料がほとんどないが、62の口縁部形態は遠江長胴甕C・D類と同じ特徴をもち、61の遠江長胴甕C・D類と同じく小さな底部と胴部下半に明瞭な接合痕1ヶ所をもつ技法が見られ、遠江と同型式の遠江型の長胴甕が存在する可能性も指摘しうる。

飯類は15の口縁部を外反させる東三河型、32・46の折り返し口縁になる遠江飯A-3・4類に関係したB-1・2類、遠江のII-1・2期では見られない、33の単純口縁の飯C-1類と、48の遠江のII-3期に見られる飯A-5類に類似する型式の飯C-2類、47の寸胴で口縁端部に面を作り底部が2穴になる伊勢型飯のD-1類などが確認でき、多様な系譜をもつ型式が成立している。

鍋類は遠江と同じくII-3・4並行期に成立するらしく、44の遠江鍋A-2類と同型式の鍋A-1類、遠江では見られない伊勢型長胴甕や飯と類似するハケメ調整と口縁部の作りが類似する45の東三河型（伊勢型？）の鍋B-1類が見られる。

このように東三河の後半期土器様式の特徴をまとめると、①成立が遠江と比べると1段階先行する可能性が高く、②遠江と共通する型式も多く見られるが、土師器坏・高坏類が欠落するし、稀にある高坏も東三河での変容型式となるし、③土師器壺類も少なく遠江では見られない型式のものを含み、④飯・台付甕・長胴甕・鍋類も遠江と共通する型式もあるが、ほとんど東三河での変容型式となる。見性寺II-2式～I-2並行期では伊勢湾岸に特有な字田型甕、伊勢型長胴甕、II-1～4並行期でも東三河型長胴甕、東三河型台付甕と、伊勢型長胴甕、伊勢型飯、伊勢型？台付甕が主要型式として確認できるなど、東三河は明らかに遠江と異なる様式圏に含まれていることが分かる。III-1～4並行期については、遠江でも東三河と同様に集落遺跡で土師器の坏・高坏類の出現率が低下し、長胴甕も



第244圖 古墳時代後半期土器隣接地域（東三河）參考編年圖2

遠江と類似したものがみられるようになるので、Ⅲ-1~4並行期では東三河と遠江は同一様式に属するようになる可能性もある。しかし、西三河の西尾市八ツ面北部遺跡の7世紀代に編年されている資料(松井直樹 1992)を見ると、遠江と共通型式の平底の鍋類他、63・64のⅢ-3・4期並行の須恵器と共に、65・66の口縁部が大きく外反し胴部外面のナデ調整が卓越する三河型?長胴甕と、68の台付甕が存在しており、西三河が東三河と同じ様相ならば東三河と遠江とは別様式になることは確実だろう。また、東三河での大きな様式の変化は、遠江と同じく東三河型の長胴甕の成立するⅡ-1並行期と、平底長胴甕の成立するⅢ-1並行期にあると考えられるが、それを証明する他の土器型式の内容が残念ながら捉えられないので、確実な大きな様式の変化として提示できない。

駿河の様相(第245図) 駿河における主な後半期土器編年は、西部でⅠ-1~Ⅱ-2並行期は山口和夫氏の赤焼土器編年(山口和夫 1987)、Ⅱ-3~Ⅲ-4並行期までは大塚淑夫氏の古墳出土の坏・高坏類を中心とした編年(大塚淑夫 1985)、東部のⅡ-1~Ⅲ-4並行期は山本恵一氏の編年(山本恵一 1989)があげられる。第245図に示した駿河西部の編年図は、Ⅰ-1~Ⅱ-2期までは山口和大氏により示された、焼津市城遺跡の一括性の高い資料をもとに、Ⅱ-3期以降は一括資料とはならないが流路の遺物集から見られ一定の型式変化の傾向が出せた静岡市大谷川遺跡の資料を基に、大塚氏が示した古墳出土土器を補足資料とし編年を試みた。ちなみに、各氏の編年で示された須恵器との並行関係から遠江編年との並行関係を求めると、西部の山口編年Ⅶ期2段階(TK208)は遠江Ⅰ-1期、山口編年Ⅶ期3段階(TK23)は遠江Ⅰ-2期古相、山口編年Ⅶ期4段階(TK47)は遠江Ⅰ-2期新相、山口編年Ⅶ期1段階(MT15)は遠江Ⅱ-1期、山口編年Ⅶ期2段階(TK10)は遠江Ⅱ-2期、大塚編年Ⅵ段階(TK47~TK43)は遠江Ⅰ-2期新相~Ⅱ-3期、大塚編年Ⅶ段階(TK209)は遠江Ⅱ-4期、大塚編年Ⅷ段階(TK217~48)は遠江Ⅲ-1~4期、山本編年1期(MT15~TK10?)は遠江Ⅱ-1・2、山本編年2期(TK43~209?)は遠江Ⅱ-3・4期、山本編年3期(TK217古~中相?)は遠江Ⅲ-1・2期、山本編年4期(TK217新相?)は遠江Ⅲ-3・4期となる。提示資料は道場田・小川城遺跡CK04地点ST11(1~12、焼津市教育委員会 1987、出典は宮之腰4号住居を除き道下遺跡まで同じ)、宮之腰遺跡SX01(13~22)、同4号住居(23~25・28~33、原川宏 1985)、道下遺跡SG10(26・27・31)、同SX01(34~43)、道添遺跡ST24(50・55、焼津市教育委員会他 1987、出典以下同じ)、同ST40(44・45・47~49・54・56~58)、同包含層(46・51~53)、大谷川遺跡水上7区SR810(59・61~67・70・71、静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988、出典以下同じ)、同宮川3区SX478(72・74~79・84・86・88・89)、同宮川3区SX477(83・85・87)、同宮川4区SR55(82)、同宮川4区SR55(90~99)、島田市端田1号墳(60・68・69、島田市教育委員会 1978)、清水市東久佐岐5号墳(73・80、清水市教育委員会 1979)、静岡市伊庄横穴6号墳(81、静岡市教育委員会 1963)、藤枝市高草19号墳(100~108、藤枝市教育委員会他 1981)である。

駿河西部での後半期様式の確立する時期は、1のTK208並行の須恵器が伴ったⅠ-1並行期の基準資料にあげた道場田・小川城遺跡CK04地点ST11出土土器である。9は遠江ⅤV類の駿河でのかなり変容した型式の可能性のある直立外反口縁の球形胴甕B-1類、同じく8の遠江ⅤW類の変容型式と思われる甕A-1類、遠江では小数量型式である2の小さな平底の内彎口縁の形態の坏A-1類、3の平底で直立口縁の形態の坏B-1類、遠江と類似する型式の4の丸底の内彎口縁の形態の坏C-1類、5の丸底で直立口縁の形態の坏D-1類が存在する。6の遠江小型鉢F類の変容型式と思われる小型鉢A-1類、遠江ではあまり見ない坏D-1類に脚を付けたような高坏A-1類がある。

遠江の台付甕C類に対応しそうな台付甕A-1類、脚は付かないが遠江見性寺Ⅱ-2式の大型の台付甕E-2類に系譜の求められそうな大型の広口甕A-1類、12の遠江見性寺Ⅱ-2式の球形胴甕A-3類が長胴化したような甕A-1類が出現している。しかし、甕の存在は確認されない。

これらの資料からは甕の確認はできないが、土師器の坏A～D類と高坏A類が突如新・主要型式として出現し、在来の甕も長嗣化する。この変化は遠江での見性寺様式と遠江Ⅰ－1期の間に見られた前半期と後半期土器の大様式の変化に対応すると考えられるので、駿河西部でも本段階の資料をもって後半期土器様式に変換していると認定したい。

ただし、山口氏が山口Ⅶ期1段階の基準資料としてあげた道場田・小川城遺跡CK18地点SX01・02・03出土資料の該当時期は供伴須恵器がないため確定的な評価は与えられないが、SX01・02の資料は道場田・小川城CK04地点ST11出土資料よりも新しい型式の土器で組成され、SX03出土の長胴甕のうち平底の甕は底部が小さいく甕A－2類に近い形態、小型鉢もA－2類に近い形態、籠目付の丸底長胴甕は甕B－1類に近い形態であることから、むしろ山口Ⅶ期3段階（Ⅰ－2古相並行期）の型式内容を良好に示す土器群ではないかと推測される。ともあれ、山口氏の指摘通り須恵器が伴っていないので、今後Ⅶ期3段階の一括資料の増加をまって再検討されるべき資料だろう。

各段階の伴出須恵器はⅠ－2並行期では13のTK23並行、23のTK47並行、34のMT15並行、44のTK10新相並行、59のTK43並行、72のTK209並行、90のTK217古相？並行の特徴を示すものが伴うが、大谷川遺跡の資料は中心時期を現すだけで他時期の混入資料も少なからず含んでいる。

土師器の壺類はⅠ－1並行期で成立した駿河型の壺B類は、Ⅰ－2新相並行期で30の口縁が直立気味の型式、Ⅱ－2並行期で56の口縁が外傾する型式が確認できるが、Ⅱ－3段階以降は確認されなくなる。各段階を通じて、口縁以外あまり変化がない型式である。直口壺のA－1類は、Ⅰ－2古相並行期で20の扁平な胴部と外反口縁への変化、Ⅰ－2新相並行期では29の短く外傾した口縁から、Ⅱ－1並行期では42の直立気味の口縁と長嗣化する大きな変化が見られ、54の外反口縁、70の小型化、83のさらなる小型化が見られ、各段階一貫として見られる主要型式である。関連型式の遠江壺W類とは全く異なる型式変化をしており、駿河特有の壺の型式変化である。他の壺類としてⅠ－2古相並行期の21の複合口縁の壺C－1類と、55のⅡ－2新相並行期に突如として現れる内彎口縁の壺C－1類は、遠江には存在しないので駿河独自の型式と考えられる。

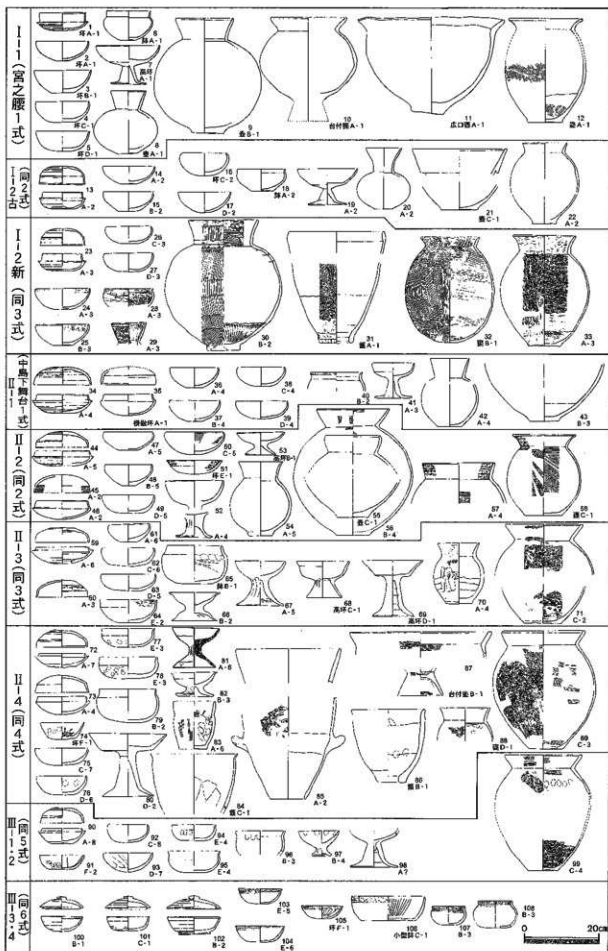
坏類はⅠ－1並行期から小さな平底の付くA・B類は、遠江では主要型式とはならず遠江Ⅰ－2期の一時期しか見られない型式である。駿河西部ではⅠ－1並行期はA－1類が主要型式で、B－1・C－1・D－1類は少数型式、Ⅰ－2古相並行期でもA－2類が主要型式であるが、B－2類が増加しC－2・D－2類は少数型式、Ⅰ－2新相並行期となると検討資料数が少なく確定的ではないが、A－3類とB－3類は減少に転じ、C－3・D－3類は増加傾向になる。Ⅱ－1並行期となるとC－4類が主要型式となり、一定量B－4類が伴いA－4・B－4類は少数型式に転落し、Ⅱ－2並行期でも同様の傾向、Ⅱ－3並行期ではC－6・D－6類が主要型式となり、B－6類は消滅しA－6類も小型品を除いてほとんど消滅し、Ⅱ－4並行期となるとC－6・D－6類が主要型式というより、無蓋の模倣坏身E－3類がかなり増加し各個体数はほぼ半数の出現率で存在しA－6類は消滅する。Ⅲ－1・2並行期になると無蓋の模倣坏身E－4類が主要型式となり、C－8・D－8類は残存者がごく小型型式に転落する過程を辿る。これらの坏A～D類は各段階ともほとんど型式変化はなく、口径もⅠ－1～Ⅱ－3並行期までは、14～13cm代が中心で、稀に15と12cm代のものが伴う構成である。しかし、Ⅱ－4並行期となると13～12cm代が中心で、稀に14と11cm代のものが伴うように口径の縮小化が始まり、Ⅲ－1・2並行期では口径の縮小化が更に進み、11～10cm代が中心で、稀に12と9cm代のものが伴う変化を示す変化は、須恵器の坏身・蓋の小型化現象と連動していると考えられるし、遠江の坏・模倣坏類でも同じ変化をする。模倣坏は35・45・46のように遠江の模倣坏身・蓋と同型式になるものがⅡ－1・2並行期までみられるが、Ⅱ－3・4並行期では古墳からの出土が見られる程度で、集落遺跡からの出土は減少する。注目されるのはⅡ－1並行期の道下遺跡SX01の資料を検討すると、34の模倣坏蓋が身に対して多く出土していることから、模倣坏蓋と同形態の無蓋模倣坏身の出現を見て

いることは確実であるが、型的には遠江と同様に区別がつかない。Ⅱ-2並行期になっても区別の付かないものが多数を占めるが、51のように明らかに口縁が開き無蓋模倣坏身と認識できる坏E-1類も出現し、Ⅱ-3並行期で遠江と駿河西部で良く見られる無蓋模倣坏E-2類から、77・78・94・95・103・104のように口縁部を外反させ、さらに小型化する変化を見せ、駿河西部独自の型式（駿河西部型坏）となる坏E-3・4類が出現し、Ⅱ-4～Ⅲ-4並行期ではこの坏E類が主要型式になる。

小型鉢はⅠ-1並行期のA-1類は、Ⅰ-2並行期で扁平化するA-2類からA-3類への変化を見せて消滅する。無蓋模倣坏身の増加傾向の見たⅡ-3並行期以降になると、新形式の小型鉢B-1類が出現し、無蓋模倣坏身のE類と同様に小型化への変化をしながらⅢ-1・2期まで主要型式として存続している。なお、この小型鉢類は遠江小型鉢Ⅰ類に対応し、可能性としてはⅡ-2期にある遠江小型鉢H-1類を祖形とすることが考えられる。この仮説が正しいならば、少数型式ではあるが遠江のⅡ-3期にも駿河小型鉢B-1類に対応するH類が存在している可能性が高い。

高坏は7のようなⅠ-1並行期から坏B類に脚を付けたような坏部の稜があまり明瞭でない駿河独特のものが存在し、Ⅰ-2期になると遠江高坏Ⅰ類と同じく19のように低脚化したA-2類として存在する。Ⅱ-1並行期では41の脚・坏部ともに開かなく小型化したA-3類へと大きく変化し、Ⅱ-2並行期でさらに低脚化したA-4類、Ⅱ-3並行期では69のように遠江K-1類と同型式の高坏D-1類の出現に影響され長脚化したA-5類へ変化し、Ⅱ-4並行期では確認数が減少しつつ低脚化に転じたA-6類への変化が見られる。Ⅲ-1・2並行期には98のA類らしいものも残存するが、ほとんど消滅する。もう一つの駿河固有型式の高坏としては、53のⅡ-2期から見られる低脚でどちらかと言うと坏E-1類を坏部にするようなB-1類が存在している。あるいは遠江高坏J類の出現時期と一致するため関連しあう型式かとも思われ、遠江高坏J類は遠江小型鉢F類との結合、駿河型の高坏B類は駿河型の坏E類との結合によって生まれたと推測しておきたい。さて、この高坏B類は66のⅡ-3並行期では口縁・脚部を外反させる変化を見せるB-2類、Ⅱ-4並行期で82の低脚化したB-3類、Ⅲ-1・2並行期で97の小型化したB-4類が存在する。各段階いずれも少数型式ではあるが、一貫として確認できる安定型式である。69の遠江高坏K-1類と同型式の高坏D-1類、68の遠江高坏J-2類と同型式の高坏C-1類、80の遠江高坏K-2類と同型式の高坏D-2類が存在する。この遠江型の高坏群は駿河では少数型式で、集落遺跡からの出土はなく古墳からの出土品がほとんどであることから、古墳祭祀に特有な型式として駿河西部に導入されている。

甕類はⅠ-1並行期の長胴気味の平底の甕A-1類は、Ⅰ-2古相並行期では口縁が直立気味になり、Ⅰ-2新相並行期で胴部の張りが失われる変化が見られる。Ⅱ-2並行期になると58の球形胴化し外反口縁で端部を肥厚させ面を形成することにより内部に段を設ける所謂駿東型甕の甕C-1類に移行している。この駿河固有型式の甕C類は、Ⅱ-3並行期になると71の外傾口縁のC-2類、Ⅱ-4並行期では89の外傾の口縁が短く直立気味、底部の小型化が見られるようになるC-3類へと変化する。さらに、Ⅲ-1・2並行期では99の前段階とはほとんど変化の見られないC-4類として確認される。このように駿河西部でも、甕C類はⅡ-2～Ⅲ-1・2並行期まで甕の主要型式として存在している。32の長胴丸底の甕B-1類と、40のB-2類は、形態から見て遠江長胴甕A-3・4類と関係している型式と考えられるが、駿河西部では先に述べた籠目丸底長胴甕とともにⅠ-2並行期を中心として一時的に増加する型式の甕で、Ⅱ-1期になるとほとんど消滅すると思われる。また、直立口縁の57の甕も長胴気味の形態になると思われるが、遠江には存在しない型式で駿河でも一時的に少数型式として出現する。82の口縁部から見て駿東型になる小型甕D-1類は、遠江でもⅠ-2～Ⅲ-2期まで一貫として存続している小型甕A～C類の系譜に対応する型式であろう。後述する通り畿内や伊勢湾岸地域でも各地域の型式に妥容した小型甕が必ず見られ、畿内からの長胴甕導入の組成要素の一つになると考えられ注目される型式である。球形胴の駿東型甕地帯の駿河においても小型甕が存在することで、



第245圖 古墳時代後半期土器隣接地域(駿河西部) 參考編年圖3

遠江まで確認される畿内的な長胴甕組成の一致を見る可能性が高まり、駿河地域での小型甕の型式変化と存続時期の解明が待たれる。87の大型の台付甕B-1類は口縁部やハケメ調整は駿東型甕のコピーであるが、明らかに遠江甕E-5類に対応して出現しているものと思われる。駿河東部にはない型式なので、西部での地域色と遠江との交流を考えるうえで重要な型式となろう。

甕は駿河東部と同じく各段階での確認数が少なく、明確な型式変化は追えない。31の口縁部を肥厚させ底部を搾る駿河甕A-1類は、遠江甕A-2類に強く影響を受けている型式と思われる。Ⅱ-4並行期を中心としてある程度明らかとなった甕のパラエティを見ると、並行関係はずれるが85の単純口縁で胴部下半を搾る形態のA-2類は、遠江Ⅱ-3期の遠江甕A-5類に対応するもの、84の口縁部が外反し把手の付かないC-1類は駿河固有の型式、86の砲弾型の小型甕はこれまた並行関係が全く異なりⅡ-1期の遠江甕B-1類に類似するものであるため、駿河固有の型式と考えられる。

ここで、駿河西部と山本編年に示された東部との比較をする。冒頭で述べた通り、駿河東部では遠江ほど段階の細部化が進んでいない傾向はあるが、概ね様式内容の比較検討は可能と思われる。

壺類についてはⅡ-1並行期の駿河西部壺A-3類に対応する、山本1期の長頸壇とした直口壺は駿河西部の短口縁のものとは全く異なり、むしろ遠江壺W-2・3類に近い形態である。東部ではこれ以外の壺類の存在は今のところ確認できていない。

坏類は山本1~2期(遠江Ⅱ-1~Ⅱ-4並行期)から比較的遠江・駿河とそれほど違わない形態の模倣坏身・蓋も見られるが、Ⅱ-1・2並行期では駿河西部ではあまり見られない無蓋模倣坏身と認識しうる外反口縁の坏E-1類が、東部では山本1~2期を通じて比較的安定的に出現しているようである。駿河西部型とした坏E-2~4類に対応するものは山本1期に多少見られる程度で、西部で中心時期となる山本2~4期では類似型式はほとんど存在していない。また、これら模倣坏以外の坏類は山本1期では、平底の内彎口縁の坏A類に対応する型式、山本2期に丸底の坏C・D類に対応する型式、山本3期でも小型化した坏C・D類に対応する型式が存在するので、模倣坏については東部と西部の間には若干の地域色が存在するが、坏類はほぼ同じ型式内容で変化しているといえる。しかし、調整手法を見ると、駿河西部の坏と模倣坏類の多くは口縁ヨコナデ胴部指頭ナデとなり、遠江の坏・模倣坏類とはほぼ同じ調整手法を採用するのに対して、東部の坏・模倣坏類は入念なミガキ調整や赤彩色が施されるものが多数を占めるので、調整手法に大きな地域差が見いだされる。これは、高坏類の調整手法にも同様の傾向が看守される。高坏類は駿河西部高坏A類に対応するものは山本1~2期でも存在するが、駿河西部のⅡ-3並行期で見られた長脚のA-5類への変化は、同並行期の山本2期では見られない。また、山本1期以前からの系譜が考えられ山本1~2期に存続する坏部に明確な稜の入る短脚の高坏は、Ⅱ-1~4並行期を通じて駿河西部では存在していない。無蓋模倣坏E類に脚を付けたような駿河西部高坏B類に対応する型式は東部にも存在するが、坏部の稜がより明確で無蓋模倣坏の有脚化による高坏の発生現象を説明するうえで、東部のものを見たほうがより容易に説明がつく。またこの型式の発生は、遠江で少数型式として見られる遠江有蓋模倣の高坏L-1類と類似する型式の高坏が、駿河東部では主要型式として確認できることと連動していると思われる。このように駿河東部での高坏の様相は、駿河西部高坏A類と共通型式である高坏については、調整や脚部の変化に地域色が確認された。有蓋高坏と無・有蓋模倣坏の高坏2種は、駿河西部ではほとんど見られない型式であるため、これらを駿河東部型高坏として地域色が認識できる。

甕類は、駿河東部では山本1期から既に口縁部に肥厚帯をもつ駿東型甕の存在が確認されているので、西部でも様相の判明しないⅡ-1並行期から駿東型甕が出現している可能性は高い。山本1~3期での駿東型甕と駿河西部の甕C類の形態の型式変化は、ほぼ同じものであるので同一型式と認定しうるものである。この駿東型甕の名称は、従前から駿河東部の奈良時代前半期の球形胴の甕に使用されていたもので、近年の山本氏の研究の成果(山本恵一 1988)からその初現が6世紀前半まで遡る事が

判明してきている。しかしながら、今回の駿河西部の該期の編年でも明らかになったように、6世紀～7世紀前半代まで駿河西部でも駿東型甕の存在が一貫として確認できるため、この駿河に分布する球形胴の甕については、駿東型甕の名称ではなく「駿河型甕」と改称したほうがより適切な用語として使用できるのではないかとと思われる、再考されることを期待する。

甕については山本氏も指摘していることであるが、東部でも確認数が少なく明確な型式変化が追えていない。山本2～3期に示された甕を見ると、底部が壊れ口縁端部に面を作ったり、外反口縁のものが知られている。駿河西部の甕C-1類に対応するものはあるが、遠江的な駿河西部の甕A-2類は存在していない。よって甕には東部と西部に若干の地域色があるが、外反口縁の甕については共通型式で駿河型甕といっても良いものであろう。

駿河西部でのⅢ-3・4並行期の様相については、古墳出土の少数の土師器の坏類でしか確認できないため、即東部の山本氏の編年との比較となろうが、Ⅲ-3・4並行期にあたる山本4期の内容も駿河西部と同様に坏類と駿河型甕の様相以外はほとんど分かっていない。大塚氏により示された駿河西部のⅢ-3・4期の須恵器に供伴する坏・鉢類を出土した藤枝市高草18号墳や19号墳の一括性のある資料を見る限り、坏E類は前段階と同様に小型化が進み口縁の外反がさらに小さく変化した11～10cm代の坏E-5類が中心ではあるが、大型化に転じたE-6類への変化も確認できる。また106は一見坏E類に似るが口径19cm代と大型化し内面に暗文状のミガキが調整が施され畿内からの影響が見られる坏F-1類も少数出土している。甕類については駿河西部においても遠江の甕C・D類を主要型式として採用するのか、東部と同じく底径の小型化が進んだ駿河型甕B類が主要型式となるかは判明していない。ただし、遠江のⅢ-2～4期で確認された在地様式の坏・高坏類が消滅し代わって畿内系の坏・高坏類が登場する大きな変化が見られるのに対して、駿河西部では在来の坏E類が主体で畿内からの搬入品ないし模倣品である飛鳥様式坏C類、在地の坏E類に変化を与え内面暗文の見られる坏F-1類や小型鉢C-1類が少数出現する程度である。よって、甕類も東部と同じような駿河型甕で組成されていると予測している。駿河西部で土師器の坏・甕類の様式が大きく変わるの、藤枝市御子ヶ谷遺跡や静岡市内荒遺跡（藤枝市教育委員会 1981、静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988）のような本格的な官衙遺跡が成立する8世紀前半代の律令様式の須恵期の坏や高坏類と共に、遠江型の長胴甕が出現する時期であろう。このように駿河西部のⅢ-3・4並行期で検討できた型式は坏・小型鉢類が中心で、甕類やその他の器種の型式変化については全く判明していないので、様式の比較について論ずるは時期早急とも考えられるが、坏・小型鉢類を見る限り駿河西部におけるⅢ-3・4並行期の様式も遠江とは別様式となる可能性は高い。

様式の設定 以上いささか冗長過ぎるくらい、遠江での様式設定に向けた隣接地域との土器様相の比較を行ってきた。まず、Ⅰ期の段階では東三河・遠江・西駿河で同一か相互の影響の認められる土器型式の存在も確認できたが、基本的にはそれぞれ別様式になると考えた。東三河の様式は宇田型甕の甕B類が存在し、赤塚氏により提唱されている尾張の宇田様式と一致する内容もあるが、口縁端部積み上げの特徴の見える伊勢型長胴甕の甕C類や、土師器の坏・高坏類の型式内容と東三河型の甕A類の存在状況などは尾張ではほとんど判明していない。赤塚氏の宇田様式は甕の型式変化に限るもので、他の須恵器を含んだ全土器型式の変化内容が明らかにされていないため、東三河と尾張・伊勢との様式比較はなんともいえない現状であるが、甕類を中心に考えると東三河独自の様式が存在している可能性は高い。しかし、西三河との比較、東三河での該期の資料不足の感は拭えないうえ、今回遠江でのⅠ-2期の詳細な様式内容を提示できなかったことから、遠江と東三河の様式内容の比較が確定できない。よって、今回は東三河と遠江でのⅠ期の様式名称の提唱は控え、今後の資料数の充実した遺跡の調査を待ち、検討されることを期待する。

駿河西部のⅠ並行期の様相は山口氏が指摘した明確な一括資料に恵まれ、従来設定されている型式名

(焼津市教育委員会他 1964)を採用して、宮之腰様式と仮称しⅠ-1並行期を宮之腰1式、Ⅰ-2古相並行期を宮之腰2式、Ⅰ-2新相並行期を宮之腰3式と整理しておきたい。また、駿河東部ではⅠ期並行の良好な一括資料に恵まれていないので、駿河での西部と東部との厳密な様式の比較はできていない現状ではあるが、宮之腰様式に並行しそうな安久遺跡2号河川の資料(三島市教育委員会 1989)を検討すると、高坏や壺類の一部に駿河西部にない型式が存在し地域色も認められるが、宮之腰様式と共通する型式も多数見られるので、概ね同一様式になる可能性は高いと考えている。よって、駿河西部の宮之腰様式と東部のⅠ期の土器群は同一様式名称となることが望まれるため、現段階では宮之腰様式は仮称扱いとし今後東部の研究者との様式名称の調整が測られることを期待する。

Ⅱ～Ⅲ期については東三河・遠江・駿河でそれぞれ異なる様式が成立している可能性が高い。東三河では甌・甕・鍋類に遠江と似た型式のものを少なからず含むが、伊勢湾岸の要素や東三河独自の型式をも大いに保有しているので、東三河独自の様式となる事は明らかである。しかし、各段階の型式組列が今一つ明らかにできないこと、西三河との比較が行えていない現状から、東三河のⅡ～Ⅲ並行期の土器群についても様式名称については保留をしておく。今後の資料増加に期待したい。

遠江と駿河は異なる様式になるのは明らかで、遠江は今回の坂尻遺跡出土資料を中心として様式内容を明らかにしたことから、坂尻様式を提唱する。そして、大きな画期を遠江Ⅱ期とⅢ期の間に認める立場から、遠江Ⅱ期を坂尻Ⅰ式、遠江Ⅲ期を坂尻Ⅱ式と称し、細別様式はⅡ-1期を坂尻Ⅰ-1式、Ⅱ-2期を坂尻Ⅰ-2式、Ⅱ-3期を坂尻Ⅰ-3式、Ⅱ-4期を坂尻Ⅰ-4式、Ⅲ-1期を坂尻Ⅱ-1式、Ⅲ-2期を坂尻Ⅱ-2式とし、様式内容の今一つ分からないⅢ-3・4期についてもそれぞれ坂尻Ⅱ-3・4式に対応させておくと、将来坂尻様式に確実に含めるかどうか再検討したい。

駿河でのⅡ～Ⅲ並行期の様式内容も東部と西部でかなりの地域色を認めたが、遠江とは別様式、駿河西・東部で同一様式と認識できたので、駿河東部の該期の編年を進めてきている山本恵一氏の提案から、Ⅱ期並行の土器型式の変化が同一遺跡の一括資料で最も追える三島市中島下舞台遺跡(三島市教育委員会 1983)出土の資料を重視し、中島下舞台様式と提唱する。坂尻様式に見られた遠江ⅡとⅢ期間に並行する土器様式の大きな画期は、中島下舞台様式では認められないので、大様式は設定せずに細別様式をつけることに留めた。よって、駿河Ⅱ-1並行期を中島下舞台1式、駿河Ⅱ-2並行期を中島下舞台2式、駿河Ⅱ-3並行期を中島下舞台3式、駿河Ⅱ-4並行期を中島下舞台4式、駿河Ⅲ-1・2並行期を中島下舞台5式、駿河Ⅲ-3・4並行期を中島下舞台6式と整理する。しかし、駿河西部では中島下舞台6式の内容は坏・小型鉢類以外は型式内容は不明、駿河東部では中島下舞台1・2式、中島下舞台3・4式の細別段階が設定できていない。今後の検討課題である。

以上のように今回や歴代の坂尻遺跡調査の出土資料から、遠江の6～7世紀代の土師器様式に坂尻様式なる名称を与えることができた。最後に、冒頭でも述べた通り畿内でも編年が確立している5世紀後半から7世紀代の土師器の様相については近江の植田氏の編年、7世紀代では坏・高坏類中心となるが西弘海氏を中心とする奈良国立文化財研究所の飛鳥地域の都城土師器編年を代表させて比較検討をし、凡その暦年代を示して今回の後半期土器様式編年のまとめとしたい。

近江・畿内との比較 植田氏に示された古墳時代土師器の近江編年は、庄内・布留様式並行期まで含む大系的な古墳時代の土師器編年であるが、今回は5世紀後半から7世紀代の土師器にあたる近江古墳7～12様式について比較検討する。植田氏の編年にも須恵器の対照表が付けられているので、須恵器を介しての凡その並行関係が掴める。すなわち、近江7様式はTK216・208並行で遠江見性寺Ⅱ-2式～遠江後半期土器Ⅰ-1期に並行、近江8様式はTK23・47並行で遠江Ⅰ-2期に並行、近江9様式はMT15並行で遠江坂尻Ⅰ-1式に並行、近江10様式はTK10古相並行で遠江坂尻Ⅰ-2式古相、近江11様式はTK10新相～TK43並行で遠江坂尻Ⅰ-2式新相～Ⅰ-3式に並行、近江11様式はTK209・217並行で遠江坂尻Ⅰ-4式～Ⅱ-2式に並行関係が求められる。

関連し合う型式をあげていくと、坏類では遠江丸底坏B類に関係しそうな近江坏A類と、遠江小型鉢F・4類に関係する近江坏B類が近江7様式から見られ、近江坏A類は12様式まで、近江坏B類は近江10～11様式まで存続するようで、概ね遠江型式の消長関係と一致する。高坏については各地域で独自の型式変化を示すと言えるが、近江6様式の布留式未に見れ近江11様式で消滅する坏部に稜が入り屈曲脚になる近江高坏A4類が、遠江高坏I類の変化と連動しているようである。

壺・埴類は遠江小型埴B類がほぼ遠江I・1期で消えるのに対して、近江小型底壺B類は近江8様式まで残るようである。近江壺C1・c類は遠江壺T類に対応し、存続時期も近江11様式までと遠江とは若干異なる変化をする。形態的には遠江壺W類も含むため、個々の型式細分根拠が気になる。

甕類は近江5～6様式に参入してくる韓式系長胴甕の影響で近江7様式において成立する近江甕B7類、在来の布留甕が長胴化した近江甕B3・c類、小型甕のB5類が出現している。遠江の長胴甕A類は内面ナデ調整で近江甕B7類に対応するが、形態的には布留甕系の近江甕B3・c類に類似する。小型甕の成立も遠江小型甕A類の成立と関連し合うが、遠江での長胴傾向の小型甕A類の成立は今のところI・2期からである。この近江7様式で成立する小型甕は未だ遠江においては未確認なのか、I・1期段階の小型化した球形胴甕との関係で捉えて良いのか今後の検討課題であろう。近江の長胴甕B7類の口縁部形態に注目すると、近江7～9様式でく字状口縁、近江10様式で外反口縁、近江11～12様式で端部に面を持ち内彎直立口縁になる変化が見られる。近江10様式の外反口縁は遠江長胴甕B類、近江11様式の内彎口縁は遠江長胴甕C類の登場に関係しそうな変化と捉えておきたい。

また、植田氏が提唱した近江7様式～11様式まで見られるハケ目4分割技法は、確実なものは遠江では坂尻I・3式の長胴甕C類から、その傾向のあるものは坂尻I・2式からの長胴甕B類に見られる。この技法については畿内と遠江の中間地帯の伊勢湾岸でも、例えば東三河I・2並行期に見られた伊勢型長胴甕の東三河甕C・1類、遠江と関係のある外反口縁の東三河甕A・5類にもそれらしい技法が見られる。この技法については、伊勢湾岸の伊勢型長胴甕や駿河湾岸地域の駿河型甕でのハケ目調整の在り方が、今後重要な検討課題となてこよう。

坂尻Ⅱ式の指標となった胴部下半に接合痕を残し平底化する遠江型平底長胴甕の接合技法は、今のところ畿内からの影響とは思えない。伊勢湾岸地域でも顕著な例が見られないものの、東濃の可児市宮之脇遺跡A地点出土の7世紀代の平底の東濃型長胴甕に見られそうである(可児市教育委員会 1994)。形態は全く異なるが、駿河では7世紀前半の山本4期の指標資料となった兩南町伊豆通信病院34号住居出土の駿河型甕に胴部中央近くに顕著に接合痕を残すものがあり(両南町教育委員会 1984)、これらも遠江型平底長胴甕の接合技法の影響とも考えられる。小林正春氏のご教示によると、この接合技法に近いものは長野県下伊那飯田市周辺の新屋敷遺跡(飯田市教育委員会 1991他)等で見られるように5世紀代の球形胴平底甕、6世紀後半代の長胴化の見られる平底甕、7世紀代の平底の長胴甕に一貫として確認されるようである。これらの下伊那の甕類は、各時期共に外面調整は外面ヘラケズリないシガキ調整であるため、遠江とはかなり趣を異にする型式ではあるが、胴部下半の接合技法に共通性がありその出現は下伊那が先行する可能性が高いと思われる。よって本接合技法は、伊勢湾岸の外縁である遠江・東濃・駿河・下伊那に広域分布する可能性が高まった。またこの技法は下伊那地域が発生源になるのか、さらに坂尻Ⅱ式の長胴甕の薄手化の問題とも関係しており、同様な接合・薄手技法が遠江・東濃・駿河・下伊那地域における律令様式の長胴甕にも統一的に採用されていることが確認されるので、煮沸土器の古墳様式から律令様式の移行を考えるうえで非常に重要な技法になることは指摘しう。今後、この種の技法を持つ甕の分布範囲と存続時期の解明に期待したい。

遠江で顕著な外反口縁の台付甕と宇田型甕の近江甕C4類は、宇田様式の台付甕の変化と連動するように近江7様式までで消滅するようである。遠江の大型台付甕E類は、畿内では存在しない。管見で知うる限りではこの大型台付甕の分布は東三河・遠江・駿河西部域に限られ、坂尻I・3式以降

に確実な出土例が増えるようである。おそらく、遠江では鍋A類とした大型の調理用土器の形式を見る限り、煮沸に使用した痕跡はあまり確認されないため、本来の煮沸用鍋の用途を補完する形で台付壺が使用されるのではないかと推測している。

飯類も長胴甕と同様に近江6様式で韓式系土器から派生する近江の筒状すく形飯A1類は、7様式になると在地化し胴部下半が搾れ胴張りの底部に放射状の小穴を穿つ形態に変化する。遠江飯A-1類も胴張りで底部に放射状の小穴が見られることから一定の影響を受けていると思われるが、壺のような厚手の底部で把手に切り込みもないため、遠江においての変容もかなり見られる。また、近江飯A類は近江9様式になると底部が2穴に変化する。この底部が2穴になる飯は、伊勢～東三河まで見られるが、遠江には存在していない。近江6様式から見られる砲弾型のやや小型の飯である近江飯B1類は、坂尻Ⅰ-1式から見られる遠江飯B-1類と対応するものと思われる。近江飯B類は近江10様式まで存在が確認されるが、遠江では坂尻Ⅰ-4式まで見られるので、遠江のほうが終末の存続時期が長そうである。

鍋類も近江6様式で韓式系土器から出現し、把手付のものは鍋B類に分類されている。遠江での類似型式はかなり遅れて、坂尻Ⅰ-3式から把手が付かない遠江鍋A類が確認される。何れも当初は丸底で大きな口縁部の作りも類似型式ではあるが、遠江A-3類では平底化すること、近江11様式以降は下膨れの胴部形態に変化することなどから、6世紀末～7世紀初頭で畿内と遠江の各地域で独自の異なる型式変化を遂げると見られる。

以上のように近江との比較から見ると、遠江Ⅰ-1期から土師器の坏・高坏類、小型鉢、一部の壺、長胴甕、飯に畿内の影響が見られるので、遠江Ⅰ期の土器様式は畿内からの影響下で成立したことが分かる。しかし、畿内と比べると伝播の過程で遠江の各型式の土器群の変容も著しいことが確認されるので、今更言うまでもないことであるが畿内との中間地域である伊勢湾岸との比較が重要となる。さらに、6世紀中頃まで遠江の土師器は独自の型式変化をするが、長胴甕のハケメ調整技法や、鍋の成立などから見ると、坂尻Ⅰ-3式以降に新たな畿内からの影響が強く出てきていると考えられる。この新たな畿内からの影響は、遠江でも横穴式石室の小古墳や横穴墓といった後期群集墳の成立を見ることと密接に係わっていると想像され、ひいては坂尻遺跡で成立した古墳時代後期型の首長集落の成立ともリンクしてくる問題とも考えられるのである。

坂尻Ⅰ-1式以降の7世紀の様相は、長胴甕、鍋、壺の平底化現象を見る限り、遠江独自の変化が強く読み取れたが、長胴甕に強く現れた胴部下半の接合と器壁薄手技法については、伊勢湾岸地域とは異なる。遠江・東濃・下伊那・駿河との関係を見出し、煮沸具・貯蔵具に関しては新たな畿内色の参入を認めることはできなかった。

さてここで、須恵器の坏類の変化から西氏・奈良国立文化財研究所の編年との並行関係を大雑把に求めると、坂尻Ⅰ-1式が飛鳥Ⅰ、坂尻Ⅱ-2式が飛鳥Ⅱ～Ⅲ、坂尻Ⅱ-3・4期は飛鳥Ⅳ～Ⅴに並行すると考える。すでに指摘したように、遠江でも坂尻Ⅱ-2式以降在来の丸底坏は激減し、坂尻Ⅱ-3・4式ではほぼ消滅する。代わって赤彩色と暗文状のミガキ調整が施される特徴を有する坏C・D類、高坏M類、小型鉢K類は、飛鳥様式その物ではないが遠江での変容を受けた飛鳥色の強い型式として認定した。遠江坏C・D類は飛鳥ⅢA類、遠江高坏M類は飛鳥高坏B類、遠江小型鉢K類は飛鳥鉢A類の遠江での変容型式（奈良国立文化財研究所 1976）と考えている。

林部均氏の研究によると、静岡県でも静岡市伊豆谷横穴群から飛鳥Ⅱの畿内産土師器坏が出土していることに端的に現れるように、列島規模で飛鳥Ⅱから畿内産土師器の確認例が増加するという（林部均 1992）。林部氏も指摘していることであるが、今回の坂尻遺跡の調査成果や伊場遺跡の状況から見て評価の成立は7世紀第4四半期の天武朝（飛鳥Ⅲ）になる可能性が高く、官衙関連の土器と認定しうる飛鳥様式の土器の拡散現象が、飛鳥Ⅱからでは矛盾する結果となる。また、今回指摘し得た坂尻

Ⅱ-2式(飛鳥Ⅱ~Ⅲ)で見られる在地産の坏・高坏類の出現による畿内的な型式変換時期の結果とも矛盾する。この矛盾する結果は、坂尻Ⅱ-2式の中心時期と目される斎明・天智朝(655~671年)で、国際情勢の緊迫化に伴い評衡成立以前に列島各地で後に郡司に任命される有力地方豪族を政治・軍事的に再編成し、中央集権化を目論んだ大和王権の動きに伴う現象とも理解される。

坂尻様式の暦年代 確実に暦年代の与えられる遠江・駿河西部の資料は存在しないが、管見で知る限りでは天武朝の木簡を出土した伊場遺跡大溝の坂尻Ⅱ-3~4式の須恵器を含む土器群、坂尻Ⅱ-3・4式の須恵器と飛鳥Ⅳの坏A類を出土した焼津市笛吹段20号墳(静岡県埋蔵文化財調査研究所 1984)、第242図に示した森町観音堂横穴群2・6号墳(日本楽器製造株式会社 1979)で、坂尻Ⅱ-2式(1~3・6~8)~3式(5)の須恵器と飛鳥Ⅲの坏CⅠ類(9)と坏CⅢ類(4、林部前掲)、森町谷口横穴E-2群2号墳でも坂尻Ⅱ-2・3式の須恵器と飛鳥Ⅲの坏CⅢ類が出土している。ちなみに、坂尻遺跡でも市国一パイパス調査地区NSD21第2集積から、奈良時代前葉の須恵器と飛鳥Ⅲの坏CⅠ類(10)が出土している(林部前掲)が並行関係は合わない。なおこれらの飛鳥様式坏C類は胎土を見る限り在地の畿内系坏・高坏類と何ら変らないので、忠実な模倣品と考えられる。

須恵器の暦年代から考えると、遠江Ⅰ-2期に伴う須恵器がTK23・47並行で埼玉県行田市稲荷山古墳辛亥年銘鉄剣から、遠江Ⅰ-2期に471年の接点(埼玉県委員会 1981)が認められることが周知化されつつある。坂尻Ⅰ-3式に並行する須恵器が、押坂彦人大兄皇子墓と考えられている奈良県牧野古墳から出土しており、皇子の没年が一説によると587~600年と推定されている(広陵町教育委員会 1987)ので、坂尻Ⅰ-3式が6世紀第4四半期に存在していた可能性が指摘できる。坂尻Ⅱ-2式に並行しそうな奈良県明日香村水落遺跡出土の須恵器(飛鳥Ⅱ)から、水落遺跡が日本書紀に記載のある斎明6年(天智10年)に作られた水時計の遺構と考えられることから、坂尻Ⅱ-2式に660年~671年(奈良国立文化財調査研究所 1982)の接点が求められる。

これらの接点は、先に挙げた伊場遺跡大溝出土の木簡とその伴出須恵器、観音堂横穴2・6号墳と谷口横穴群E-2群2号墳出土の飛鳥Ⅲの畿内系土師器坏C類と在地須恵器(坂尻Ⅱ-2・3式)、笛吹段20号墳出土の飛鳥Ⅳの畿内系土師器坏C類と在地須恵器(坂尻Ⅱ-3・4式)の伴出関係、さらに今回の坂尻遺跡の調査で天武朝(672~686年)の683年以前に評価が設定された可能性から、坂尻Ⅱ-3・4式の須恵器が激減すると予測したと矛盾なく符合する年代である。よって、遠江Ⅰ-1期は5世紀第3四半期、遠江Ⅰ-2期は5世紀第4四半期、坂尻Ⅰ-1式は6世紀第1四半期、坂尻Ⅰ-2式は6世紀第2~3四半期、坂尻Ⅰ-3式は6世紀第3~4四半期前半、坂尻Ⅰ-4式は6世紀第4四半期後半、坂尻Ⅱ-1式は7世紀第1四半期~2四半期、坂尻Ⅱ-2式は6世紀第3四半期、坂尻Ⅱ-3・4式は6世紀第4四半期に該当するものと想定しておきたい。

古墳時代の下駄について(第246図~第248図)

第2章にて報告した古墳時代後期の下駄についての特徴はすでに触れたので、ここでは静岡県内における資料集成と、弥生~古墳時代の下駄を多く出土した東三河の田原町山崎遺跡の資料を補足資料として提示し、静岡県下における凡その弥生~古墳時代の下駄の採相を検討してみたい。

静岡県下での弥生~古墳時代の下駄の出土例は第2章でも述べた通り、今回の坂尻遺跡での2点を加え第245図・第246図の集成図に示したものは7遺跡9点となるが、近年の静岡市瀬名遺跡の調査でも1点の出土が確認されているので8遺跡10点となる。しかし、後述する通り5・7の2点については古墳時代には該当しない可能性が高く、4についても疑問点が残ったのでこの3点を除外し、他に登呂遺跡で2点の出土報告があるためこれを加えると、現時点では静岡県内における弥生~古墳時代の下駄の確実な出土例は6遺跡9点である。なお、三島市芝本町遺跡の資料については三島市教育委員会の鈴木敏中氏、静岡市登呂遺跡の資料は静岡市立登呂博物館の中野宥氏、掛川市梅橋北遺跡の資料

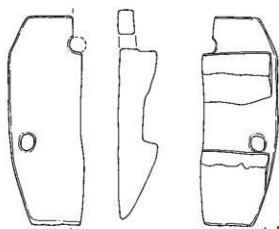
は掛川市教育委員会の松本一男・戸塚和美両氏のご配慮で資料の提供と伴出遺物のご教示を受けた。

静岡県最古の下駄は1の静岡市登呂遺跡（日本考古学協会 1978、静岡市立登呂博物館 1989）と2の沼津市雄鷹塚遺跡（沼津市教育委員会 1990）出土のもので、伴出土器から弥生時代後期後半～古墳時代初頭に該当すると考えられている資料である。なお1は表面は報告書からの転載・再トレースであるが、裏面については写真から作成したもので、正確な実測図でないことをお断りしておきたい。1は柾目の杉材を用い、台は踵よりも指先側のほうを幅広にする小判型の形態で、全長24cm、現存幅8cm（推定幅10cm?）、高さ4cmを測る大人用と考えられる連歯下駄である。最大の特徴は現在の下駄と異なり、両歯共に傾斜が前向きについており、鼻緒の前穴は右によっているため左足用である。穿孔道具は金属のノミ状工具を使用していると考えられ、舞切痕は観察されない。登呂遺跡では同形態の下駄が他に2点あり、1点は柾目の杉材、もう1点は板目のけやき材?を利用したものと報告されている。

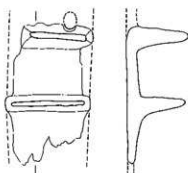
2は破片資料で木取り・樹種共に不明、残存部分から側面は直線的な形態で、現存長14.8cm、（推定長20cm以上?）、現存幅9.3cm（推定幅10cm?）、高さ6.7cmを測る連歯下駄と推測される。登呂遺跡のものと共通する特徴は、両歯共に傾斜が前向きについていることであるが、歯の高さは異常に高い。泥除け機能を高める工夫なのだろうか。鼻緒の前穴は左によっているため右足用である。

以上の県内最古の下駄2例を紹介したが、次に古くなりそうな下駄は梅橋北遺跡で出土したものである。6は柾目の広葉樹の材を用い、台は踵よりも指先側のほうを幅広にする小判型の形態で、現長23cm（推定長26cm?）、幅11cm、高さ4cmを測る大型で大人の右足用と考えられる連歯下駄である。最大の特徴は歯の基部が底部より狭いので小口面から見てハの字状に開くこと、歯の基部よりも台の幅が広いため、台部と歯基部の接合部分の側面に段が顕著に見られ、側面から見ても歯がハの字状に開く特徴が見られる。また、使用途中で前端部分が欠損したため、踵にあたる部分に新たに鼻緒前穴を穿孔して、再利用を意図した鼻緒穴が見られる。穿孔道具は金属のノミ状工具になるものと考えられるが舞切痕も観察されるため、舞切穿孔後にノミ状工具による調整という工程の分かる資料である。梅橋北遺跡では他に7の柾目の広葉樹を用い、小判型の台になる形態で、全長19.5cm、幅7.7cm、高さ2.4cmを測る右足用の連歯下駄が出土している。歯基部幅と台幅はほぼ同じであるため、台部と歯基部の接合部分の側面にほとんど段が見られない形態であるため、古墳時代の下駄の特徴はもたない。穿孔はほぼ円形になるため、舞切り穿孔になるのであろう。以上2点の下駄は、採集品であるため確実な時期が分らないが、採集後の2回の発掘調査では弥生時代中～後期の土器のほか、5世紀前半（見性寺Ⅳ式）や坂尻Ⅰ-1～Ⅱ-1式の古墳時代の土器、奈良・平安時代の土器までが出土している（掛川市教育委員会 1985、静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988）ので凡その該当時期は絞られる。ここで、後藤守一氏により指摘された（後藤守一 1936）山城国京都府鏡山（鏡塚?）古墳出土の石製模造品の下駄（東京国立博物館 1988）と、6の形態がほぼ同じであることが分かっているので、鏡山古墳の石製模造品の様相から見て、5世紀初頭の該当時期が6の下駄に与えられよう。この該当時期は梅橋北遺跡でも5世紀前半のまとまった資料の出土がある事実と良く符合する。ただし、中井正幸氏のご教示によると、大垣市曾根八千町遺跡でも6と同形態の下駄が6世紀代の土器と共に出土しているらしいので、この形態の下駄の存続時期は5世紀初頭～6世紀代の幅はもつといえる。7は形態から見て、奈良～平安時代に該当する下駄と考えられる。

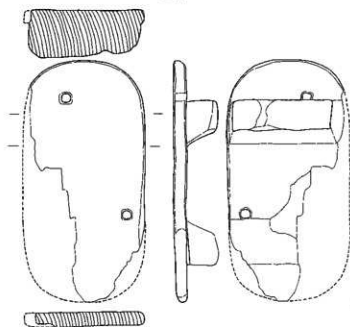
今回の調査で出土した坂尻遺跡と類似形態の下駄は、3の三島市芝本町遺跡、4の御殿川遺跡群の中島西原田遺跡（静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993）で出土している。3は柾目材を用いるが樹種は不明で、台は小判型の形態、全長25.4cm、現存幅12cm（推定幅13cm）、高さ4.8cmを測る大型で大人20.9cm、幅10.3cm、高さ3.6cmを測るやや小型で大人の右足用の連歯下駄である。両者ともに歯の基部よりも台の幅が広いため、台部と歯基部の側面に顕著な段が見られ、歯の高さが低い右足用の連歯下駄である。4も柾目材を用いるが樹種は不明で、台部は隅丸長方形の形態で、全長されないが側面



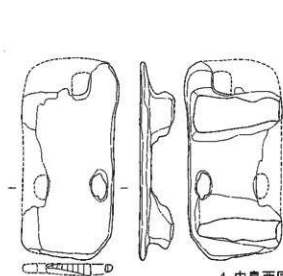
1. 登呂



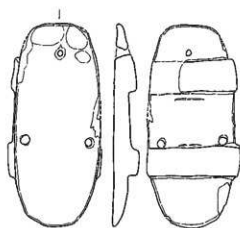
2. 雌鹿塚



3. 芝本町



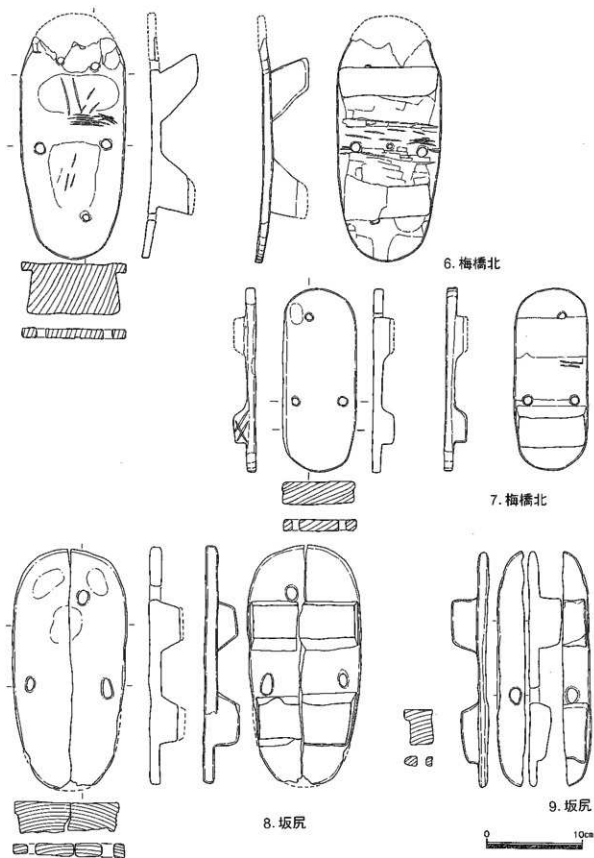
4. 中島西原田



5. 大谷川



第246図 静岡県下の古墳時代下駄資料集成図1



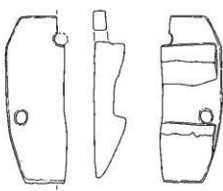
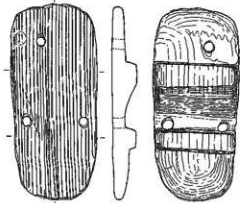
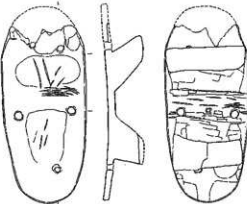
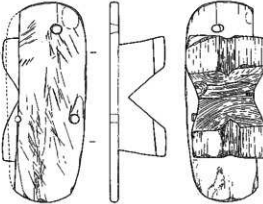
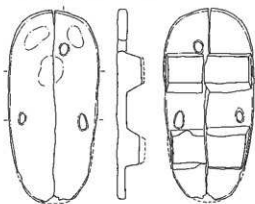
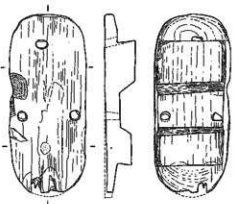
第247図 静岡県下の古墳時代下駄資料集成図2

から見ると歯がハの字状に外に開く特徴が見られる。板瓦遺跡の下駄の台部の形態は指部分は広く踵部分は狭くなる形態で、ほぼ正確な小判や隅丸長方形となる3や4の下駄とは若干異なる形態となるが歯の型式は一致する。何れも鼻緒孔の穿孔道具は金属のノミ状工具によるものと考えられる。3については古墳時代中期～後期の土器を出土する遺跡の採集品、4についても中・近世の遺物を多く出土した自然流路からの出土で時期が確定できない。この形態の下駄も多少デフォルメされているが、後藤守一氏により紹介された群馬県藤岡市白石稲荷山古墳で5世紀中頃の石製模造品の下駄に類似形態を見ることができ(群馬県 1981)。よって、今回の板瓦遺跡で出土した下駄の該当時期(6世紀後半～7世紀初頭)と石製模造品の下駄の該当時期を符合させると、本形態の下駄の出現時期は5世紀中頃と考え、7世紀初頭まで存続していた可能性が指摘しうる。ただし、中島西原田遺跡の下駄については、歯の形態は古墳時代のものに類似するが、やや小型振りであること、他の伴出した90点近くの下駄のほとんどが中世に近い時期に該当することが指摘されているので、報告書の所見通り古墳時代の特徴を残した中世の下駄の可能性も大いにある。また、破片資料なので図示はしていないが浜松市伊場遺跡でも小判型の形態になりそうで、古墳時代後期と報告された下駄の出土例(浜松市教育委員会 1978)がある。全長は分からないが幅は10.6cmであり、板瓦遺跡の下駄の幅が13cmとなるので、さほど大きな下駄にはならないだろう。中島西原田遺跡の下駄と近い数値となる可能性があり、全体の形態も分からないし報告書に実測図の提示もないので検討のしようがない。よって、今回は古墳時代の出土例から除外し伊場遺跡での全形態の分かる資料の増加を待ちたい。

5の大谷川遺跡宮川6区SR313で出土した下駄は、古墳時代後期の土器と共に出土したと報告されているものである(静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989)。柁目材を用いるが樹種は不明で、台部は小判形の形態、全長21.3cm、幅9.2cm、高さ3.1cmを測るやや小型の大人の左足用と考えられる連歯下駄である。歯の基部と台の幅は同じであるため台部と歯基部の側面に顕著な段は見られない。高さが低いので確実ではないが、側面から見ると歯が外側にハの字状に開かない。前側の鼻緒孔は中央にあり、歯の形状、大きさ、前鼻緒穴の位置の何れも古墳時代に共通する下駄の特徴とは異なるため、古墳時代の下駄になるか検討を要する。現段階では古墳時代の形態からは除外しておきたい。

以上の出土例から、静岡県下における古墳時代の下駄を分類すると1・2の形態をA類とし、歯の高さで1をA1類、2をA2類と分類し、存続時期は弥生時代後期後半～古墳時代前期、6の形態をB類として、存続時期は古墳時代中期初頭～後期、3・4・8・9をC類として古墳時代中期中頃～後期の存続幅があると考えた。すなわち、A類は弥生後期後半～古墳時代前期に限定できる型式であるが、B型はC型に僅かに先行して中期初頭から、C型は中期中頃から出現し、古墳時代後期(7世紀代含む)ではB・C型両者が併存している。下駄が湿地での足の汚れを防ぐ用途の履物との前提から考えると、A2類とB類は高下駄、A1類とC類は低下駄となり、前者のほうが泥よけの機能は高い。あるいは前者と後者では用途や使用場所が違う可能性も考えられる。

さて、この形態分類を山崎遺跡の低湿地包含層で出土した古墳時代の下駄にあてはめると、第247図4～6に示した通り全型式が存在していることが分かる。伴出した包含層の土器も弥生時代後期後半～古墳時代後期のものが大半であり、全型式のものが出土しても矛盾はしない状況である。また、山崎遺跡ではA類は1点、B類は2点、C類は3点出土しており、一遺跡では突出して多い量と種類である。山崎遺跡は渥美半島でも屈指の古墳時代中期～後期の集落と考えられる遺跡である。稀少性と首長古墳に特徴的な石製模造品に下駄が見られることから、古墳時代の首長の履物になるとの意見は多い。また、市田京子氏が指摘した日本出土の古墳時代の下駄のルーツを中国に求め、泥湿地での儀式に用いた豪族の履物としての用途説(市田京子 1987)も魅力的である。前節で述べたように板瓦遺跡も古墳時代後期の豪族居館の可能性が高い遺跡であるが、その出土地点は残念ながら居館部からの出土ではなく、居館部の周辺遺構と有力農民の居住地区画溝である。古墳時代における木製下駄の用途と性格は、出土遺跡や遺構の性格がもう少し判明した段階で検討されるべきものだろう。

地域 時期	静岡県内	愛知県山崎遺跡
A類(弥生後末～古墳前)	 (A-1類) 1. 登呂	 (A-1類) 4
B類(古墳中期初頭～後期)	 2. 梅橋北	 5
C類(古墳中期中～後期)	 3. 坂尻	 6 0 10cm

第248図 静岡県・愛知県三河地域の弥生～古墳時代下駄分類図

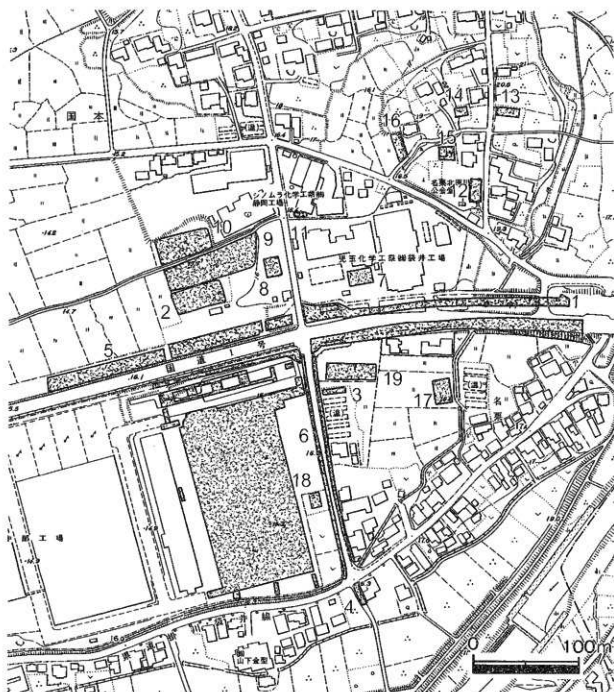
第3節 総括

坂尻遺跡は昭和55年から始まった袋井市教育委員会の国一バイパスの調査で、佐野郁衛あるいは駅家と考えられる根拠となった多数の墨書土器や掘立柱建物、その下層に遠江では屈指の古墳時代後期の集落が存在していることが判明し、静岡県下でも現在国指定史跡の志太郡衙に比定されている藤枝市御子ヶ谷遺跡、布敷郡衙・栗原駅家と目された浜松市伊場遺跡と共に、当時注目されつつあった東海地域の地方官衙遺跡として全国的に注目された。その後、袋井市教育委員会は坂尻遺跡の重要性から、第248回に示した通り市教育委員会や県埋蔵文化財調査研究所の国一バイパスの大規模な発掘調査ばかりでなく、温室や倉庫などの小規模開発まで地元や原因者の方々のご協力を得ることにより、なんとか地道に発掘調査を継続し多大な成果をあげてきた。

今回の坂尻遺跡の発掘調査は、大規模工場の建設が原因であったため、平面積18000㎡、延面積40000㎡以上にのぼる、袋井市始まって以来の大量の発掘調査となった。調査期間も原因者の事情を考慮し、一部の地区を除いて1年以内という厳しい条件で、結果的には調査担当者ばかりでなく発掘作業員、測量業者等に相当無理な工程で仕事を依頼し、実施することになってしまった。しかし、原因者である大和ハウス工業株式会社からは、相当高額となった経費の面以外でも多方面に渡る全面的な協力が得られ、関係各位の努力も実り、この困難な発掘調査も予定した期限内に無事終了することができた。今から思うと薄氷を踏む思いの発掘調査計画で、よく現地調査を期限内に終了することができたことと担当者の一人として感無量であるとともに、また寿命が縮まる思いもしている。

さて、本章の分析で明らかにし得た膨大な資料から、古墳時代後期の首長居館の姿、郡衙施設の一部、首長居館から郡衙（評衙）への移行の問題、古墳時代前期の集落の様相など、今までの坂尻遺跡で得られた情報量を遥かに凌駕する膨大かつ貴重なデータが、原因者から提供された高額な費用をかけた発掘調査と引き換えに蓄積された。このデータは今後袋井市域の歴史を語るうえの基準資料となるばかりでなく、静岡県の古代史を語るうえでも重要な資料となっていくことは明らかだろう。また、坂尻遺跡の重要性も更に高くなったことを、本書の刊行で証明し得たと思う。重要な遺構の一部は現在工場の下に眠っているが、ほとんどの遺構は重層的な発掘調査のため残っていないので、本書で提示した資料は再発掘調査で2度と検証できない書面上のデータである。よって、その貴重なデータを詳細に報告する担当者の当然の責務（発掘調査の記録保存の目的）からすると、本書がその重責を果たしているものかどうかは、本書で示されたデータを再構築して生きた歴史を作る人々の評価に委ねたい。しかし、包含層の土器は予算上の都合で特殊遺物を除き一切割愛したものの、遺構内出土の小破片の土器を含むほとんど全ての遺物を掲載することに動めたので、今後生きた歴史資料の構築のため活用されていくことを期待している。また、本書でも十分に明らかにできた坂尻遺跡の重要性に鑑み、是非とも坂尻遺跡の周知化されている範囲ばかりでなく、遺跡周辺部の詳細な調査が大規模・小規模に関わらず継続されることを希望したい。

最後になりましたが、発掘調査後遅れがちな報告書の刊行に向けた出土品の整理を温かく見守り、本書の刊行を辛抱強く待ち続けてくれた大和ハウス工業株式会社中部工場長の永井徹さんや、現地調査の段階から我々調査担当者の数々の難題を何とか実現し調査の無事終了に向けて努力してくれた尾崎雅己さんを始めとする、大和ハウス工業株式会社の関係者の皆様方のご協力と励ましに対する感謝を明記して、総括のしめくくりの言葉といたしたい。



- | | |
|-----------------------------|-------------------------|
| 1 袋井バイパス調査地点(袋井市教育委員会) | 2 大庭塗装工業所建設調査地点 |
| 3・17 メロンハウス建設調査地点 | 4 県営圃場整備事業調査地点 |
| 5 袋井バイパス調査地点(静岡県埋蔵文化財調査研究所) | 6 県道掛川袋井線道路調査地点 |
| 7 児玉化学工業工場建設調査地点 | 8・9・10 シノムラ化学工業工場建設調査地点 |
| 11 シノムラ化学工業事務所増設調査地点 | 12 名栗北原川公会堂建設調査地点 |
| 13・16・19 倉庫建設調査地点 | 14・15 個人住宅建築調査地点 |
| 18 大和ハウス工業工場建設調査地点 | 19 倉庫 |

第249図 坂尻遺跡歴代発掘調査区位置図

【 参考文献 】

- 湖西市教育委員会 1983 『天神山古墳群発掘調査報告書』
 湖西市教育委員会他 1987 『西笠子第64窟跡発掘調査報告書』
 湖西市教育委員会他 1991 『加賀山第1～3地点・古見第14・16地点発掘調査報告書』
 額江町教育委員会 1993 『川久保船渡遺跡』
 浜松市教育委員会 1978 『伊場遺跡遺物編1』
 浜松市教育委員会 1982 『向山遺跡・谷上古墳群発掘調査概報』
 浜松市遺跡調査会 1984 『半田山古墳群A小支群・半田山B遺跡』
 浜松市教育委員会 1980 『伊場遺跡遺物編2』
 浜松市遺跡調査会 1983 『国鉄浜松工場内遺跡Ⅵ次発掘調査概報』
 浜松市教育委員会 1987 『伊場遺跡遺物編4』
 浜松市教育委員会 1990 『伊場遺跡遺物編5』
 浜松市教育委員会他 1990 『郡田地区発掘調査報告書下巻』
 浜松市教育委員会 1991 『瓦屋西古墳群』
 浜松市文化協会 1992 『有玉西土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書下巻』
 浜松市文化協会 1993 『城山遺跡Ⅴ』
 浜松市文化協会 1994 『梶子遺跡Ⅲ』
 磐田市教育委員会 1974 『遠江見性寺貝塚の研究』
 磐田市教育委員会 1984 『句坂上2号遺跡遠江国分寺跡周辺発掘調査概報』
 磐田市教育委員会 1989 『句坂上Ⅳ遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
 磐田市教育委員会 1989 『大久保・高山古墳群発掘調査報告書』
 磐田市教育委員会 1994 『御殿・二之宮遺跡第8次調査のあらまし』
 磐田市教育委員会 1994 『野原遺跡発掘調査報告書』
 磐田市教育委員会 1995 『句坂下原古墳群第5次発掘調査報告書』
 袋井市教育委員会 1982 『長者平古墳群埋蔵文化財発掘調査報告書』
 袋井市教育委員会他 1984 『坂尻遺跡―県道掛川袋井線改修工事に伴う緊急発掘調査報告書』
 袋井市教育委員会他 1985 『坂尻遺跡―序文・古墳時代編―』
 袋井市教育委員会 1985 『坂尻遺跡―昭和59年度緊急発掘調査報告概報―』
 袋井市教育委員会他 1985 『土橋遺跡―基礎資料編―』
 袋井市教育委員会 1988 『愛野向山A-8号墳 愛野向山墳墓群 愛野向山Ⅳ遺跡』
 袋井市教育委員会 1989 『新門坂古窯跡』
 袋井市教育委員会 1990 『権現山遺跡』
 袋井市教育委員会 1990 『若作遺跡―若作古墳群』
 袋井市教育委員会 1991 『坂尻遺跡―平成2年度メロハウス建設に伴う発掘調査概報―』
 袋井市教育委員会 1993 『平成4年度補助金関係発掘調査報告書』
 袋井市教育委員会 1993 『袋井の前方後円墳―袋井の首長墓を考える―』
 袋井市教育委員会 1993 『川田藤藏遺跡』
 袋井市教育委員会 1994 『山田原遺跡Ⅰ』
 袋井市教育委員会他 1994 『岡子塚九号墳出土遺物保存処理報告書』
 袋井市教育委員会 1995 『小山角田遺跡』
 豊岡村教育委員会 1983 『押越・社山古墳群調査報告書』
 浅羽町教育委員会 1984 『青木・馬場第1・第2遺跡』
 浅羽町教育委員会 1991 『青木遺跡』
 浅羽町教育委員会 1992・1993 『古新田Ⅰ（遺構編）・Ⅱ（遺物編）』
 日本楽器製造株式会社 1979 『観音堂横穴古墳群発掘調査報告書』
 掛川市教育委員会 1983 『行人塚遺跡発掘調査概報』
 掛川市教育委員会 1985 『梅嶺北遺跡発掘調査報告書』
 掛川市教育委員会 1988 『高田遺跡発掘調査概報』
 掛川市教育委員会 1989 『天段古墳・東沢遺跡発掘調査報告書』
 菊川町教育委員会 1985 『三沢西原遺跡』